
イマジネーション・ラグーン

遊森 謠子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

イマジネーション・ラグーン

【EZコード】

N4764U

【作者名】

遊森 謠子

【あらすじ】

小説家が、自分の書いた物語の中で創造主（女神）になるのはわかるよ。でもなんで、しがない出版社員の私が物語の中にトリップして、巫女になるの！？二重人格の神官との微妙な恋愛が進行するなか、世界は少しづつ変化を遂げて行く……私、帰れるの？ちよっぴり謎解き要素もありの、異世界トリップ恋愛ファンタジー。9／20本編完結、12／15その後完結。「その後のふたり」の章は現代恋愛ものになります。そちらだけ読む方のために、章の最初に本編あらすじ（ネタばれ版）を入れました。

プロローグ

うちみたいな弱小出版社でも、忙しいものは忙しい。

今日は、出版社で最も忙しい日の一つ、『見本出し』の日だしね。始業してすぐ、宅配のお兄さんが重い段ボール箱を担いでやつてきた。中には、茶色のクラフト紙に包まれたかたまりが二つ。印刷所から見本として送られてきた、出来立てほやほやの新刊本です。ああ、紙とインクのいい匂い！

これを数か所ある取次に持つていけば、仕入れ部数が決定されて全国の書店に配本される流れになるんだけど、取次が見本出しを受け付けるのは、基本的に午前中のみ。

ここは新宿の外れ、あまりのんびりしていると、大手取次のあるお茶の水や飯田橋で午前中のうちに見本出しを済ませることができなくなる。社員たちがあわただしく見本本を袋に詰め、出かけていった。

すっかり閑散とした部屋で、一人でお留守番の私はため息をついた。

やれやれ、見本を送りだすとほつとするな。さて、配達する分の見本出しも終わらせちゃおう。

遠方の取次宛ての伝票を書こうとした私は、開け放したままのドアからふんわりしたシフォンのチューリックがのぞいているのに気がついた。

「あっ、愛海先生！」

「おはよつじぞいます、璃玖さん。ごめんなさい、今日つて忙しい日だった？」

エッセイストの愛海先生 もちろん名字もあるけど、ペンネームでは下の名前だけを名乗っている だった。

つひの出版社から出している雑誌に連載を持っているので、普段は雑誌部の方と付き合いのある先生なんだけど、その連載をまとめた本をわが書籍部で出している関係で、私も顔見知り。

そうそう、私の名前は「富代 璃玖」と書つんだけビ、「私は海で、富代さんは『陸』なのね！」

と愛海先生が面白がってくれて、以来下の名前で呼んでくれる。フレンチリーな先生だ。

これで、たったさりストレートの長い黒髪に、テレビ出演依頼が引きも切らないという美しい顔なのだから……天は二物を「えらぶよなあ。

「おはようございます！ 今日は新刊の見本出しで、出払つたりやつてるんです。倉本に『用ですか？』

愛海先生の本の担当をしている主任の名前を上げると、愛海先生はうなずいた。

そして目元をほんのり染めながら、大判の封筒を私に見せるように胸の前に上げた。

「例のファンタジーね。設定資料と、出だしの所だけ書いたから、見てもらおうと思って」

思わず、わお、と声が漏れる。

愛海先生、もともとはエッセイストじゃなくて、ファンタジー小説家になりたかったのだそうだ。今までエッセイを書いて経験を積むうちに、書きたいことが表現できるようになってきたと実感したので、子どものころからずっと温めてきた物語を書きたいと思つたんだって。

それで、うちの倉本主任に、世に出せる作品かどうか見てもらつ

たい、という話を持つてきたのがほんの三日前。

人気エッセイストが書くファンタジー小説だもん、話題性は十分だよね！

ちなみに、愛海先生はいまどき珍しい手書き原稿派。直接持つてきてくれたんだ。

「私も読みたい！ 倉本の次に読んでいいですか？」

「は、恥ずかし……！ ん、でも感想聞きたいな」

はにかむ愛海先生。そこで私は、お茶も出していないことにやつ

と気がついた。

「あ、すみません、どうぞお座りになつて下さい！」

ソファのあるパーテーションの向こうに手を向けると、愛海先生はニッコリ笑つて、

「ううん、ちょっと寄らせてもらつただけだから、いいの。これ、倉本さんに渡しておいて下さい」と封筒を私に渡した。

「それじゃ

軽く会釈をして、身をひるがえす。ツヤツヤの黒髪が、背中でさらりと揺れた。

封をしていない封筒を、指先でチラリと開いてのぞくと、原稿用紙の一一行目に綺麗な文字で『プロローグ』と書かれているのが見えた。

うわー、倉本主任、早く帰つてこないかな！

うづうづしている所へ、電話のベル。書店からの注文電話だろう。私は急いで電話を取りながら、封筒を倉本主任のデスクに置いた。

結局、その物語は、プロローグから先に進むことはなかつた。

その夜、愛海先生が、交通事故で亡くなつてしまつたから。

倉本主任は部屋に入つてくると、塩が入つていたらしい開封済みの小袋をごみ箱に捨てた。

自分のデスクの足元に鞄を置き、黒いネクタイの結び目に指を入れて緩める。

「お疲れ様です……」

声をかけると、うん、とうなずいて、

「ファンがずいぶん来てたよ。……残念だな」

と椅子に沈み込んでため息をついた。

今日は、愛海先生のお葬式だった。先生のご実家は、静岡県の海上面した街にあり、ご実家近くの斎場で執り行われたそれに、倉本主任を始めうちの会社から何人かが出席していた。

倉本主任は、デスクの上から封筒を取り上げた。愛海先生の原稿だ。

「この原稿、ご遺族にお返ししないとな。雑誌部の方でもお返しするものがあるって言つてたから、一緒に入れてもらつて」

「はい」

私は手を伸ばして、封筒を受け取る。この封筒を持つてはにかんでいた先生の笑顔が思い浮かんで、目頭がじわりと熱くなつた。

愛海先生……いつか、作家御用達の、お茶の水の『山の上ホテル』でカンヅメになれるくらい、有名な作家になるんだつて言つてたのに。

倉本主任はロッカーで普通のスーツに着替えると、ホワイトボードの予定表に『 印刷 直帰』と書き込み、

「それじゃ、お疲れ」

と私の肩を一つ叩いて、また鞄を下げる部屋を出でいった。

時計は、夕方の五時を回っていた。このくらいの時刻になると、書店からの注文電話も減って、その日にやり残した仕事をゆつたりと片付けることができるようになる。

部屋には、私一人だった。個人のお客さんのデータを入力し終わると、椅子の背にもたれてぐうっと伸びをする。

机の上の封筒が目に入った。

「……先生、約束通り、読んでもいいですか？」

私はぼそっと弦き、そつと合掌すると、封筒から原稿用紙を取り出した。

薄緑の罫線の中のきれいな文字が、すべるように、私を物語の世界へと誘った。

プロローグだけなのに、かなり入りこんで読んでいたと思つ。さらさら……

何かがこぼれ落ちるような音が耳に入り、私は我に返つた。

どこから聞こえるのかと、原稿から顔を上げて、あたりを見回す。

「……えつ？」

パソコンのディスプレイが、角の所から砂のように崩れ始めていた。

がた、と立ち上がると、原稿用紙がデスクの上に落ちる。そのデスクも、角から白く変化してさらさらと崩れしていく。

振り向くと、椅子も。キャビネットも。コピー機も。

やはり白っぽく変化しながら崩れ落ち、床に砂の山を作つていった。

「や、なんなのこれ……！」

後ずさつた足が、ザツ、と砂を踏む。

とにかく部屋を出なくちゃ！

踵を返した私は、ハツとして天井を見上げた。

蛍光灯が一気に崩れて、大量の砂が私の上に降つて来るところだつた。

「うわ……つふ……！」

私は手で顔をかばいながらしゃがみこみ、目を閉じた。ざあっ、と身体に砂が降り注ぐ……。

次に目を開けた時、視界に飛び込んできたのは、抜けるような青空。エメラルドグリーンの海。真っ白な砂浜。

私は穏やかな波打ち際の砂の上に、たつた一人で座りこんでいた。

1 見覚えのある女神

「……？？？」

私は、一通りあたりを見渡した。

と言つても、何しろ、空と海と砂だけ。シンプル。
海の向こうは水平線、砂の彼方は地平線。実にわかりやすい。
人の子一人いないし、家の一軒、車の一台もなし。あつという間に見終わってしまう。

……こんな場所、日本にあつたつけ。鳥取砂丘だつて、もつと起伏があつて、林なんかも見えて……。
いや、だいたい、会社にいたはずなのに、なんでこんなこと? いつの言葉の一つも思い浮かばない。

身じるぎすると、服の隙間に入り込んだ砂が、ざらざらして気持ち悪い。

……とりあえず、身体から砂を落とそう。
私は立ち上がりると、スカートのウエストからシャツを引っ張り出し、シャツの胸元をバタバタやつて服の中の砂を落とした。
髪をまとめたバレッタも外して、頭を振る。天然のウエーブヘアからも、砂がパラパラと落ちる。

手足だけでも流そう。

社内用に履いていたミュールを脱ぎ、砂の入りこんだストッキン
グも思い切つて脱いでしまって、私は用心深く波打ち際に足を浸し
た。少し温まつた海水が、さざなみを寄せてくる。

数歩進んで、膝下まで海につかり、私はかがんで手を洗つた。
ペロリ、と指をなめてみると、普通に海水だつた。塩辛い。
鮮やかな青をした小魚が、ちゅんちゅんと足にぶつかつて来る。

その小魚の影が、砂地に映つて揺れている。

鼻の下に、脇の下に、じわりと汗が浮いた。

……このままここに立っていたら、日焼けして真っ赤つかのヒリヒリで大変なことになるんじゃないだろうか。これだけ天気が良いんだから。でも、日陰になるような場所がない……。

もう一度当たりを見まわしてから、海に視線を戻すと、少し離れた水面に、人が立っていた。

真っ白な長い髪、アクアマリンの瞳。透き通るように光っていたけれど、その姿は間違いない、

「愛海先生！」

私はこの状況に陥つてから、初めて声を上げた。

でも、様子が変。いや、髪や瞳の色も変だし水の上に立ってるだけでも十分変なんだけど。

愛海先生の身体は、半分透けていた。瞳はぼんやりしていて、今にも眠りそうな表情。

服装も変わつていて、インドのサリーみたいに上半身に斜めがけした白い布が、風もないのにふわりと浮かんで足元を取り巻いている。ウエストは少し肌が見えていて、その下はロングスカート。そのスカートも白く、裾がふわりと広がつて水中に没していた。額や首、手首には、虹色に光る貝殻のようなアクセサリーが連なり、絡まりついている。

その姿は先生の美しい顔と相まって、まるで海の女神のようだつた。

先生はゆつくりとこちらに視線を向けた。

『…………璃玖さん……？』

「そうです！ 聞こえますか！？』

私は夢中だつた。だつて、こんな状況で知つてゐる人に会えたんだもん。

たとえ相手が死んでたつて、すがりつくでしょ普通！ お花畠の向こうにおばあちゃんが見えたなら、そつち逝つちゃうでしょ普通！ 「エエはど……！」

一步踏み出した時、ずるつ、と足元の砂が崩れ落ちた。

「一」

声もなく、私は頭まで水中に沈んでいた。遠浅だと思つていた浜が、ここから急に深くなつっていたのだ。

うそ、私、泳げないんだけど……！

必死で水を搔いて、水上に頭を出そつとして その前に、水中の景色が目に飛び込んできた。

ピンクの魚の群れは帯がたなびくように泳ぎ、黄色の魚の群れは海草の森をかすめて飛び去る。

海底は一面、珊瑚礁。木々のよつて密集する珊瑚、段々畑のよつに連なる平らな珊瑚。黄色、紫、緑に青……色が海上からの光線に照らされて乱舞する。

そんな華やかな世界を、誰かが泳いでくる。愛海先生だ！

でもそれは、あまりにファンタジックな光景だつた。

海水を巻き込んで泡の渦を作りながら、私の周りを一周して目の前で止まつた先生の身体は。

下半身が白いうろこにおおわれ、時おり虹色に光つていた。

人魚？ いや、なんか違う。下半身が長すぎ！ 全長三メートル以上ある。ヘビ？ ドラゴン？

先生はふわりと微笑み、私の右手をつかむと、水面ではなく底へ向かつて泳ぎ出した。

な、なんで、なんで！？　ダメーっ、溺れるーーー！

だんだん気が遠くなっていく。

気を失う直前、海の底の珊瑚の林の間に、紺色の髪をした男の人
が立っているのが見えた気がした……。

2 総じても描けない（前書き）

夏なので、涼しく行わねましょ。つ。

2 絵にも描けない

目が覚めて辺りを見回した瞬間、私は悶絶しそうになつた。
なにこれこいつばずかしい　　！！

私は巨大なホタテ貝の中にいた。開いた貝殻の中にふわふわのベッドがしつらえられていて、その中に身体に白い布を巻き付けるようにして横たわっていたのだ。

ベッドの真ん中に立つて手で大事なところを隠して、「はい女神様の誕生でーす」つて世界の名画「ラ・トゥル・ヌイ」でもしろと…？
あまりの恥ずかしさにベッドから逃げ出し、ベッド脇に座り込んであたりを見回す。白い天井と壁、何か光るものがあちらこちら埋め込まれた床、丸テーブルに長椅子。
そして、大きな丸い窓が目に入った。

……まるで、水族館の中にいるようだつた。

私が今いる部屋は、信じられないことに海中にあるらしい。

窓の向こうには海底の珊瑚礁が広がり、色鮮やかな魚たちがすぐそばを横切る。白い、ややドーム状の建物の連なりも見える。視線を上げてみれば、海面に揺れる光が見えた。

頭の中で、「竜宮城に来てみれば」という、あの歌がぐるぐる回つている。

私は、愛海先生の書いた小説のプロローグを思い出していた。
あの物語は、一人の女の子が海で溺れかけ、海の底のお城にたどり着く所から始まっている。

まさか、まさか、ここは……？

いきなりノックの音がした。

ヒィ、とか変な声を上げていると、ドアが開いて、紺色の髪を結い上げた妙齢の女性が入ってきた。ベアトップのヘソ出しルック、膝丈の巻きスカートを着ている。両手に服らしきものを抱えていた。

「まあ、お気づきになつたのですね、巫女さま」「まあ、お氣づきになつたのですね、巫女さま」

ぱり、とほほ笑むと、田じりに笑いじわが刻まれた。

「コ？ 誰それ？」

「全身びしょ濡れでしたので、失礼ながら服は脱がさせていただきました。こちらにお召し替えになつてください」

女性は笑顔でベッドの縁に服を置き、

「私はズーイと申します。外に控えてありますので、終わりましたらお呼び下さい」

と出でいった。ドアが閉まる。私はただ、口をパクパクさせていた。

ふ、服……とにかくこの裸同然の格好じゃヤダ。服。

広げてみると、その服は愛海先生が着ていたのと同系統で、インドっぽい雰囲気。だけどサリーみたいな布はなくて、何と言つか……か、身体の線が出まくりですね。

トップスはピタリみたいな感じなんだけど、襟ぐりは広くV字に開いているし、丈が短くておへそは丸見え。もし私の胸があと一力ツプ小さかつたら、馬鹿にすんなー！ とか、どうせどうせ…とか叫んで着なかつたかも。

下は足首までの巻きスカートにサッシュベルトなので、足を晒す必要はなくてほつとしたけど。

気がついたら、砂浜において来たはずの私のコールが部屋に置いてあって、履きなれたそれを履くことにした。

とにかく、ここはどこなのかを確かめよう。

「す、ズーイさん」

ドアの外に声をかけると、さつきの女性が顔を出してくれた。

「よくお似合いですよ」

「あの、ここは、なんて言う場所ですか？」

「名前ですか？ ラグーン城です」

……うそでしょ……。

私は立ちつくした。

それは、先生の設定資料集に書いてあつた名前だ。読んだ時、先生ネーミングセンスないな、『珊瑚礁城^{ラグーン}』って、まんまじゃん！ って思ったのを覚えてる。

それに、ズーイさんの髪の色、瞳の色も、先生が設定したラン城の住人そのままだった。

私はパツと自分の髪を引っ張つた。勢いがつきすぎて痛いけど、その痛みで夢ではないことが分かつたし、私の髪は黒かつた。黒が好きなのでカラーリングはしない。

なんで、しがない一十六歳の私が、『ラグーン城』にいるの！？

「神官が、あなたを発見されたのですよ。何でも、女神マーナが連れて来られたとか……」

話しかけられて、我に帰る。

「は、はあ」

「詳しく述べて神官にお聞き下せ。目が覚めたらお会いしたいとのことです、大丈夫ですか？」

心臓がバクバクしすぎて頭がガンガンするほどだけど、とにかくついて行くしかない。この部屋にいても現状は把握できない。

ここが先生の作った世界だと、仮定するとして。

それなら、たぶんそんなに危険はない、と思う。初めて物語の構想を聞いた時、「あんまり悪役とか出でこないから、物語としてはねるいかもしれないわ」なんて言ってたもん。

「わかり、ました」

私はどいにかうなずいて、ズーアさんの後に続いて部屋を出た。

お城はいくつもの建物が渡り廊下でつながっていて、合間に小さな庭がたくさんある。一つ一つにテーマカラーがあるらしくて、ピンクの珊瑚の林になつていてる庭、緑のマリモみたいなものがたくさん転がつた庭、黄色のイソギンチャクが絨毯のように広がつた庭なんかがあつた。

上を見上げると、遠い水面で陽光がきらめいて揺れ、魚の群がゆつたりと過ぎていった。

一番大きな建物に入った。白い珊瑚の壁や床に、虹色の貝殻があちこち埋め込まれてきらきらしている。壁には等間隔で巻き貝が飛び出していて、殻を透かして中から光があふれている。これが照明なのかな。

廊下の突き当たりは、ドアなどはないまま大きなホールにつながつていた。

そこは天井がなく、巨大な金魚鉢みたいな形をしていて、見上げるとやつぱり陽光きらめく水面が見えている。金魚鉢の縁からは、巻き貝が縦にいくつもつながつたものがたくさん下がつていて、様々な色に光っている。

奥は一段高くなつていて、やはり珊瑚でできているのか真っ白な長椅子が一つ。

そのやたら大きな長椅子の端っこの方に、せつき氷を失つ前に見た、あの青年が座つていた。

3 出版社員イ「ール巫女

陽に焼けた肌、一つに結ばれた紺色の髪、青のよつな緑のような不思議な色の瞳。

年のころは、私と同じかちょっと上くらい。その青年は、膝丈の白い着物のような服にサッシュベルトを締め、ぴたりしたズボンにサンダルを履いていた。ひろがつた袖には、異国風の模様が入っている。

「「」苦労さま。下がつていいよ」

青年に言われ、ズーイさんは軽くひざを曲げるよつなあいさつをして、あっせりと行つてしまつた。

「どうぞ。具合はいかがですか？ 不自由なことはありませんか？」長椅子の、空いたスペースを示された。一つの長椅子に一緒に座るんですか？ 近……。

「はい……大丈夫です」

私は返事をしながら、反対の端に浅く腰掛けた。

「僕はラグーン城の神官で、ザンと言います。あなたは？」偉ぶるでもなく、自然体で尋ねられた。

「あつ」

知つてゐる、ザンって名前……これも設定資料にあつたよ。確か結構、重要な役回りだつたはず。

「ええつと、璃玖、です」

「リク。よろしく」

「よよよよろしく……」

なんだか、現実感がなくて変な感じだ。愛海先生の作ったキャラクターと話をしているつて。

私が読んだプロローグには、こんな自己紹介シーンはなかつたけど、これはキャラクターがすでに自分の意志で動いているってこと？ それとも愛海先生の頭の中では、すでにこういつ会話もできあがつてたのかな。

「あなたは、どこから来たんですか？」

聞かれて、正直に答える。

「職場からです。働いていたら、いつの間にか……来てしまったみたい」

「女神マーナの元で、働いていた？」

ええっと……なんて言えばいいのかな。本を作る仕事だと書いてしまうと、この世界が未完の物語の世界だと、伝えることになりはしない？

それがいいことなのか、私には判断つきません！

「愛海先生の元でというか……愛海先生の考えたことを他の人に伝える仕事というか」

「やはり、あなたは女神の言葉を伝える巫女なんですね」

あれ？ いいのかこんな方向で？

「海の中を、女神マーナに手を引かれてあなたがやつってきた時は驚きましたが、きつとこれは我々にとつて僥倖に違いない」

ザンは、屈託のない笑みを浮かべた。すいつ、と近くの空間を泳ぎ去る真っ赤な魚にも、優しい目を向けている。

「僕は神官と呼ばれていますが、女神の血筋を受け継ぐもの、というただそれだけの意味です。ものすごい神通力があるわけでも、民を率いるカリスマがあるわけでもありません。気軽に接して下さいね」

さ、さすがは愛海先生の作ったキャラクター、めっちゃいい人！イケメンなんだけど、中身は少年みたいに無邪氣というか……こっちも見ていて全然警戒心がわいてこないわ。

「あ、ありがとう。私もそんな特別な人間って訳じゃないから……愛海先生に名前を覚えてもらってるだけで」

ははは、と笑つたら、ザンが田を見開いて身を乗り出した。近くにいた魚が驚いたように、向きを変えて泳ぎ去つた。

「名前を…？ 名前を呼ばれるということは、マーナの声が聞こえるということですね！？」さすがは巫女どのは

……ああ……またなんか話が変な方向へ……。

「マーナはどうな風に語りかけてくるのですか？」

「え！？ どんなつて、さつきは海の上で会つて名前を呼ばれただけだけど」

「そうか……なるほど、海上で……」

ザンは腕組みをする。

「な、何か？」

「僕たちは、海の上には出られないんです。水のあるところではしか生きられない」

ははあ。それで、海の上はあんなに何もないわけね。今のところ物語に出てこないなら、設定上必要ないもんね。

じゃあ、ここの人たちは、この城の中でだけ暮らしていっているとか……。

……で。今の話から、わかつたことがある。
ザンが女神マーナと話したことがないことは、愛海先生はこのラグーン城には入つてこないと考えられる。

それなら、愛海先生と接觸するためには、水の中もしくは海上に出なくてはならない。

私はあいにくと、水中で話をする能力は持ち合わせていない。
つまり、愛海先生とさつきみたいに会話をしようと思つたら、どうにかして海の上に出ないとならないのだ。

だから！ 私、泳げないんだってば！

ザンは私の右手を取つて、軽く握手をした。
「どうかまた、マーナの言葉を我々に伝えて下せ。歓迎します、
巫女どの……リク」

というわけで、私は巫女決定、らしいです。

4 会社と神社（前書き）

昨日は『海の日』だったのに、更新できませんでした…

あれから、どれくらい時間が経ってるんだろう。

私はぶらぶらと、ラグーン城のなかを散歩しながら考えていた。

……いや、ぶっちゃけ道に迷っちゃったんだけどね。

ザンが「ズーアイ呼びましょう」って言ってくれたけど、だいたいの方向はわかつてゐし一回くらいしか曲がらなかつたから、さつきの部屋に帰りつくくらい訳ないわ、とか思つて一人で帰るつて言つたんだけど。とんでもありませんでした。

まあ、そんなにてつもなく広い場所じやないみたいだから、歩いてゐるうちにどうにかなるでしょ。

私は会社に思いをはせた。

……私がいないこと、誰か気づいてくれたかな。会社、砂だらけでビックリだろうな。

いや待て。あの日は金曜日で、しかも夜になつてた。倉本主任は印刷所に色校正に行つて、そのまま直帰。他の社員さんも書店営業から直帰で、会社に残つて戸締りする予定だったのは私。

うちの会社は貧乏で、わが書籍部は在庫保管スペースを確保するために、ものすごいボロビルを借りていた。警備員なんて常駐してない。

じゃあ、土日出勤する人がいない限り、一人暮らしの私が行方不明なことに、月曜日まで誰も気づいてくれないつてことじやないの！？

上を見上げると、相変わらず水面は明るくきらめいて揺れている。エイだろうか、空飛ぶ絨毯みたいなものが陽光を遮り、影が水中にストライプを作つた。

今日は一晩明けて、土曜日のかな。あーあ、どうせ倉本主任は印刷所の美人営業さんと楽しく飲み明かしたんだろうな、私がこんな目に遭つてるとも知らないで。くそつ、くらつシユ（「倉」本「主」任の略称だ）め！

内心ハツ挡たりしながら歩いていると、渡り廊下の外、庭の珊瑚の林の奥に、見覚えのある小さな建物が見えた。庭に下りて近寄つてみる。

「お社…かな？」

ちゃんとした神社、と言う感じではなくて、せっしゃまつしゃ攝社せっしゃとか末社まつしゃつていの？ よく神社の脇にぽつんと建つてゐ、あれみたい。

私の背より少し高いくらいの、小さなお社だった。赤い屋根に白い壁、赤い格子の扉。前には白いとっくらのよくなものが立ててあり、榦の枝が挿してある…と思つたら、これ榦じゃないわ。ワカメだ。

……私は漠然とした不安を覚えた。

亡くなっている愛海先生……その先生の世界を作られた、小さなお社。これは何を祀つてあるんだろう。

私は首を振つた。今はこんなこと気にしてる場合じゃない、元の世界に返るためにはどうしたらいいのかを考えなきや。

やつぱり、この世界の創造主である愛海先生に会つ必要があると思う。

といひことは、何か海上に出る手立てを考えないと。

今私がいるラグーン城の中は、空気なのか水なのかわからないもので満たされている。息はできるし、身体は浮かばないんだけど、空氣よりも存在感のあるものが身体にまとわりついているのを感じる。

お社を離れ、庭の外へ向かって歩いてみると、ある地点から急に視界の青が濃くなっていた。手を伸ばしてみると、小さな抵抗がつてから手が向こうへ抜ける。冷たい水を感じた。

えいや、と顔を突き出してみる。

「！……げほ、げほ」

顔を戻し、両手でぬぐつた。やつぱり、ここから向こうは海だ。息ができない。

それじゃあ、どうやって海上へ行けばいいのか。

潜水艦？…………この世界にありそつか、璃玖？

それじゃ、シコノーケルとか酸素ボンベ？いやいや、もっとありそうなものがあるじゃないの。

「……かめ？」

私はつぶやく。浦島太郎みたいに、陸地と竜宮城を行き来するなら、交通手段は亀でしょうね。

そのとき、目の前が陰った。顔を上げると、まるで私の声が聞こえたかのように、大きなウミガメが庭に泳いできて着陸（？）したところだった。

ウミガメは首をゆづくりともたげ、つぶらな瞳でこちらを見た。

「……ベタだけど、小説としてどうこうよりも、まず帰ることを考えないとね」

つぶやいた私は、ウミガメの前にしゃがみこんで言った。

「もしもしカメよ」

やっぱ、カメに話しかける時には「もしもし」だよね。ウミガメは私をじっと見ている。

「海の上まで、乗せてくれるかい？」

すると、ウミガメは少し身体の向きを変えて、私に背中を向けた。乗せてくれるらしい。ファンタジーだ。

「ありがと……」

よつ、と不安定な甲羅にまたがる。

いきなり、ウミガメが急発進した。大きな前足をオールのよう~~に~~に使ってぐいぐいと進み、濃い青の中へ。

「ぐふ！！！」

ちょ、カメに乗つても息できないじゃないの！ 絵本の浦島太郎はあんなに涼しい顔してたのにー！

身体を起こすこともできず、甲羅のふちに手をかけて伏せたまま、私はウミガメと一緒にぐいぐいと水中を昇つて行く。

いつの間にか白い姿が、綺麗な泡をたくさん連れてウミガメの横を泳いでいた。

どうにか横を向くと、白い髪をなびかせた愛海先生がニッコリと笑つて、上を指さした。

5 登場人物のモデル

「がはあ！ ゼい、ゼい、ゼい」「

ま、また氣を失うかと思つた！

強い陽射しが、濡れた身体に降つてくる。

海の真ん中だつた。いつの間にか陸地は見えなくなつていて、私の乗つたウミガメだけがぼつかりと浮いている。

さあつ、と音がして、飛沫をまばゆく反射させながら、すぐ目の前に愛海先生が現れた。昨日と同じ、白い髪にアクアマリンの瞳。水の上に立つているように見えるけど、水中に没した衣装の裾がヘビのような尻尾をおおつていることを、私はもう知つている。

「ま、まなみ、せんせい」

やつと息の整つてきた私に、愛海先生は歌つよつと言つた。

「璃玖さん、私の世界によつこそーーー」

愛海先生 今は、この世界の創造主である女神マーナ は、目を細めてほほえみながら、私の周りをゆっくりと回つている。白く長い衣装が、先生の動きをトレースして水中を揺らめく。

「ラグーン城はどうー？」

「あ、ええ、綺麗だし涼しいです……」

先生を田で追いながら、私は考える。

……ちょっと待つて。先生、自分が亡くなつてることには気づいてるのかな……？ そこは一応触れないよつてしよう。

あ、この「女神マーナ」だって、先生の創造の産物かもしれないのか。ああややこしい。

でも、いわゆる異世界トリップもののファンタジーだと、言葉が通じないパターンがあるけど、その点はラッキーだったと言わざる

を得ないな。愛海先生が日本語で書いた世界だから、公用語が日本語だつて点に置いては。

先生は機嫌よく笑っている。

「この世界はね、私が小学生の頃に思いついたのよー。ふふ」

「そうですか。それで、あの、どうして私はここにいるんでしょう

か？」

先生は、ああ、と両手を合わせて、

「それはね、いざお話を書き始めたときに、ヒロインの女の子のモデルにしたからー」

「……誰を？」

「璃玖さんをー！」

……ちょっと待つて（さつきからこればっかりだけど）。

まさか私も、今ここにいる私も、先生の創造の産物つてこと？

急に自分の存在が頼りないものに思え、めまいがした。太陽がジリジリと照りつけているのに、背筋がすうっと冷える。

「でも璃玖さん、私が書いたのと違うわねー」

先生が人差し指をあごに当てて、首を傾げる。美人がやると様になるポーズ。

「あ……そういえば、お話ではヒロインは小学校高学年くらいの女の子ですね」

私はやつと、自分を立て直した。

どうみても、今のこの私の身体は小学生のものではない。私は自分がピタ一（？）からのぞく胸の谷間を見下ろした。あちらこちら、ちゃんと大人の女に育つてます、ええ。

「良かつた、私はちゃんと二十六歳会社員の私だ……」

それでも、モデルになつたという理由で、ヒロインと私が重なつてしまつて物語の中に入り込んでしまつたのか。

ところで、わざから氣になるのは、先生の様子。いつもとちよつと違う。いちいち語尾をのばす、このしゃべり方。以前にも、先生がこのしゃべり方をしているところを見たことがある。

「先生……もしかして、酔つてます？」

ちなみに、エッセイストの先生がよくエッセイのテーマにするのは、「お酒と美味しいつまみ」だ。

先生は両手を頬に当てて、うふふ、と微笑んだ。

「え、わかるー？　だつてわざわざ今まで氣持ちよく飲んでたんだもの」

――

……そうだ。確かに先生が亡くなつたのは、作家仲間と飲んだ帰りに乗つたタクシーが、深夜の首都高で玉突き事故に巻き込まれたから。

私はなんと答えていいかわからなくなつた。

「そうそう、璃玖さん、ザンと会つたー？」

先生が私の顔をのぞき込むようにした。

「あ、はい。すぐフレンドリーな神官さんですね」

私が答えると、先生はますます機嫌良さそうに微笑んだ。

「そうでしょー、彼にもモデルがいるのよー」

「え、そつなんですか？　まさか、担当の倉本とかじやないですよね」

私は、どつかで飲み明かした翌朝に出社した、酒臭くて無精ヒゲちよぼちよぼの「くらしき」を思い浮かべた。似てねえ似てねえ。

「違う違う。私の第一」

弟さん？

「先生、弟さんいらしたんがほがほじほほほ
いきなり、今までおとなしくしていたウミガメくんが沈降を開始して、私は水中に没した。

わ、悪かった、悪かったわよ、ずっと私みたいな重いの乗つけたまま浮いてくれたんだものね！

でもお願い、沈むときは予告してえええ！

甲羅にしがみつきながら、ゴボゴボと昇つていく気泡を見上げると、海上で愛海先生がにっこりと手を振るのが見えた。

息も絶え絶えに、私は海中のラグーン城に戻ってきた。

先生に会いに行くたびにこれつて、身体がもちませんがな！
甲羅から庭にすべり落ちた私を置いて、ウミガメは海中を泳ぎ去つていく。私はそれを見送り、思わずその場に突つ伏した。つ、疲れただ……。

「巫女殿！ 大丈夫ですか？」

誰かが駆け寄ってきて、私の横にひざをついた。

「あ、だ、だいじょび…」

ちょっとぴり噛みつつ顔を上げる。

あ。 もろタイプ。

そこにいたのは、がっしりとした身体をザンと同じような衣装に包んだ、ちょっと強面の男性だった。紺色の髪は短く刈り込んであり、額に複雑な文様の入ったハチマキのようなものを巻いている。

「立てますか？」

大きな手が差し出され、反射的に自分の手を預けると、そつと引き起こしてくれた。

「あっ、ありがとうございます」

「うわー、私ワイルド系に弱いんだよねえ、ビリビリ四六八。一年ちよつと前に別れた彼氏もこいつタイプだぞ。

……ああ、このキャラクターにもモデルがいたりしてね、先生の元カレとか。

そう考えたら、サクッと冷めた。熱しくいし冷めやすい、あまり恋愛には向いてない私。

「俺はリュウと言います。ズーアと同じく、巫女殿の弓用を果たすために存在します。何か男手が必要な時は、何でも言って下さい」リュウは片膝をつき、せつちつと一度頭を下げると、また立ち上がりつた。

「お疲れのようですね、部屋までお送りします。やはり、女神の神託を受けるには、尋常ではないエネルギーがいるのですね」

そうね。肺活量といつなのエネルギーがね。

6 警告の『夜』

リュウと渡り廊下をいくつか渡つて、やっと見覚えのある建物に戻つてくると、入り口のところでズーアイさんが両手をもみ絞りながら立つていた。

「ああ、巫女さまー、なかなか戻つてこられないので、心配しました」

「あっ、『ごめんなさい』！」

あわてて謝ると、横からリュウが口添えをしてくれる。

「巫女殿は、女神マーナの神託を受けておられたのです」

「まあ、そうでしたか」

「あの……」

私はつい、口を挟む。

「良かつたら、お一人とも私のことは璃玖と呼んでください。どうもその巫女つていうのはしつくり来なくて。あ、敬称も抜きで」「ただの会社員なのに巫女とか言われると、なんだか身分詐称みたいで罪悪感があつてね……それに特にズーアイさん、私よりも年上っぽいし。

「そうですか？ 巫…リクが、そうおっしゃるなら」

「リク、ですね。わかりました」

わりと柔軟に、ズーアイさんもリュウも対応してくれた。

部屋に入ると、リュウは「俺は、続きの間かこの建物の周辺にいますので」と出でていった。

海につかつた後の私は、部屋に付属のシャワールームを借りた。何でも、ここからさらに井戸を掘つて真水を引いているそ�で。

「ああ……そういえば結局、この世界から出る方法を聞けないまま、先生との話が終わっちゃつたよ……」

後頭部にシャワーを受けながら、白い壁に手をついてガツクリ。
最低あと一回は、愛海先生に会いに海上に行かないとならない。

……大丈夫か私。

ため息をつきながら、用意されていたガーゼ地の浴衣みたいなものをしてシャワールームを出ると、心配したズーイさんが休むように勧めてくれた。例の恥ずかしいホタテベッドにちょっと横になる。（ここ）のベッドって、みんなこの形のかしら。サンはともかく、あのワイルド系のリュウもホタテベッドで寝てんのかな……うわー似合わない……）

余計なことを考えていたら、さすがに疲れていたのか、あつと言いう間に眠りに落ちてしまった。

はつ、と起き上がると、そこはやはりホタテベッドの上だった。しばらく眠つたせいか、頭がすつきりしている。

……夢オチはなし、か。

「昼寝なんて久しぶりにしたな。おなかすいた……」

窓に近寄り、海上を見上げる。遠い水面では、やはり陽光がキラキラしている。

なんか……時間の経過がわからないところだなあ。私の体内時計の感覚では、そろそろ暗くなつてきてもいいような気がするんだけど。

ノックの音がして、ズーイさんが顔を出す。

「お田代めですか？ そろそろ夕食をと思いまして」

「わあ、嬉しいです。あの、甘えてしまっていいんでしょ？ うか」

ここへ来てから、色々とお世話になつてしまつてるよね。お話を中とはいえ。

するとズーイさんは私を安心させるように微笑み、

「何もお気になされないようにおもてなしをよど、神官の仰せです。

ここは豊かなお城ですし、リクもお好きなように過ごして下さいね」

と語ってくれた。

……うーん、ありがたいけど、何だか警戒してしまつ。本当に浦島太郎みたいになつたらどうしよう。元の世界に戻つたら、ものすごい時間が経過してたりして。

やつぱりなるべく早く、元の世界に戻る方法を見つけなくちや。

「夕食ですが、神宮と、神宮のお父上お母上が、一緒にいかがかと……どうでしょうか」

ズーサンさんが尋ねてきた。え、サンのお父さんとお母さん？
サンは愛海先生の弟がモデルなんだから……サンのご両親はやつぱり、先生のご両親がモデルなのかな。それならきっと、フレンドリーな人だよね。

「はい、喜んで」

私はうなずいた。もしかしたら、色々と動き回つてゐる間に、ここから出るヒントも見つかるかもしれない。

また渡り廊下をてくてく歩いて、あの金魚鉢ホールに向かう。
…ネーミングがあんまりだな。せめて英語で『フィッシュ・シュボウル』とでも呼ぼうか。まんまだけど。

フィッシュ・シュボウルに到着してみると、真ん中に大きくて真っ白なテーブルが出してあつた。まるでクラゲみたいな形をした柔らかそうなスツールがいくつか置いてあつて、食事の用意がしてある。

キター！ 舟盛り！ やつぱり海の中だもん、魚がメインだよねえ。それに、大皿にマグロのカブト焼きがどーんと乗つていて、七輪みたいなものが置いてあつて網の上で貝が何種類もグツグツ言つてるし、色鮮やかな海藻麺とか海藻サラダがたっぷり。わんだほー。

鯛やヒラメは『舞い踊つて』はいなかつたけど、その辺の空間を色鮮やかな魚たちが時々通り過ぎて、フィッシュ・シュボウルを華やかに

していた。

「お魚は、どうやって獲つてくるんですか？」

「ここの人には海には入れないんだよね？」と思つてズーイさんに聞くと、

「生け簍があります」

せつかく海の中なのに、養殖ですか、はは。あ、でもブリとか、意外と天然モノより養殖モノの方が脂が乗つて美味しかったりするよね。

ズーイさんの追加説明によると、網を使って天然ものも少しほろらしげです。

そこへ、ザンが入つてきた。

「こんばんは、リク」

「あ、こんばんは」

座りかけていた私は、一応立ち上がつた。

「海上に行つて、女神マーナの神託を受けたそうですね」

「ええ、まあ」

女神、酔つ払つてたけどね。

するとザンは頬笑みを浮かべたまま、こう言つた。

「あまり勝手に動き回らないでくださいね。色々心配しますから」

あれ？

「あ……ごめんなさい」

反射的に謝ると、ザンは無邪気な笑みを深くして、

「いえ、でもお疲れさまでした。さすが巫女殿ですね。女神とはどんなお話を……あ、こちらが僕の両親です」

と、後ろから来た二人の方を向いた。

ザンの視線が逸れた時、私は自分の肩に力が入つていたのに気づ

いて、ゆっくり深呼吸をした。

……何だか、さつきの話しか……最初に会った時の印象とはちよ
つと違つた、よね。また元に戻つたけど……。

ザンの両親は、想像通りのフレンドリーなおじさんおばさんだつ
た。二人とも白髪交じりの長髪で、ふつくらした身体つきに陽気な
身振り手振り。名前は、おじさんがシコリさんでおばさんがヤーハ
さん。

美味しい魚や、お酒も少し勧めてくれながら、この世界の豆知識
を教えてくれたり、女神との会話を聞きたがつたりするザンとその
両親。私もどうにか差し障りのない範囲で受け答えをする。
私がザンの人柄を褒めたら女神が喜んでいた、と話すと、ザンは
照れるじご両親は浮かれるし。

……理想の親子つて、こんな感じかな。

でも私は、さつきのザンの「似合わない」もの言いが気になつて、
どこか上の空だった。

食事が終わると、シコリさんとヤーハさんは「楽しくて飲み過ぎ
てしまつた」と二口二口しながら、先に退出していった。

「あ、じゃあ私も。じちそうさまでした」

立ち上ると、ザンが「今、ズーイを呼びます」と言つて、壁に
くつついているひときわ大きな巻貝の所に行って何かしゃべつた。
へえ、あれもしかして伝声管とかインターほん的なもの？

私に向き直つたザンは、

「そろそろ『夜』の時間ですから、灯りを持って来させましょ
う。渡り廊下は暗くなりますから」と言つた。

今なら十分明るいけどな……？

思ったとたん、ふうつ、と当たりが薄暗くなつた。フィッシュボウルのふちから下がつた巻貝の灯りが、その照度を少し落としたのだ。

私があたりを見回しているとズーイさんが入ってきて、軽く膝を折るあいさつをした。

「それでは、おやすみなさい、リク。明日また、少しあ会にする時間をお下れ」

「はい……おやすみなさい」

私はとにかく返事をすると、ズーイさんの後に続いてフィッシュボウルを出た。

本当に渡り廊下は暗くなつていて、ところどころに巻貝の灯りが点っているだけ。その灯りも、さつきまでと違つてほんのりとしか光つていらない。庭にも灯籠があつたよつた気がするんだけど、それも今は点つておらず、魚たちやイソギンチャクの姿はかるづじて見えるものの色が沈みこんで見えた。

ズーイさんは手に巻貝の形をした燭台を持っていて、それで私の足元を照らしながら歩いてくれた。

上を見上げる。

相変わらず、水面では陽光がきらめいて、通り過ぎる魚がいくつもの影を落としている。

これが、『夜』？ ラグーン城の照明を落としただけだよね。海上はまだ昼間じゃないの。

しかしどうとう、部屋に戻つてズーイさんが「それでは、おやすみなさいませ」と出て行つても、ホタテベッドに入つてしまひぐ窓

の外をにぎりでいても、海上が明るいのは変わらなかつた。

「この世界には、陽が沈んで月や星が出て… という、私の馴染んだ『夜』が、ないのだ。

7 不安と疑惑（前書き）

現在、改稿作業を勧めております。ストーリーには影響はありませんが一つだけ、女神「マナ」を「マーナ」にさせて下さい！せつかくズーアとかヤーワとか、女性陣が「-」の入った名前なので、揃えたりました。てへ。

7 不安と疑惑

「ふわ……」

私はあぐいをしながら、ベッドから足を下ろした。田じりの涙を拭く。

昨日は昼寝をしたせいもあり、それにこの世界の『夜』のことが気になつて、なかなか寝付かれなかつたのだ。

ベッドサイドの巻貝ランプは明るく光り、よく見ると天井も全体的に内側から光を発しているらしい。窓際に寄ると、外の庭に建てられた様々な形の灯籠も、明るい光を点している。ラグーン城では、昼間は灯りを点し、夜になると消すわけだ。

向こうに見える、一番大きなドーム状のラグーン城も、それ自体が大きな照明であるかのように、再び色鮮やかな姿を取り戻していった。

「全然気づかなかつた…海の上は昼間でも、海底は本来、暗いはずなのよね」

私はつぶやいた。

澄んだ海でも、水深二十メートルくらいでもう夕方のような暗さだと聞いたことがある。ラグーン城の『夜』はもう少し暗く感じたので、それより深いのかもしれない。ここはファンタジー小説の世界だけど、こういう所はリアルだ。

それにして、地上に本物の夜が来ないというのは、愛海先生の考えた設定なんだろうか。一体、どんな理由で？ 今度会えたら聞いてみよう。

ノックの音がして、ズーアイさんが顔を出した。

「お田代めですか？ 朝食ですよ」

部屋のテーブルに並べてくれたのは、海藻サラダ系のもの。うーん、炭水化物がないのが寂しい。

そして私は再び、フィッシュボウルに来ていた。

ザンが昨日、「明日お会いする時間を下さい」と言っていたので、こちらから出向いてみたのだ。色々気になることはあるけど、それならなおさら自分から動くべし。

フィッシュボウルの中は、がらんとしている。耳をすませぬと、水泡がぼこぼこ立ち上る音や、ずっと遠くの方で、ドドド……と低く響く音。海の中って、シーンとしてるわけじゃないのね。

すぐそばの空間を泳ぎ去る魚たちを田で追つていると、

「リク、こっちです」

ザンの声がした。奥の、一段高くなっている所はまるでステージのようになつていて、両脇にカーテンが垂れているんだけど、その影からザンが顔を出している。

「こちらへどうぞ」

私も段に上がつて、舞台の袖のような所に入る。すると、そこにもドアのない出入り口があった。

ザンに続いて何気なくそこを出た私は、田の前に広がる光景に息を飲んだ。

そこは広いテラスになつていて、眼下に緩やかに下降する海底の百八十度のパノラマが広がつていた。

山もある。海藻の森もある。柔らかな珊瑚の林が海流にゆらめく。その合間に、海底を流れる海水の動きが、大河のように見えていた。魚の群れがそれに乗つて移動するので、はつきりと視覚化して見える。

そして、街があつた。

白いドーム状の小さな家々が、大河の両脇に密集して大きな街を作っているのだ。街中に灯りが星屑のように広がり、海底を照らし出している。人影が動いているのもわかる。

「街……」

私は呆然とした。

「城下街です。まだお見せしてませんでしたね」

隣にザンが立つ。

そう、そうだよね。今私がいるのはお城であつて、その外には普通の家だつてあるわけだ。そしてそこでは人々が、私の世界と同じように暮らしを営んでいる。物語の中だとしても。

ん？ 街の外れの方、海藻の森のあたりが、水が濁つて見える。

「何だかあの人あたり、濁つてるのね」

指さして聞くと、ザンがうなずいて教えてくれた。

「ああ大丈夫、プランクトンがたくさん発生してるだけです」

「プランクトン……」

濁つてるからダメってわけでもないのかな。ザンがもう少し細かく説明してくれた。

「海藻が枯れて、溶けて栄養になるんです。そこへプランクトンが

……」

途中から、私は他のことで頭が一杯になつていた。

いや、決してザンの言つてることが難しくて頭に入らなかつたわけじゃないよ！

子どもの頃からこの世界をイメージしてただけあって、愛海先生の作った物語はかなりの広がりを見せている。でも、先生は物語を完成することなく死んでしまった。

これ、大丈夫なの？ 先生が細部まで設定せずに死んでしまったこれからも、ここの人々の暮らしはちゃんと成り立っていくんだろうか？ そして、この海に生息しているたくさん生き物たちは？

だって、世界は循環している。海も陸も空も、密接につながっているはず。でも、陸上は一面砂の世界になってしまっているし、空に夜は訪れない。月がないなら、潮の満ち引きだつてないのかも。物語の中だということで、不安定さは最初から感じていたけど、生命の息吹を身体中で感じた私は、本格的に心配になってしまった。

ああ、もう……誰か相談相手がいればいいのに。

「リク？」

ザンに声をかけられて、我に帰った。

「あっ、ごめんなさい。すごい光景でびっくりしちゃって。それにこのお城って、裏側があつたのね……って違う、こっちが表側になるのか」

そう、私が泊まらせてもらつてる部屋のある方が、城の裏手になるんだろ？

「ザンは、表側に住んでるの？」

聞くと、僕の家はあそこです、と教えてくれた。テラスからフィッシュシーボウルに沿つて岩棚があり、その先のちょっと広くなつた所にやはりドーム状の建物が一つあつた。

「あそこは、両親と暮らしています」

「そつか。本当に優しくて素敵なご両親だよね」

私が言つと、ザンはこりとした。

「ええ、良くしてもらつてます」

え、と私が口ごもると、ザンは続けた。

「本当の両親ではないんですね」

ザンは自分の家の方を見やつた。

「僕は、女神マーナの弟としてこの世界に誕生したのですが、その時にはすでにある程度成長した姿でした。両親 シュリとヤーエは、この城を女神から預かっている城主なのですが、僕を可愛がつて育してくれたんです」

「そ、うなんだ……」

私もザンの視線をたどる。ちょうど向こうでその家の両開きのドアが開いて、ヤーエさんが出てきたところだった。ザンと同じような合わせの上着にサッシュベルト、ゆったりしたパンツのよつなもの履いている。

ヤーエさんはこちらに気づいて、手を振ってくれた。ザンが軽く手を上げ、私もつられて振り返す。ヤーエさんは、今出てきたドアの方をちょいちょいと指さした。寄つていかない？ という感じかな。

不完全とはい、愛海先生が生み出したこの世界が、愛おしくなってきた。ううん、不完全だからこそ……かもしれない。

私はザンに向き直つて言った。

「あの、私もちょっと頑張ってみようかな。み、巫女として？ 何かあつたら女神さまにも伝えてみますから。そうしたら、この世界ももっと豊かになるかもしれないし」

すると、ザンは「ほんづつ」言つた。

「居心地良くしてびーすんだ」

「え？」

「あれ？」

私と、そして当のザンが、きょとんとして顔を見合せた。
私の中に、ザンの一重人格疑惑が芽生えた瞬間だった。

結局、私はザンの家には行かなかつた。ヤーハさんは用があるようすで、いつの間にか家の前からいなくなつていた。

「えーと……僕、今なにかおかしなこと言いました、ね。忘れて下さい」

ザンが、疑問符をいつぱい浮かべて首をかしげたまま、私に言つ。私はどうしていいかわからないまま、へりへりと笑つて、

「はは、気にしてないから。そ、そうだ、今日中にもう一度、先生に会いに……えっと、女神さまにご神託を受けに行きたいと思つてるんですけど、いいですか？」

と聞いた。

だつて昨夜、勝手に動くなつて言われたしね……ああ、あの時からなんか変だなつて思つてたんだ。そうだった。

「あ、はい、わかりました」

ザンは氣を取り直したよつて、

「そう、リコウから報告を受けたんですが、ウミガメの助けがあるとはいへ、リクもさすがに海上との行き来がとても大変そうだとか……。あそこを見て下さい」

と後ろを振り返つた。

後ろにはもちろんフィッシュボウルがあるんだけど、ボウルの外側には階段が作りつけられていて、縁まで歩いて登れるようになつていた。階段を目で追つて見上げて行くと、ボウルの縁に沿つて巨大な筒状の珊瑚がいっぱいくついているのが見えた。並んでくつっている様は、まるでパイプオルガンのようだ。

そして、その珊瑚から、一定間隔で大量の水泡がぶわっと吹き出して、高みへと上つて行くのが見えた。

「ウミガメと一緒に、あの泡に乗つて行つたらどうかと思つんです。そうすれば、少なくとも行きは短時間で海上まで行けるでしょう？」

あつ。私はようやく思い出した。

これ先生の設定資料にあつたよ！ プロローグの方をじっくり読みたくて、ついつい資料の方は斜め読みしちゃつてたから、内容がうる覚えだつたけど、あつたあつた！

でもこれ、エンディングに使うネタじゃなかつたっけね。ヒロイントがついに地上に戻るという場面はこんな感じ、つて書いてあつたような。涙、涙のお別れシーンで使つはずのそれを、今ここで使っていいんでしょうか？

はい、いいですよね。背に腹は代えられない。まさか先生だって、ヒロイン（私だ）が何回もラグーン城と海上を行き来するなんて思つてなかつただろうし。

「ありがとう！ そつとせてもらうわ。えつと、またカメさんに来てもらわないといけないけど、どう……」

言いかけたとたん、急にフィッシュボウルを回り込んで巨大なウミガメが姿を現した。すーっと滑るように、私の前までやつて来る。

「なんかこの子、この前もタイミング良くなってくれたんだよね。まるで、こっちの話を聞いてるみたい」

私はつぶやいた。

「なんなんですか？ 何か、巫女としての力を使つてカメを呼んでいるのかと思いました」

ザンに不思議そうに言われて、思わず首を横にぶんぶん振る。ないないない。

でもザンは本当にそう思つてるみたいで、

「水の中は音がよく伝わりますからね。きっとウミガメには、リクの声が届いているんですよ」

と、青緑色の瞳を細めて微笑んだ。

「ま、まあそうだとしても……いつも悪いな、乗せてもらつて。こういう時つて、お礼に何か食べさせてあげたらいいのかな」

「そうですね、ズーイに用意してもらつておきます。アオウミガメは海藻とか海草を食べますよ」

ちよつと待つて、海藻と海草つてどう違うんでしょうか。

聞くと、サンは「海藻」藻類。胞子で増える。ワカメとか昆布とかはこうち、「海草」花が咲いて種で増える。陸から海に戻つたもの」と教えてくれた。

「この世界を理解するには、まだまだ勉強が必要なようです。

ウミガメくんの背に乗せてもらひ、空気の中 といふかこの少しどりとした空間をフィッシュボウルの上に向かう。そしてパイプオルガン珊瑚の上で待機していると、少しして下からぶわっと水泡の塊が駆け上ってきた。

「へふっ」

一気に海水の中に突入して、ウミガメくんと上昇する。圧力つ、圧力が半端ないっ！

「つぶあー！」

でもありがたいことに、溺れる恐怖を味わうことなく短時間で、海上に出ることことができた。

今日は、ずうっと遠くの方に浜が見えていた。あそこに上がれたら楽なんだけど、ちよつと遠すぎるかな……それに、陽が容赦なく照りつけているから、結局あまり長い時間は海上にいられないよね。ウミガメくんが疲れないように、私はその背から降りて水中に入ると、甲羅に軽くつかまるようにした。こうしておけば、ウミガメ

くんも前回ほんとすみて疲れずに済むだろ？

「先生！ 愛海せんせー！」

呼ばわってみる。

とたんにすぐそばの海中から真っ白な姿が、ドルフィンジャンプして現れた。愛海先生だ。空中で一回転、長い尾が弧を描き、きらきらと飛沫を光らせながら再び海中へ。

そしてまた先生は、すうっと海上に立つようにして現れた。

「あー気持ちいい、こんなにかけは璃玖さん」

……まだ酔ってるよ。

「こんなにちは愛海先生。今日は単刀直入にお聞きします」

私は先生を見上げた。こくん、と喉を鳴らしてから、聞く。

「私、なるべく早めに会社に戻りたいんですけど、戻るにはどうしたらいいんでしよう？」

すると先生は、軽く首をかしげた。

数秒の間が、雄弁に事実を物語る。じわりと額に汗が浮くのを感じる。

「そういうえば、私も家に戻りたいけど……ここには私の家、ないわよねー」

ああいやっぱり！ 先生は、戻る方法を、「存じない！

それに、今ではつきりした。先生は、自分が亡くなっていることに、気づいていない。少なくともはつきりとは。

「でも、私にひとつはこの『還るべき場所』みたいなものねー、とても馴染んだ、心地いい世界だからー」「機嫌でくるつと一回転する先生。

「そんなん……」

私はショックで目が回りそうになつた。いや、きっと、きっと何か方法はあるはず。考え方。あきらめちゃダメだ。ただ……長期戦は覚悟しないとならないかも。

「だから、私の作ったこの世界を大事に育てていきたいわ。ラグーン城や城下街に近づくとね、中の人人が“女神さま”って呼んでくれてるのがわかるの。きっと何かができることがあると思うのよねー」愛海先生は腕を組んで、自分の言葉にうんうんとうなづいた。

私はそれに応えて言った。

「そうですね。私も協力しますよ。一応、女神さまの声を聞く巫女、つてことになつてるので」

「ホント!?」

先生が顔を輝かせたので、あわてて付け加える。
「でも元の世界に、会社に戻るまでですよー。ぐらっしゅ、いえ、担当の倉本の代わりです」

「そうよ。私もペーペーとは言え編集者はしぐれだもん。というか、酔つ払ってる先生一人には任せっきりだもん。もし先生の物語が変な方向へ突つ走りそうになつたら、軌道修正するのも編集者の役目だと思つ」

「私、先生の世界を、『編集』してみようと思います!」

8 編集？（後書き）

次話で第一章終了！

9 死者の選ぶ場所

そう決心したら、気持ちがすとんとあるべき所に収まつた気がした。そして私は、思い出した質問をしようとした。

「あの、ザンって」

……言いかけて、やめた。

まだ、どう質問すればいいのかわからない。彼の言動が変だなんて。もう少し考えてからにしよう。

「なあにー？」

「いえ……えっと、どうしてこの世界には『夜』が来ないんですか？ つまり、海の上の『夜』ってことですけど」

別の質問に切り替える。これも、この世界を理解するのに必要な質問だった。

すると、急に先生の顔から笑みが消えた。

腕が力なく垂れ、アクアマリンの瞳が憂いを帯びて伏せられる。

「夜の海辺は嫌い。……辛い記憶だから、嫌なの」

「辛い記憶……？」

「弟との、最後の思い出なの。夜にこつそり家を抜け出して、一緒に海を見に行つたのが……」

「弟さんとの？」

「最後の記憶？」

先生はゆつくりと顔を上げて、私を見て寂しそうに微笑んだ。

「あのね、ザンは、私の願望なの。弟があのまま成長していたら、

あつとこんな風だらうな、つていひ

「……それじゃあ」

私は絶句した。

先生の衆さんも、亡くなつてゐるひ」と……？
待つて。愛海先生も亡くなつていて、ザンのモデルである衆さん
も、亡くなつてゐる？とこつゝとは。

「まさか、私も？」

ぱりりとつぶやいたとたん、急に怖くなつた。

「あの……今日は、ラグーン城に戻ります。それじゃあ」

私は上の空で先生に言つと、ウミガメくんに「戻ろつ」と言つた。
賢いウミガメくんは、私が甲羅につかり直すと、大きく前脚をか
いて海中に入った。

「璃玖さん？ どうしたの一？」

愛海先生の声が、かすかに聞こえた。

息を止め、目をぎゅっと閉じたまま、私は海の中をウミガメくん
に引つ張られて降りて行つた。途中で、ふつと水の抵抗が緩くなる。
とん、と着地の衝撃があり、目を開いた。広い空間、白い床、連
なる巻貝の灯り。

「「ほつ……フィッシュボウルの中？」

咳き込みながらつぶやいて、ウミガメくんの背中から降りると、
ウミガメくんはすいと浮かび上がってフィッシュボウルの上から
出て行つた。

あ……お礼の「」飯、またあげそこねちやつた。「めん。

私はのろのろと立ち上がると、自分の部屋のある建物に戻り始め
た。

愛海先生は亡くなっている。
先生の弟も、おそりぐ。

昔、本か何かで読んだ気がする。海は古来、“死者の還る場所”
だと考えられていた、って。

ここは物語の中の世界だと、私は思いこんでいたけど、まさか。
「死者の国なの……？」

歩きながらつぶやく。私は、会社からこの世界にただ迷い込んだ
のではなく、本当は会社で突然死してここに来たんじゃ？

庭の奥に建つ、あの小さなお社が目に入つて立ち止まる。あれは、
先生が弟さんを悼んで建てたものだろ？

それとも、私を、悼むため……？

ぶんぶんと首を振る。そんなはずは……。でも、心当たりと言え
るものがなくないので、一笑に付すことができない。

私が泳げない理由、それは別に水が怖いからではない。子どもの
頃に身体が弱くて、水泳の授業をほとんど見学していたからだつた。
でも、成長につれて克服して、今では風邪さえほとんど引かない
丈夫な身体になつたのに。そのはずなのに……。そうじやなかつたん
だろうか。

私に、何があつたんだろう？ 今じろ、会社で、誰にも発見され
ることなく……？

部屋に戻ると、ズーイさんとリュウがびっくりした顔をして、

「リク！？」

「顔色が……」

とすぐ心配してくれた。

「あ、大丈夫です。あの、また女神さまの神託を受けに海上に行つ

て来たから、疲れちゃって」

私は口の端を上げて見せた。

「ちょっと横になりますね」

「そうですか……そうですね、お休みになつて下さい」

ズーアイさんがかいがいしくベッドの両度を整え、ベッドサイドに飲み物を置いてくれて、

「続きの部屋におりますから、お目覚めになつたら声をかけて下さい。お食事をご用意しますから」

と言つてくれた。

食欲なんて全然なかつたけど、私はうなずいて、ホタテベッドにもぐりこんだ。

横になつて、延々と考えを巡らせてみる。でも、もやもやするばかりで、いい考えなんてちつとも浮かばなかつた。

いつの間にかまどろんでいたらしい。気がついたら、部屋は薄暗くなつっていた。ゆっくりと起き上がり、窓の外を見ると、もう庭の灯籠の灯りも落とされている。

ズーアイさんが、テーブルに食事を置いてくれている所だった。彼女ははつとして近寄ってきて、青緑色の瞳を心配そうに揺らめさせて私の顔色を見る。

「まだちょっと、お疲れのようですね……」

「大丈夫、大丈夫ですよ。あ、お腹空いたな」

自分を浮上させようと思つて立ち上がり、ちゃんとテーブルについて、魚介のスープをもらつて飲んだ。味はよくわからなかつたけど、温かさに少し気持ちが緩む。

半分しか飲めずに器を置いたけど、ズーアイさんは少しほつとしたようだつた。

「神官から、手紙を預かっております。きっと心配なのですよ」

細長く折つて結ばれた手紙を渡された。ザンから……？

「今夜もゆつべつお休み下さいね。リュウも私もおりますから、何かあつたら声をかけて下さー」

ズーアさんは私を安心させるように微笑むと、食器を持って部屋を出て行つた。

ドアが閉まつてから、私は手紙をほどいて開いた。お見舞いの手紙だろうか。あ、良かつた、文字も日本語だ……。

そこには、こう書いてあつた。

『真夜中に、フィッシュ・シユボウルで』

「？？？」

私は首をかしげた。その文字を、何度か読み直す。何だか、急いで書いたらしくていかにも走り書きと言う感じの、その手紙。いや、意味はわかるよ。真夜中にフィッシュ・シユボウルに来てくれつてことだしょ。何の話だらう……ちょっと怖いような気もするけど。それよりも。

私、ザンの前で、あの金魚鉢ホールのことを『フィッシュ・シユボウル』って呼んだことあつたっけ……？

【第一章 完】

1 真夜中の金魚鉢

夜のフイッシュボウルは、かすかな青い光に染まっていた。海は深くなるにつれ、赤い波長の光から吸収していく。そして残つた、純粋な青。

まだ、ザンは来ていないみたい……。

私はフイッシュボウルの真ん中に立つてぐるりと見回し、誰もないのを確認すると、奥の一段高くなつた場所に腰かけた。

白い床も、青く染まっている。足元を、数匹の細長い魚が追いかけっこしながらすり抜けていく。

音を立てないようにこつそり部屋を出てきたから、ズーイさんやリュウにはたぶん気づかれてないとと思う。でも、あんまり長く部屋を空けてもしばれたら、また心配をかけてしまうので申し訳ない。一応、上掛けの中に適当なモノを詰めて、寝てるっぽく見せかけては来たけどね。

いないことに気づかれたら、後で「また女神に呼ばれちゃって!」って言うしかないか。お手軽に呼び出される巫女だなー。

時計がないから、真夜中つて言うのがいつなのかよくわからないけど、お城の中は静まり返つていた。

ラグーン城にはもちろん、掃除や料理や他の色々を担当する様々な人たちもいて まあ、それほど数は多くないみたいだけど 昼間は歩いていると何人かとすれ違うんだけど、今夜ここへ来る途中には、誰とも会わなかつた。もしかして、通いで来てるのかな。夜は下の街へ帰るのかも。

の人たちも、みんな、現実世界では亡くなっている人たち

なのかな。ズーイさんも、リュウも、そしてシユコさんやヤーハさんも……？

考えに沈んでいた私に、後ろから声がかかった。

「^{みやじゅう}富代」

振り向いた。

少し離れた所に、ザンが立っている。紺色の髪が、この青い空間では黒っぽく見えた。

少し遅れて、驚きが脳を揺さぶった。無意識に立ち上がる。

「この人、「リク」って呼ばなかつた！」

「今、なんて？」

上ずる声で聞き返すと、ザンは「あら」に近づいてきて段差を降り、私のすぐ隣に立つた。

「富代、俺だ。倉本」

私は黙つて彼を凝視した。

あの、青いような緑のような、不思議な色の瞳は、今は明かりを点した闇夜のように黒く光っていた。でも、姿かたちは、この世界で初めて出会つた人物、ザンだ。

それなのに、倉本主任……だと？

私は聞いた。

「フルネームをどうぞ」

ザンは軽く目をすがめた。あ、今の表情は初めて見る……ザンらしく、ない。

「倉本 鷹」

合ってる。

いや待て、ここが愛海先生の作った世界なら、先生が知ってることをザンが知つてるのは当たり前だ。何か……そう、私と倉本主任しか知らないようなことを聞いてみないと。

「倉本主任が担当したピラティスダイエット本、印刷直前に発見されたミスは？」

尋ねると、ザンは口をへの字に曲げてから答えた。

「カバーの写真が裏焼きだった」

合ってる。

カバーの校正紙を見て、写真の女性タレントのホクロの位置が左右逆なのに気づいたのは、私だ。結局あれ誰のミスだつたんだろ。

ともかく間違いない、姿はザンだけど、今私と会話してるのは倉本主任だ！

「どういうことですか？」

私が聞くと、ザン（倉本主任）は「信じたか」と言いながら、さつき私がそうしていたように段差に座つた。

「時間がない。手短に行くぞ」

あつ、と私は思った。いつも打ち合わせの時に、倉本主任が言つ決まり文句だ。「手短に行くぞ」。

私は少し安心した気分で、隣に腰かけた。

「まず俺、倉本は今、会社の出版部の部屋にいる」
「ショッパンから」「？」な言葉が飛び出した。

ザンの顔をした倉本主任の話は、こいつだった。

金曜の夜、彼は他社の編集さんたちと、愛海先生の追悼飲み会をやつた。お酒が大好きだった愛海先生を偲んで、それは深夜まで及んだ。

当然のように終電を逃し、倉本主任は会社に泊まりに来た。
はいはい、それ用に寝袋置いてるもんね、くらシシユ。

出版部の部屋には明かりがついていた。誰かが残業してるとかと入つてみたけど、誰もいない。

私のデスクがいかにも作業中で、バッグも携帯も置きっぱなし、デスクの下には通勤用の靴もそのまま。しかし当の私がいない。
そして椅子が倒れ、床に原稿用紙の束が落ちていた。様子がおかしいのでいぶかしみつつも、原稿の束を拾おうとすると……。

「原稿用紙が、発光してるんだよな。で、すぐそばのコピー用紙の束に、その光が移ってるんだ。見てみると、いふ……コピー用紙にじわじわと文字が浮かび上がつていて」

こう、と何か表現しようとしたらしい倉本主任は手を浮かせたけど、結局そのまま膝の上に下ろす。

「その文字、筆跡が愛海先生の字なんだ。富代が先生から預かつた原稿はプロローグだけだったけど、続きが　本編が少しづつ、浮かび上がってきてるんだよ」

「続き、つて……」

「富代がラグーン城に到着して。ズーイに世話になつて。神官ザンに巫女つて呼ばれて」

「ちょちゅちゅ、ちゅつと待つて下さい」

私はあわてて遮つた。

「ずっと、私の行動を小説として読んでたつてことですかー?」

「そういうこと」

ザン、いや倉本主任がうなずく。

一瞬呆然となつた私は、即座に立ち直つて急きこんで聞いた。

「あの、ひとつ確認したいんですけど。愛海先生の書いたプロローグは三人称で書かれてましたが、浮かび上がってきた本編もそうですか？」

彼は答えた。

「そうだけど？」

よ、良かつたあ　　！

私は思い切り、安堵のため息をついた。

だつて本編が、ヒロイン（私だ）の一人称であつて『ごらんよ！私の考えたことがダダ漏れになつてた可能性があるじゃないの！ただでさえ不思議な世界なんだから。』

リュウを見たときに元カレのことを考えたこととか、やっぱ知られたくないじやん、上司になんて。

「ただし、ヒロイン視点の三人称だつたけど。たまに神視点も入るし」

「ぎょぎょっ」

げ、じゃあ私の行動が、他のキャラクターよりは細かく書かれているということにつ。しかも神視点？　つてことは、キャラクター自身の知りえない、愛海先生しか知らない出来事も入つてきてるわけ？

うわーん、先生、あまり私について変なこと書かないで下さいよ！？

「何

倉本主任にじろりと見つめられて、私はぶんぶんと首を横に振つた。

「何でもございません。続お読みなさい。それ、せひして倉本主任が、
ザンの姿でこんな風に。」

1 真夜中の金魚鉢（後書き）

ザン＝重人格疑惑の真相、次話に続きます。なんとなくビクビクしながら更新中（笑）

2 半分だけトリップ

すると、倉本主任はため息をついた。

「まあ、順番に行こう。浮かび上がる文字を追つていって、富代がどういうわけか「中」にいるのがわかつた。信じられなかつたけど、目の前で怪現象が起こつてゐるんだから信じざるを得ない。それで、富代をこつちに戻せないかと思つたんだ」

主任の話は続く。

私を連れ戻そうと考えてゐるうちに、浮かび上がる文字による小説は、私がファイツ・シユボウルでザンと初めて会話した後の場面にさしかつた。部屋に戻る途中、元の世界に帰るためにには先生に会いに行かないといふ……と思つていた場面だ。

その時、私は「かめ？」とつぶやいたのだけど、その台詞を倉本主任が見た。そして私が、カメに乗つて海の上に行けないかと考えてゐることに気づいた。

とにかく、倉本主任は、自分のデスクの赤ペンを手に取ると、先生の文字の続きを割り込むようにして、こう書き入れた。

『ウミガメがやつてきた』

「えええ！？ ジヤあ、あのときやたらタイミング良くカメが現れたのは、倉本主任が赤入れしたからつてこと…？」

「そうなるな。小説はそのまま、カメが来たものとして進んだ。富代が自分からカメに乗つたせいかな」

倉本主任は飄々と続ける。

「で、女神に会えればこつちに戻つてこれるかと思つたんだが。まあ、そううまくは行かなかつたな」

倉本主任の言葉に、私は答える。

「だつて、先生が、自分が亡くなつたことほつしきづいてないし……酔つてゐる」

「ともかくだ。それで、いひちに戻る次の手を俺が必死で考えようとしてるのに、富代……お前はのんきにメシ食つてるわ、巫女としてこの世界を豊かにするとか言つてるわ。『勝手に動くな』と言つたのに」

それを聞いて、私は失礼ながら思わず、人差指を彼につきつけた。「あーっ！ ザンがいきなり『勝手に動くな』なんて言い出したのが、あれ主任が書いた台詞なんだ！」

「数年のつきあいだが、富代の性格はだいたいわかってるつもりだからな。何かやらかしそうだと思つて釘をさした」

当たり前みたいな顔をして、倉本主任がうなずく。

「その後の、『居心地よくしてどーすんだ』も！？」
「俺が元の世界に戻そうとしてるのに、お前はラグーンの世界になじみかけてる。そりゃ俺も突つ込むわ！」

頭を小突かれた。ひーん。

「ごめんなさいごめんなさい……え、でも」

私はぱぱっと顔を上げた。

「そうやって、ザンの台詞にまで割り込めるんですか？ 今のこの会話も全部書いてる？」

倉本主任は腕を組んだ。

「そこが俺にもよくわからない。今、俺はザンの身体で、富代と会話してるだらう？ これ、俺は『書いてない』んだ」

「？？？」

「富代、先生から渡された封筒の中身、全部見た？」

「話が変わった。私はついていくのに必死だ。」

「あ、いえ……ちゃんとは。設定資料も全部は読んでないですし」「絵が一枚、入ってたんだ。いや……地図かな？ ラグーン城の絵？」「何でそんな疑問符だらけ？」

「とにかく、この絵をしていると、ザンの視点でそつちの様子が見えるんだ」

「……よくわからないんですが」

倉本主任は、私をじんわりと見た。そ、そんな、可哀想な子を見るような目はやめて下さいよ。

「まあ、絵を持っている間だけ、俺とザンが二重人格になつてると思つてくれ。ザンの中に俺がいる。でも、ザンは俺には気づいてない。そういう状態の一重人格だ。なんかもう、そつちの世界もこつちの世界も両方ファンタジーだな」

絵を持っている間だけ。それに、意識だけ？

それじゃあ、主任は半分だけこちらの世界にトロツプしてるような状態なの？

「じゃあ、ザンは今……？」

「眠つてる。眠つてる間なら富代と会話できると思つて、真夜中に呼び出したんだ。あの手紙も、夕方ザンがうとうとした隙に急いで書いて、ズーアイを呼んで持たせた。ザンは知らない」

うわ、そんな危険な橋を！

「よくそんな、思い切つたことをしましたね」

本気で感心してそう言つと、倉本主任はまたため息をついて、私を見た。

「富代が、不安がつてたからだろうが」

あつ……。私の、ために。

「いいか、富代の姿は会社から消えている。先生のように死んで小説の世界に行つたなら、死体が消えるのは変だろ？。富代が死んだと考えるのは早計だ」

「そ、そうか。そうですよね」

私が何度もうなずくと、倉本主任は少し微笑んだ。

「どんな影響があるかわからなかつたから、物語の登場人物として振る舞つてるんだろう? 大変だと思うがもう少し様子を見て、富代が元の世界に戻る方法を考えよう。お前は一人じゃない。それを言いに来たんだ」

彼は私の腕を横からポン、と叩いた。暖かく柔らかい、血の通つた感触がした。

「ありがとうございます」

するり、とお礼の言葉が出た。主任が念押しどばかりに睨む。

「あんまり無茶なことはしてくれんなよ

「はいっ。気をつけます」

私は思わず「気をつけ」をした。本当、気をつけなくちゃ。

主任はちょっと視線をあたりに巡らせた。

「さて……あまり長く話してゐるわけにもいかない。俺はそろそろ戻る。ザンが目覚める前にな

「戻っちゃうんですか」

思わず、引きとめるようなことを言つてしまつ。

倉本主任は少し黙つて私を見て、それから困つたように微笑んだ。

「……そんな顔するな」

私は思わず頬に手をやつた。ど、どんな顔!?

「次の『夜』も、ここで会おう。な

主任は言つてくれた。また、ザンが寝てる隙に来てくれるんだ。

そう、やつと相談相手ができるんだ、私。

「はい、また!」

笑顔で敬礼して見せると、主任は一つうなずいてから、フイッシュボウルの奥のカーテンの影に消えた。

私は一人、フイッシュボウルに取り残された。

寂しがつてゐる場合ぢやないよね、うん。心強い味方が来てく
れた。きっと、元の世界に帰れるよ、私。

考へることとは色々ある。とにかく部屋に戻ろり、と踵を返した。

ファッシュ・ショボウルの入口に、リュウが立つていた。

「あ……」

私はあわてた。もしかして、会話、聞かれてた！？
リュウは困惑した声で言つた。

「やつと見つけた……リク、こちらにいらっしゃたんですか。でも、な
ぜこんな夜中に、神官と」

ザン（倉本主任）と会つてゐる所は見られたけど、会話は聞かれて
ない。たぶん。

とつさに判断した私は、ふつ……と下を向いてから、上田づかい
でリュウを見た。

「あの……恥ずかしいから、内緒にしててくれる？」「
リュウはハツ、と息を飲んで、うなずいた。

「す、すみません、気の利かない」と

無茶するなつて言われたけど、この状況でこれ以上の対応はない
でしょくらッショ！

神官と巫女の恋愛フラグ！

3 街からの客人

翌朝の朝食はしつかりいただきました。昨夜はほとんど食べてないからね。ズーイさんも私の食べっぷりを見て喜んでた。

食事の後に部屋を出ると、ドアのすぐ外にリュウが直立不動で立っていた。

「おはようづらいます、リク。具合はいかがですか」

微妙にリュウの視線がぶれるのは、照れてるんですかねコレ。ワイルド系の顔なのに、意外とウブだなー。

「おはようづらいます。もうすっかり大丈夫！ フイ……じゃない、あのホールまで行つてきますね

「お供しますようか？」

「一人で大丈夫です」

「あ……そう、そうですよね。失礼しました」

軽く頭を下げるリュウ。はは、ザンと二人きりで会うんだと思つてるんですね。気を遣わせてごめんね。

渡り廊下をいくつも渡りながら、昨夜の出来事を反芻する。

愛海先生には、先生が亡くなつてることを話していない私。そしてザン以下、この世界の住人には、ここが未完の小説の世界なのだということを話していない私。話すこの世界がどうなつてしまふのか、わからないためだ。

この二つのことを隠したまま、倉本主任と会つて自由に話すためには、やはり神官と巫女が恋仲で、しかもその関係を隠しているという設定がベストだと、改めて思つ。

だってザンは、自分が夜中に倉本主任として私と会つてたことを知らない。そんなザンに、誰かが「巫女どのとイイ仲になつちゃつ

たみたいじゃないすか」「なーんて突っ込んだら困る。でも、そんな人はいないでしょ？ 神官様なんだし。

あ、シユリさんヤーハさんだけは突っ込むかもしれないな。あの二人にはできれば知られたくない。リュウが黙つてくれるといいんだけど……まあ、口は堅そつだけどね。

フィッシュボウルの入り口の手前まで来て、中から人の話し声がすることに気づいた。ザンと……誰だろう？ 聞き覚えのない男性の声。

出直そうかと迷つていると、後ろから給仕の女性がトレイに飲み物のグラスを載せてやってきた。

「巫女さま、おはようございます。お客様？」

「ひかりの話し声が聞こえたらしい。

「リク！」

中から呼ばれて覗き込むと、ザンが駆け寄つて来るとこりだった。うは、男性が自分に向かつて駆け寄つて来るとこりつて、ちょっとキュンと来るね。

「昨日、体調を崩したと聞いて……もう大丈夫なんですか？」

私の前で急停止したザンは、顔色を確認しているのか、長身を少しががめて覗き込むように私を見た。

「平気平気、全然大丈夫です！ 昨日はちょっと、ええと……女神さまと長く話しあげて、っていうか。でももう回復したから」自分が死んでるんじゃないかと思つて落ち込んだけど、もう倉本主任と話して落ち着いたから……なんて、説明できないわな。

「本当に大丈夫ですか？ 今日は海上には出ないで、ゆっくり休んで下さい」

きつぱりと言わってしまった。ああ……愛海先生に会いに行つて

来るよーって言いに来たのに、禁止されてしまったわ。仕方ない、
様子を見てからにしよう。

「わかった」

私はザンの顔を見返しながら言った。

青と緑のまじりあつた瞳……昨夜はこの瞳が黒く光つて、違う表情を持っていた。倉本主任の表情。

ザンは愛海先生に似て、少し女性的と言つてもいい綺麗な顔をしている。でも、身体つきは細身ながらも筋肉質で、男性以外の何物でもない。

一方の倉本主任は、ザンとは逆に顔が怖いんだよね。夜に自転車で走っていて、警察官の職務質問（「その自転車、あなたのですか？」）に引っかかったこと数回、と聞いたことがあるけど、さもありなんという感じ。ま、まあ、よく言えば、キケンなかほり？
彼女がいるのかどうかは知らないけど、何となく女の人に警戒されそうだなー。気さくな、いい上司なんだだけね。

今はザンとして私の前にいる彼だけど、会社ではそんな倉本主任がザンの中から私を見ているのかな？ 自分のデスクでの怖い顔をして、右手に赤ペン、左手に地図を持つて？

想像したら可笑しくなつて、思わずザンの瞳を見つめたまま頬を緩めてしまった。

「リク……？」

ザンの瞳が戸惑つたように揺れて、私ははつとした。
いかんいかん、わけもわからず笑いかけられても困るよね。気をつけなきや。

「お客様でしょ？」

聞くと、我に返つたようにザンはうなずいた。

「ええ。リクもどうぞ」

「？」

うながされて中に入ると、フィッシュユボウルの中央に大きなテーブルが出ていて、そこに男性が一人立っていた。

第一印象は、『ベテランの漁師さん』。見た目は四十代後半くらい、短く刈り込んだ髪によく陽に焼けた肌、貫頭衣からのぞく腕は隆々と盛り上がっている。濃いタイプのハンサムなおじさまだったけど、少し疲れたような目元が印象的だった。

「街の代表をつとめておられる、ナキ殿です」
紹介されて、あいさつをした。じつじつした手と握手する。ナキさんね。

「リクが現れた話を聞いて、ちょっと面白い提案をしに来てくれたんですよ」

「巫女さんのことは、街でもずいぶん噂になっていますよ。女神マーナに会いに、海上に行かれているそうですね。ずいぶん苦労されているとか」

ナキさん つまり町長さん？ はそつと、テーブルの上に広げられた紙を私に示した。

「これは、ラグーン城を中心とした地図です。ここに載っている範囲は、私たちが住むことのできる場所です」

地図。最近聞いたばかりの単語に、私は身を乗り出した。

それは、絵地図のようなものだつた。いわゆる地図記号の入った地図じゃなくて、お城の位置にはお城の絵が描いてあるし、街も小さなドーム状の家をたくさん連ねて描いてある。

街の周りには、昨日テラスから見たような海草の森、海流の河などが描き込まれていて、さらに街を挟んでお城の反対側に、山がい

くつか描いてあつた。

「山がある……」

私がつぶやくと、ザンが横でうなずいた。

「昨日はあまり視界が良くなくて、見えにくかつたかもしれませんね。昔の海底火山のあとです」

「この中だの、イ・ハイ山が一番高いのですが

ナキさんが、その山の絵を指さす。

「この頂上に、塔を建ててはいかがかと、今ザン殿に提案していたところです」

「塔?」

ナキさんを見ると、彼は軽い身振りで、両手を下から上へスースと上げた。割と細身の塔を表してゐるっぽい。

「海上まで届けば一番いいですがね。届かなくとも、ある程度の高さがあれば、巫女ども海上まで行きやすくなるでしょうね。何か、簡単に塔を上の手段を作れば」

「わ、私のために!?」

ナキさんは例えば、海底と海上をつなぐエレベーターみたいなものを考えてるの?

「はは、そうですね、第一は巫女どのが『神託を受ける時のために。それに、我々は海上に出ることは叶いませんが、例えば内部をこの空気で満たした塔を海の上まで届かせることができれば、街の者もついに海上の世界を田の当たりにできるわけで。いや、つまり自分が見てみたいだけなのですがね」

ナキさんは微笑む。

私は、潜水艦の潜望鏡のようなものが海の上に突き出でている所を想像した。外から見ると、潜望鏡のレンズの中でお田田がぱちくりしている、昔のアニメみたいな様子を。

空と砂浜しか見えないと思うけど、初めて田の当たりにする海上の世界は、ここの人々の田を樂しませるに違いない。海とは違う空の青、太陽の強い光に照らされた輝く砂浜、寄せる白い波。

「すごい計画ですね」

心から感心して言つと、ナキさんはまたちょっと笑つた。

「さあ、街の者と話しあって設計図を起こしてみます。楽しみ

にしていて下さい。何かアイディアがあつたら、どんどん書いて下さいね」

ナキさんが帰つて行き、ザンと私はフイッショボウルに残された。私はしばらく地図を眺めていた。この絵地図、ザンが描いたんだつて、うまいなあ。こうしてみると、街の家々は密集してるけど、周りの土地もそれなりに動けるんだね。

ふと、ザンが話しかけてきた。

「リク、山を見に行つてみますか？ 街を通つて」

「今から？ いいの？」

「ああ、ズーアとリュウには知らせておかないとね。心配しますか

「ちゅうどグラスを下げるやつってきた女性に伝言を頼むと、私たち
はフィッシュボウルの奥から城の正面に出た。

テラスから明るい街を一望する。

身体を取り巻く空氣もどきに流れが感じられ、髪が揺れた。きっと海流に影響されてるんだろうな。

「いきなり、ザンがテラスの手すりの上に上つたので、私は仰天した。」この下、一応三階建てくらいの高さがあるんだけど！？

「ちよつ、危ないザン、降りて！」

駆け寄つてザンを見上げると、彼はちよつと目を見張つてから、悪戯っぽく笑つた。

「ああ……そうか。リク、ちよつと」

私の方へいつたん降りると、

「失礼」

私の膝裏に手が……って、何で抱つこ？……えええ？？？

「ぞ……」

「僕に任せてみて下さい」

ザンは、私を抱えているにもかかわらず、軽い動作でテラスの手すりに腰かけると、長い足をひょいと上げて、座った場所を中心につるりと回転した。

テラスの、外側へ。

「…………！」

ザンが足で軽くどこかを蹴り、私たちは宙に投げ出された。とつさに、ザンの首にしがみつく。

「うううときって時間がゆっくり感じられるものなのか、落下的スピードが緩やかなような……緩やか？」

とん、と軽い振動があり、ザンの足が海底の砂を少し舞い上げた。彼は私をそつと降ろしてくれた。ラグーン城の前庭なのか、ソファ「コーラルがゆらゆらと揺れてい。

「びっくりしましたか？」「いやって降りても大丈夫なんですよ」口をパクパクさせている私に、ザンは笑いかけた。笑顔が近くで、私はあわてて一步離れる。

「海の上の世界よりも、空気に抵抗があるので。まあ、逆に飛び上がるのは無理ですけどね」

「心臓止まるかと思ったよ……！」

ため息をつく私に、すみません、とザンは肩をすくめた。

ん？ 待って、今の会話で何かおかしいところなかつた？

私はもう一度会話を振り返ろうとしたけど、ザンが

「それじゃ、行きましょう

と歩き出しちゃつたので、ひとまず後をついて行くことにした。

うーん、今の会話、倉本主任も読んでいるはずだから、後で聞い

てみよう。何がおかしかったのか。

前庭はそのまま緩やかな坂道になり、街へと続いていた。

街の家々はやはり小さなドーム状をしていて、それらがくつつきあうようにぎっしりと並んでいる。その間の砂地の道を、ザンと歩いて行った。

街の中心の方は屋台村になっていて、生活に必要なものはそこで売り買いされているらしい。

あまり人通りは多くなかつたけど、時々すれ違う人々はこちちらに会釈してくれるし、子どもたちも笑いかけてくれる。

街の人々は、男性は貫頭衣とぴたりしたズボンにサッショベルト、女性はズーアイさんのようにベアトップと巻きスカートという服装で、ザンや私のような服装の人は見かけなかつた。

だからきっと街の人は、私たちを見ただけで『神官』『巫女』だとわかるのだろう。

なんか、目立つちやつて嫌だなあ。私も一般女性と同じ格好したい……。

そんなことを思つていると、ザンが「リク、あれがイ・ハイ山です」と指さした。私は顔を上げた。

前方の、街が途切れたその先に、山が見えた。

「わ、本当に海底の山だ……」

思ったより高くない。登つてもそんなに苦にならなさそうだ。海藻や海草などは生えていない、じつごつした殺風景な黒い山だつた。「僕の記憶は四、五歳のころからですが、ずっと変わらなかつた景色がついに変わるとかと思うと、ちょっとドキドキしますね」ザンは、じつと山を眺めた。

私は、山の頂上に塔が立っている所を想像した。

そしてふと、聖書に出てくる『バベルの塔』を思い出した。人間が天まで届く塔を建てようとして、結局挫折する話だったつけ？人間の業や奢りを戒める内容だったような気がする。

海底から、女神のいる地上まで届く、高い塔 そんな塔を建てても、大丈夫なのかな？ 愛海先生は怒つたりしないと思うけど……。

一抹の不安を覚えた私は、愛海先生に聞いてみなくては、と心にメモをした。

ラグーン城に戻るところにはずいぶん時間が経つてしまって、結局愛海先生に会いに行かないまま、『夜』になってしまった。私は夕食後、倉本主任に会える真夜中まで、部屋で退屈な時間を過ごした。あー、何かヒマつぶしがいるな、これ。

4 建設計画（後書き）

次話、再び倉本主任との逢引を。なんか怒ってる……？

アルファポリスファンタジー小説大賞に、『離面の乳母さま』と『イマジネーション・ラグーン』をエントリーしました。詳細は活動報告もしくはアルファさまホームページにて（バナーから行けます）。初エントリー、楽しませもらっちゃいます！

投票すると抽選で賞金が出るそうですよ～一緒に楽しみましょう

5 ほつとある時間（前書き）

9／2修正 話が次の内容と前後してましたつすみませんーー

5 王と巫女の時間

城が寝静また頃、私がまたこつそりとフィッシュボウルに行くと、ザン（倉本主任）はすでに待ち構えていた。

「こんばんは、倉本主任」

近づいて、瞳が黒いのを確認してから話しかける。

「…………みやしの」「UN」

「あ、あれ？ なんか、怒られる時の雰囲気がひしひしと。 原因は、アレ……？」

「あのう、神官と巫女が付き合つてゐることにしたの、まさかつたですか？」

「…………いや…………確かに色々と都合はいいし、展開が早まつただけと言えばそれだけなんだが」

倉本主任は目線を逸らすと、ながーい溜息をついた。

「元々、ヒロインは神官にほのかな恋心を抱く設定になつてたようだからな。あくまでも、ほのかな、だぞ」

「ええ、そりや、もともとヒロインは小学校高学年くじりこつて設定でしたから、そんな愛憎渦巻く展開にはなりようが…………」

答えた私は一つ大事なことに気がついて、あ、と声を上げた。

「そういえば、いわゆる『巫女』って処女が基本なのかなあ」

がく、と倉本主任の膝から一瞬力が抜ける。わあ、ザンの身体で「うこうこうアクションって新鮮。

「…………今、この台詞には突つ込まないでおいてやる。だが、少なくともこのこの世界で男と変な関係は持つなよ！ ザンに限らず、だ！」

「言わなくてもわかってますよ」

私は肩をすくめ、上田づかいで主任の様子を窺つた。何だか今日、機嫌悪いな。

「そうだ主任、今日、変だと思ったことがあつたんですよ」
話を進めよう。私は城から出た時のこと主任に話した。テラスから飛び降りてもここでは大丈夫なのだ、と言つた時のザンの説明に、何か違和感を感じた事を。

倉本主任はうなずき、私に座るよううながした。二人並んで、長椅子に腰かける。

「物語的に、変だよな。ザンが地上の世界を知ってるみたいなセリフだ」

「え？」

「『海の上の世界よりも、空気に抵抗がある』って説明してた違う。あれは、この世界しか知らない人間には言えないセリフだと思う」

「あつ……」

「そうだよね。ここの人間は生まれた時から、こういつ空氣の中で暮らしてるんだから。」

「ザンは、記憶があるのは四、五歳のころからだと書いてました。それからずつとここにいるって」

「じゃあ、ここに来る前は地上にいた設定なのかな。それならまあおかしくはないが……いや、でもやつぱりちょっと不自然か？」

「たいしたことじやないんですけど、つじつまが合つてないと何だか変な感じがして」

はあ、と私はため息をついた。小さな緊張が続いてるから、地味に疲れるんだよね……。

「今日は、塔の話が出ていたな」

倉本主任の言葉に、顔を上げる。

「一応、この世界では、海の上は女神の領域なんだよな。女神と巫女しか立ち入れることのできない世界。そこと海底がつながる……」「はい。だから、この話はちょっと愛海先生にもしてみようと思つて」

「わうだな」

「あの、倉本主任

私は尋ねた。

「そつちつて、今はいつなんですか？」

「土曜日の午後。富代がいなくなつた金曜日の、翌日の夕方」

「あ、こちらの方が時間が早く流れてるんですね」

戻つたとき、浦島太郎にはならなさうね。

倉本主任は横田で私を見た。

「あんまりそつちでのんびりしてると、逆・浦島太郎になるかもしれないぞ」

「うわあ。元の世界に戻れても、私だけおばあちゃんになつやつてたり？ それイヤ。」

「あ……倉本主任、まさかずっと起きてるんだですかー？」

「別に、一日徹夜くらい大したことない」

「食事はー？」

「さつき『コンペリー』走つて買つてきた」

言葉が続けられなくなつた。迷惑かけまくつてるな、私……。

「お前のせいじやないんだから、気にするな」

私の表情から心を察してくれたのか、倉本主任は軽く私の頭をポンと叩いた。そして、さつきと話を戻す。

「とにかく、その白い塔ができるには長い時間がかかるだらう

な

あれ？ 倉本主任の声を聞いてたら、何だか眠くなつてしまつた。私は自分の声を意識しながら、ゆっくり返事をする。

「はい……完成を待つつもりはないです」

「そうだな。その前に、物語を破綻させずにヒロインが地上に戻る話を、俺の手で書き込めないものかと……璃玖？」

はい、と私は顔を上げた。うわ、ウトウトしてた。

「お前なー……まあ、疲れてるんだろうが」

「すみません……何だかホツとするんです。主任と話していると」

うー、目がしばしばする。私は子どもみたいに目をこすった。

「……とにかく、明日は愛海先生に会えるように行動してくれよ」

倉本主任の声が、少し遠い……。

身体が何か、がつしつしたものにもたれていった。温かくて気持ちいい。

「そりや、この身体で何かしたりはしないけどや……」

つぶやきが振動になって伝わってくる。くらシシコ、意外と渋い

美声。

そういえばやつさ、私の」と「璃玖」って名前で呼んだ。いつもザンにそう呼ばれてるから、自然すぎて気がつかなかつたな。

もう一つ、倉本主任の言葉で「あれ？」つて思つたんだけど……なんだつけ……？

田が覚めたら、自分の部屋のホタテベッドの上だった。部屋の中も、窓の外も明るくなつていて。

朝一？ うわあ、倉本主任、ザンの身体でここまで運んでくれたのコレ？ ということは。

「おはようございます、リク」
あいさつするズーイさんの笑顔が、なんか意味深でした。……で
すよねー。

朝食後、私はまたフィッシュボウルの方へ向かい、出かけようと
しているザンを呼び止めて許可をもらつてから、ウミガメくんを呼
んで海上へと向かつた。

5 ほつとかわる時間（後書き）

次話、遊森的に2回目の盛り上がりです。楽しみにしています（遊森
が）

6 一・年・後（前書き）

前回と今回の話で、少し内容が前後してしまった部分がありました。
前回を9／2午前中にお読みになつた方、同じ話がチラリと出てくるかもしれません。修正済みです、失礼いたしました。

「海底から海の上に届く、塔をー？」

愛海先生は、面白そうに瞳をきらめかせた。

「原作者……女神さまが面白がってどうするんですか？」

「だって、私も予想してなかつたものー、こんな展開。キャラが勝手に動くつて、こつこうことを言つうのねー」

そして、ぽんっと手を打つた。

「そつか！ あの地図に描いてあつたの、塔だつたんだ！」

「地図？ 小説と一緒に封筒に入つてたのですか？」

倉本主任の話を思い出して、私が言つと、先生は「そつか」とうなずく。

「それつて、先生が描いたんじや？」

「つりん、違うの。ヨウちゃんが……弟が描いたの、四歳の時」

四歳の子が描いた、地図？

ははあ、それで倉本主任、「地図のような絵のよつな」みたいな言い方をしたのね。

「当時七歳の私が海の底のお話を思ついて、弟に話したら、弟が描いてくれたのよー。参考にと思つて、小説と一緒に入れておいたのー」

先生はクスクスと笑つた。

「青いクレヨン一色で、お城やら街やらがガーッと描いてあつて、わかりにくい絵でね。山の上に棒みたいなものが描いてあつて、てつきり海底火山が噴火してるところだと思つてたんだけど、あれが塔だつたんだわー。なるほどなるほど」

先生はうなずいてるけど、女神さまはたつた今、それに気づいた

のよね？なのに、お話の中ではすでに塔の話が出ているのは何でだら？ 弟さん＝ザンが考えたのかなあ。

先生は飛沫を輝かせながら、私の周りをすいーっと泳いでまた海上にすらりと立った。

「そつか、海の上を見に来るのかー。空と砂浜だけで、みんな喜んでくれるかしら？」

「初めての光景だから、きっと感動だと思いますよ。でも例えば、縁があつてもいいかも」

何気なく提案してみると、先生が身を乗り出した。

「それいいわね璃玖さん！ 森があつてもいいかもしねー！」

「森ですか？」

「うん。今はこんなだけー」

先生は手を振って、辺りを示した。

「もうちょっと何とかしようかなって。ほら、森の養分が水に溶けて川に流れて、海が豊かになるって話、聞いたことないー？」

「ああ、あります。そういえば

『森は海の恋人』だけ？ そんな言葉も耳にしたことがあるような。

「いいと思わない？ ラグーン世界にとつても、ここを見に来る人にとっても」

先生は機嫌良く笑つて、

「塔ができるまでにはずいぶん時間がかかるだらうから、その間に少しは木々が育つかな？」

「え、女神様でも『森ができました』の一文で森を出現させるとできないんですか？」

驚いて聞いてみる。

「だつてなんか、後から急にひじつま合図わせするみたいで変じゃない？ 整合性がないっていうかー」

ほへ。ヨツパーが整合性を説きますか。でもさつと先生基準では、いくらファンタジーだからってやりたい放題やるのはどうか、つていう美学みたいなものがあるのかも。

「そうですね。でも、塔の方は大工事でしうから、完成を見届けるほど長くは私ここにいられませんよ。早く会社に帰らないと」私はウミガメ君の甲羅につかまつたまま、ため息をつく。できれば月曜までに戻りたいんだけどなー。

まあ見本出しも終わってるし、数日なら倉本主任が有休でひじつかまかしてくれると思つけど。

「ふふ。それなら、早く塔を見られるようにしてあげよつかー」

先生が私に顔を寄せて、内緒話をするように言った。その神々しさ（女神なんだから神々しいの当たり前だけ）に、ドキドキする。「み、見られるようになつて？」

「時間の経過よ。お話の展開には必要よねーー！」

先生はふわりと身を起こして、両手を広げた。先生を取り巻く真っ白な光が、急に強くなつた。

「行くわよー」

「え？ え？」

まぶしさに目を開けていたれなくなつて、私は目を覆いながら叫んだ。

「時間の経過つてなにーー？」

光が収まつて、私はおそるおそる目を開けた。

自分も、田の前の愛海先生も、何も変わらないよつて見えるけど……。

先生がちょいちょいと後ろを指わすので、私は振り向いた。

遠くに見える砂浜に、鮮やかな若葉色の一帯が出現していた。

「一年経つて、森の苗木がずいぶん育ってきたといひよー」

つぶら、と嬉しそうな愛海先生。

私は自分のあじが、ガクンと落ちるのを感じた。

「せんせ…… 一年つて、ラグーンの世界も？ 一年後になつてる
んですか！？」

「もちろん、そりよー。塔もずいぶんできてるんじやないかしら、
計画倒れになつてなければだけど」

「下、どうなつてんですか！？」

声をうねざらせる私に、女神様は首を傾げてこいつ。

「ああ。みんなそれぞれの生活を営んでて、私はタッチしないわ
ー」

ー

「先生！ 私は早く会社に戻りたいんですけどー！」
半泣きになつて言つと、先生はちょつと「しまつた」的な顔をして、私の手を取つた。

「「めんなさい、それもちゃんと考へる！ 私の考へた世界なのに、
どうしたらいいのかわからなかつたけど、もしかして璃玖さんがヒ
ロインとしての役割を終えたら、帰れるのかしらー？」

「ヒロインとしての、役割？」

涙が引つ込んで、私は聞き返した。

「やう。ヒロインが何か行動して、物語として何か区切りがついた
らこいんじやないかな、なんて思つた。もちろん、『めでたしめで

たし『 系でねー？』

私は、透き通る海の中でも魚が泳いでいるのを見つめながら、しばらく考え込んでしまった。
役割……。

ウミガメ君の背につかまって、海の中を戻つて行く。

ラグーン城とその周辺が見えてきて、私は目を見張った。

うわー、ホントに塔ができるよ！

まだ上方がいかにも建設中という感じだったけど、サンゴだか石灰石だかでできた真っ白な塔が、イ・ハイ山の山頂に建っていた。まるでねじった棒状のキャンディみたいで、メルヘンチックで可愛い。誰のデザインかなあ。

海の上までは、あとほんの数メートルというところ。完成したら、一体どうなるんだろう……。

ラグーン城のファイッシュキューポウルに戻る。

ズーアさんに頼んで、ファイッシュキューポウルの隅に海藻を入れた壺を用意してあった。それは今日も、ちゃんとそこにある。

取り出して彼（雄雌の区別つかないけど）に差し出すと、彼はパクリとくわえて悠々と上から出でていった。どこかお気に入りの場所で食べるのかしぃ。

私はこの一年、ここでどんな風に過ごしたことになつてるんだろう？ もう少先生、無茶苦茶なんだから、何が整合性だ！

「リク」

声がして、私はおそるおそる振り向いた。

奥のカーテンの陰から、ザンが入ってくるといひだつた。
少し髪型が変わつてゐる。前髪を伸ばしたらし。一年後のザンな
の……？

「お帰り。今日はすいぶん時間がかかつたから、ちょっと心配した
よ」

近寄つてくるザンの口調が、以前と違つ。フレンドリーになつた、
つていうよりはむしろ……甘さ増量？
嫌な予感が、イヤーな予感がします！

固まる私の前に立つたザンは、甘やかな笑みを浮かべて私の頭を
自分の胸に引き寄せると、私のおでこに キスをした。
「疲れない？ あちらで何か飲み物でもいかがですか、婚約者ど
の？」

いのままじや私、愛海先生の義妹になつちやうんですが。

自分の部屋の窓枠にあごを乗せて、私はぽつねんと窓の外を眺めていた。

もう『夜』で、明かりは落ちてゐるけど、街にはまざまざに常夜灯らしき明かりが見える。都会の星空のようだ。

そう、私の部屋も違う場所になつてたのです。お城の中ではあるんだけど、別棟のザンの家やフィッシュ・シュボウルにかなり近い、お城の正面側。

そりや、部屋がフィッシュ・シュボウルに近い方が、夜中に倉本主任に会つのが楽だなーと思つてたことは認めるよ。でもまさか、こんなことになるとは。

ホタテベッドまで、前の部屋よりグレードアップしてゐる。貝・パールのようなものがあつちこつちビーズのようにちりばめてあつて、キラキラしそぎて落ち着かないつたら。

私はため息をついた。

さつきフィッシュ・シュボウルでザンに衝撃の言葉を告げられてからは、呆然としている間に手を引かれ、ザンの家の裏にある庭に連れて行かれて、そこベンチでお茶した。

並んで座つた身体の距離が近い、今までとは段違いに近い。完璧に恋人同士の距離。

シコリさんがどこから帰ってきて、

「やあ、リク」

とこつこりしていったけど、その笑みもなんだか「全てわかっているよ」的な笑みで、ああああ親公認かい！ と心の中で叫んでしまったよ。

……そりやそうか、恋人じゃなくて婚約者だもん……。

「あの塔、考へてたのよつちよつと可愛らしそぎたよ。田にしたから余計」

なんてザンに照れ笑いをされ、私は曖昧に微笑みながら首を横に振る。ザンが考えたんだね、あの塔の「デザイン」。

「今日、漁師たちの会合につけよつと顔を出したんだけど」

ザンは続ける。

「リクが女神マーナに頼んでくれた『海の上の森』のこと、みんな喜んでいたよ。海がさらに豊かになるって」

「そ、そう。良かった」

まっすぐ見つめられ、私はさりげなく飲み物のグラスを手に取り、ことで視線をそらした。

ザンのひたむきな瞳にドキドキするのも、そしてそれを倉本主任に気づかれるのも、本当にほんつと一に困る。

うう、早く一人になって落ち着きたい。すでに結婚してましたーじゃなくて良かった。ザンと一緒に部屋じゃなくて本当に良かったよ。

先生の小説は全年齢向けファンタジーだから、もちろんそういうシーンはないだろうけど、ザンを通して倉本主任がいると思つと色々と悶絶モノですか？

「何だか……リクは僕にはもつたないような女だな^{ひと}
ザンが、ふと目を伏せた。長いまつげが影を落とす。

「僕は、君のように女神の声を聞くわけでもないし……自分が何のためにここにいるのか、わからなくなる時があるんだ」

私はつい、ザンをじっと見つめた。

こここの世界の人たちは、物語が完結していなくても、たくましく地に（海底に）足を着けて、生活を営んでいきつつあると思ってた。でもザンは違うんだ……どうして？ やっぱり、生い立ちに関係があるの？

それを理解するには、私はザンのここでの人生を知らなさすぎる。だって、どうせ別れる人だと思って、この人の表面しか見てこなかつたんだもの。

色々聞いてみたい」とはあつたけど、ここを去る予定の私は、聞くべきじゃないと思つた。

「何かあると、みんながザンに報告しに来るじゃない。この世界全体を把握してる人つて、必要だと思つけど？」

私は、それだけ言つた。こんな上つ面な励ましで、ごめん。

「そうかな」

それでもザンは表情を緩めると、そつと手を伸ばして私の髪を撫でた。

「リクのことを幸せにできたら、自分がここにいる意味も実感できるかな。……大切にするからね

また、宝物みたいに大事に、胸に抱き寄せられた。少しづつくへ生地でできた服の向こうで、脈打つ鼓動。

ハツ、されるがままになつてる場合じやない！ 私はパツと身体を離した。

「リク？」

「つうえほつ、げほ！ んあ、なんかむせちゃつた、何だろねえ、ははは

どんな」まかしだよ。

……今夜も倉本主任に怒られそうな予感……。

私は、またに海の底に沈んだような気分で落ち込みながら、真夜中を待つた。

はい、『ベラリ・シユ愛の説教部屋』です。

ザン、じゃなくて今は倉本主任の彼が、腕を組んでむつりしている前で、私はしおりじくうなだれていた。

真夜中のフィッシュボウル。白い壁も床も、泳ぐ魚たちも、澄んだ青に染まっている。

そんな幻想的な空間で交わされる言葉が、これ。

「お前、俺にナニを読ませたいんだ！？」

「私のせいですか！？」

「神官と巫女が恋愛関係つていつ設定にしたのはお前だろが！」

「うわあんそうでしたごめんなさいごめんなさい」

で、でもさ、私がこの世界にトリップしてきた時点で、ある程度しそうがない」ともあると思うのー。小学生なら起こり得ない」とでも、二十六歳のしなら起こりつてしまつてことはー。

いや……そこまで考えなきゃいけなかつたのかな。私が考えた設定を元に、ザンはこの一年で恋を育んでしまつた。悪いこと、しちやつたのかな……。

「まあ、時間が飛んだのは富代のせいじゃない。その間に勝手に事態が進行したのはしようがない」

まるで私の考え方を読んだかのよつて、倉本主任。この人は本当に、私の表情をよく読んでしまう。

「とつあえず、結婚式まではどつにかして守つてやる

「何を？」

「お前の真操！」

「……ああ」

「ああつて……」

とうとう倉本主任は脱力して、長椅子にどつかりと座り込んだ。自分の片膝に片ひじをついて、もう片方の手で長椅子の片側をちゅいちょいと指す。私もそこに座つた。
つまり、私とザンが怪しい雰囲気になつちやつたら、倉本主任が赤ペンで邪魔を入れてくれる、つてこと？

「でも……そんな、倉本主任だつてずつとこちらを見張つてるわけにはいかないでしょ？ 少しは寝て下さい。それ、今これから！ 私、朝になつてもなるべくザンに会わなによつにしますから」

「わかった

「食事もちゃんと取つて下せよ？」

「わかった」

絶対この人聞いてないよ。でも、何か考え方をしてるようなので、私はいつたん口をつぐんだ。

8 囚われる思い

「アーチャーさん、か」

「ほそり、と倉本主任がつぶやいた。

ああ、弟さんのことを考えてたのか。

愛海先生は、弟さんのことをすく可愛がつてたんだな。弟さんの描いた絵を、ずっと大事に持つてたくらいだもん。主任もそのことを思つてるんだろう。

そんな弟さんをモテルにしたザンヒ、何だか変なことになつちやつて、ごめんなさい。

「あの設定、やつぱり入れたらいいんじゃないや……？」

「あの設定？」

「『巫女は処女でなくてはならぬ』……そしたら、結婚だつて形ばかりに……」

そこまで言つたものの、私は罪悪感を覚えて口をつぐんだ。そして、自分が罪悪感を覚えた事に、ショックを受けた。

もう、私はザンのことを、ただの小説のキャラクターだなんて思つてないんだ。だから、嘘をついたり傷つけたりしたくない。……ちょっとちよつと、しつかりしないと。私は帰るんだよ？

元の世界に。

「こいつ、さつきも、巫女がなかなか海上から戻つてこないって、何度も海面を見上げてた」

倉本主任が、ぼそつとこぼした。

そんなこと言わないでよ……その顔で、その声で。

そう思つたけど、私は黙つて彼の話を聞く。

「ザンはたぶん、結婚して家族を作ることに、人一倍あこがれてる

んだろうと思つ。養父母に可愛がられて育つたとはいえ、神官という身分があるために他の家庭との交流もないだろうから、ごく普通の家庭がどんなものか知りたいという気持ちも強いんだろう」「私がじつと主任を見つめると、彼は肩をくわめた。

「いや……俺も結構フクザツな家庭で育つてゐるんでね。色々、ザンの気持ちを想像してしまつ」

「そつ、なんですか？」

……もしかして、ザンの日を通してラグーンの世界にいるせいで、倉本主任はザンにずいぶん感情移入してゐるんじゃないだろうか。

「でも、私は帰るんです！」

私は、ザンの姿に宣言するよつに言つた。

「きつかけを作つちやつたのは私で、それは悪いことしたなつて思いますけど。でも、本当の結婚なんてもちろんできないし、しません。今日は状況把握に手一杯で何もできなかつたけど、必要なら明日からだつて、つれない態度を取るくらいやつてみせます」

ああ……落ち込む。ザンみたいな人を、嫌いでもないのに振らなくちゃならないなんて。振る側だつて辛いんだつ。

「早く、そつちに帰りたい」

口に出したら泣きそうだよ、もつ。

不意に、倉本主任の手が私の肩に回つた。
ぐつ、と力が入つて、抱き寄せられると、思つた。

彼は、そつと手を離して言つた。

「……このまま、お前を連れて帰れたらいいんだけどな」
視線が絡み合つた。でも、それも少しの間だけで、逸らされる。少し、沈黙が落ちた。

主任が、自分の膝をポンと叩く。

「余計なことを言つて悪かつた！ 璃玖がこいつちに帰る」とだけ考えよう。」

「そうしましょ。」

「ソーリーに行ひアドライヒー。 元々私はそういうキャラじやないの。」

「で、言つにくいんだがな、璃玖。結婚式まで、たぶんわつあまつ時間がないぞ。」

「え？」

「ザンとナキが、話してたんだ。塔の完成セレモニーと結婚式を、同時にやつたらどうかって」

それを聞いたとき、私が考えたのは、自分の貞操の危機のことなんかじやなかつた。

前回の『夜』に倉本主任が言つたセリフで、何がおかしかつたのかに気づいたのだ。

あのとき、まだ塔は計画段階で、デザインも何も全く決まっていなかつたのに、倉本主任は言つた。

「白い塔」つて。

なぜ、これから建つ塔が白だとわかつたの？ 愛海先生の弟さんが描いた塔は、青いクレヨンで描いてあつたのに？

それに、だんだん私のことを「璃玖」と名前で呼ぶよくなつてきて……。

私は背筋がぞくりとするのを感じた。

倉本主任とザンの人格が、混ざり始めてるんじゃないだろうか？ 「のままだとどうなるの？ 倉本主任もこひらの世界にとらわれて、戻れなくなるんじや……。

早くこの物語を終わらせないと、取り返しのつかないことがあるかもしない。

先生は何と言つてたつけ？ 困切りとなるような出来事が終わつて、私がヒロインとしての役割を済ませれば、元の世界に戻れるかも……？

『 もうろん、『めでたしめでたし』 系でねー』

一つ、その条件を満たすことができる方法がある。

私は密かに、ある決意を固めた。

本当に倉本主任が危なくなつたら、この方法を実行するしかない。私のために、主任を巻き込むわけにはいかないよ。

「 璃玖？ また疲れてボーッとしてるのか？」

倉本主任が、私の前で軽く手を振る。

「 考えてたんですよつ。どうしたらザンと結婚しないで済むかって！」

私はわざといつぱく、少しイライラしている演技をして主任をひたすら見つめていたんだ。

主任には、気づかれないようにしなくては。

8 囚われる想い（後書き）

9／6 拍手小話更新しました！

9 心残り

翌朝の朝食後、私はズーリに貝殻インターほん（？）の使い方を聞いて、ザンに連絡をした。倉本主任に言つた通り、とりあえず今朝は顔を合わせないようにしたかったので、こつやつて簡単に女神のご神託を受けてくることを伝える。

ザンもこれから用事があるらしくて、特に突っ込まれずにほつとしたよ。

自分の部屋を出てすぐの所でウミガメくんを呼んでみたけど、来なかつた。

お、倉本主任、ちゃんと私の言つたことを聞いて少し仮眠を取つてるのかも。よしよし。

フィッシュ・シュボウルの外壁を一人で登つて、上からあたりを見回してみたら、城の裏手の方でウミガメくんを見つけることができた。今までに比べたら面倒だけど、大した労力でもない。私はもう一度フィッシュ・シュボウルを降りて、ウミガメくんのいた方に向かつた。

その途中、渡り廊下で呼びかけられた。

「巫女殿、おはようございます。ちょうど良かつた」

町長のナキさん（実は一年ぶり）が、微笑みながら歩み寄つてくれる。

な、なんかこの人、迫力増したなー。やっぱりちょっと疲れてそうな感じはあるけど、眼光鋭いというか。塔の建設プロジェクトに燃えてるのかしら。

「おはようございます、どうしたんですか」

「塔の完成も間近になつたのですが、女神マーナにはお変わりあり

ませんか」

「ええ、全然お変わりありません」

相変わらず酔っ払つてゐるよつた感じだしね。あの酔いつて、いつ

覚めるんだろ。

「塔ができるがるの、女神さまも楽しみにされてるよつですよ」
付け加えると、ナキさんは「それなら良かつた」とうなずいて続

けた。

「実は、完成セレモニーの時に、巫女殿に女神の降臨をお願いして
いただきたくて」

「…………？」

「つまり、塔の頂上のあるに、女神においでいただけないかと思
つてゐるのです。もしかしたら、我々にも女神の声が聞こえるかも
しれない」

「ああ…………そつか。

今まで、ここの人たちは海中でいる女神マーナしか見た事がな
いのよね。で、愛海先生は海中ではしゃべらないから、声も聞いた
ことがない。

でも今度は、塔が海の上の空氣中につき出すことになる。空氣中
にいる愛海先生が何か言えば、塔の中にもそれが聞こえるかもしれ
ないんだ。なるほどなるほど。

「それじゃあ、女神さまに申し上げてみますね」

「ぜひお願ひします。……待ち遠しいですね？」

ナキさんは、ちょっと意味ありげな笑みを浮かべた。

えーと、つまり完成セレモニーと結婚式が同時だから、結婚式が
待ち遠しいでしょ、つていう冷やかしですか？

「ええ…………」

私はちよつと視線をそらして、はにかんで見せた。

それどころじゃないんだけどね！ ホントはね！

愛海先生は、もともと大きな田をさらりとまんまるく見開いて両手を口にあてた。そんなポーズも、相変わらずお美しい。

「ザンと、璃玖さんが、婚約つ！？」

「なんか、そんなことになっちゃって。すみません」

海の上。今日もさんさんと日差しが降り注ぎ、空は高く海は光り輝いている。

私はウミガメくんの背につかまつた状態で波に揺られながら、ちよつとうなだれていた。

「アリでしょ！」

思わずといった調子で言い放った愛海先生は、でもすぐにあわてて私の顔を覗き込む。

「あっ、でも、璃玖さんはもちろん嫌なのよねー？」

「嫌つていうか……そりやあ、ザンはすごく素敵なお人ですよ。通常の状態だったら、よろめいちゃいますよ私。通常だったらの話ですけど。残念ですねえ」

私はちょっと目をそらした。

外見で言えば好みとは違うタイプなんだけど、あんなイケメンに「大切にする」なんて言われて、よろめかない方が……無理でしょ。

すると愛海先生は、「ぐうーーー」とか言いながら両手をこぶしにすると、こう言った。

「あーーー、いつか現実で弟と璃玖さんが出会つたらいいなあ！ そしたら本当に恋に落ちて、結婚しちゃつかもしれないわよねー？」

「……はー？」

今、なんと？

「先生……あの、失礼ですけど、弟さんって亡くなつたんですね?
？」

「えー？ やだ、死んでないと思つわよ、たぶんー」

「たぶん、死んでない？」

「ちょ、待つて下さい。夜の海が、弟さんとの最後の思い出だつて
おつしゃつてましたよね？ それにザンは、弟さんが大人になつて
たらこんな感じだらうつていう、願望だつて」

愛海先生はウンウンとうなずいて、

「そうなのー。両親の離婚がきっかけで、子どものころに別々の家
に引き取られて以来、弟とは会つてないのよー」

な、な、な、なんすと !?

確かに先生、死んだとはハッキリ言つてないつ。だつてそんなこ
と普通ハッキリ言わないものだし。

私、勘違いしてたのか!!

「両親が離婚した頃、私はもう小学生だつたから『自分のことは自
分でできる』つてみなされたんだけど、弟は小さすぎて……」

先生はいつたん言葉を切つて、頭を伏せた。

「……とにかく、両親のどちらも弟を引き取らなかつたの。それで、
親戚の家を転々と……きっと辛い思いをしたと思つわ。だから私、
ラグーン城ではせめて、つて思つて……」

……ああ、それで、ショリさんとヤーハさんのキャラクターがで
きあがつたのか。

理想の養父、養母である一人。ザンが幸せであるよつ。

「ね、璃玖さん」

先生は微笑んで私を見た。

「もし、私の書いたこのファンタジーが出版されて、弟の田に触れたら、私のことに気がつくかもしないわよねー？ 子どものころに話したこと覚えてれば、だけどね？ そしたら連絡がくるかしらー？」

愛海先生はトロンとした瞳で、遠い水平線を眺めた。

「それだけが、私の心残り……なの……。あれ？」

先生は瞬きをして、私を見た。

「心残り……？」

「あ、ね、先生先生！」

私は背筋がぞくりとして、反射的に話しかけた。

「下の街の町長さんに、頼まれたことがあるんですよ。塔ができるがつたら」

ナキさんに頼まれたことを先生に伝えながら、私は自分の心臓がドクンドクンと脈打つを聞いていた。

今、先生、自分が死んでいることに気づきかけた？

物語が完結しないうちにそれを知つたら、どうなつてしまふんだろ？ そこで物語は中断するのかな？ その時、私は？

私がこちらに閉じ込められるのはともかく、せめて倉本主任が『こちらにいない』ってわかってる時じゃないと、彼がこちらに『残つて』しまいそうで怖い。

「わかったわ、『結婚式の時に』塔の上あたりに行けばいいのねー。璃玖さんが呼んでくれれば、いつでも行けるわよー！」

親指を立てる愛海先生は、いつも通りの笑顔に戻っている。

「『完成セレモニーの時に』、ですかね！ 結婚はどうにか回避したいんですけどばつ」

私は念を押した。倉本主任が読むことを意識して。
とにかく今は、私の思いつきを実行できるように、物語を持つて
行きたい。元の世界に戻れるかどうかは五分五分だけど……。

決戦は、『結婚式』の日。

9 心残り（後書き）

これにて第一章終了、次話から最終章です。
色々と予想して下さってる方（いらしたら嬉しい）にひとつでもハ
ラハラドキドキの展開にしたいな！ できるか！？

青い光に満ちたフイッシュ・ボウルの中を、私は落ち着かない気持ちでぶらぶらと歩いていた。

いつものように、真夜中にここに来たのに 倉本主任が、なかなか現れないのだ。

疲れて眠っちゃってるのかな？ だったらもうひとしおがないけど……でも、話したいことがあったのに。

ザンのモーテルである、愛海先生の弟さんが、生きているらしいこと。

そして、その弟さんとの再会が、先生の心残りであること。このラグーンの物語は、再会のきっかけになるようにとこつ希望が込められていること。

心残りが、先生をあんな風に酔っ払つてゐるよつた記憶があいまいなような状態にしているのなら、弟さんを探して会わせてあげたいと思う。そして探してあげられるのは、今は倉本主任しかいない。でも、二十年以上音信不通の弟さんが、簡単に見つかるとは思えないし……今は時間がないから無理か、やつぱり。

まずは私が現実世界に帰ることが先決だよね。やつしたら、私が弟さんを探すのに。

奥の段差に腰かけた私は、ぼんやりしていのつかに眉間にことを思い出した。

先生と会つた後でラグーン城に戻つてきたり、ちゅうじナキさん

が城を出てテラスから降つた。街に帰る。

ウリガメくんに頼んで、私はナキさんの近くに着地してもうひつた。

「お、巫女どの。お疲れさまでした」

「ナキさん、女神さまが、塔が完成したら来て下さるそいつですよ」
ウリガメくんから降りながら言つと、ナキさんは「良かった」とうなずいた。

「すみません、お帰りの所を引きとめて」

「いやいや、いらっしゃりお疲れの所をありがとびありがとうございました。ザン殿が、お戻りを待つておられましたよ」

軽く手で城の方を示されて、私はあいまじに笑つた。

「や、やつですか」

うーん、会つてまたラブ・ラブ・ウーブが來たりびつよつ。

私がちつとも急がずにグズグズしていると、ナキさんが言つた。

「あの……巫女どの。もしかして、巫女どのは、あまり結婚に乗り気ではないんですか……？」

「えつ、あー……」

な、何て答へよう。

「私は、女神さまによつてこの世界に連れてこられましたけど、やのづ……」

永住するつもりで来たんじゃないんですよ。

とも言えないし、嘘もつけずに言葉を濁してこると、ナキさんが軽く目を見開いた。

「もしや……いつか、女神の世界にお戻りになる?」

「…………かも?」

答える私が疑問形でどーす。

そ、そだ、昔話の『かぐや姫』っぽく答えておひづー。なんで

「これ、今まで思いつかなかつたんだろう！」

「いつか、女神さまの世界からお迎えが来るかも知れないと思つと

……」

遠い目をしてみせた。

お迎え、ある意味もつ来てるからね。倉本主任がね。

すると、ナキさんは微笑んだ。

「私はね、巫女どの、女神マーナが時おり海からこちらをじこ覧になつているのを見て、ずっと思つていたのです。マーナはもつと、こちらに近づこうとそれでいて、ちらに近づこうとそれでいて、」

そして続けた。

「そうしたら、あなたを遣わして下さつた。これからは、塔だつてあるではないですか。もしかしたら、一いつの世界が溶けあつ時が来てこるのかもりませんよ？」

一いつの世界が溶けあつ、か……。愛海先生がこの世界のために何かしたいと思つてるのは確かだけど、でも今の方針で大丈夫なのかな？

そんなことを考えながら、私はウミガメくんにもつ一度乗つてラグーン城に戻つた。

彼にご飯をあげようとフイッシュボウルに行くと、ザンが奥の長椅子で書類を読んでいた。

「リク、

こちらに気づいて微笑みかけてくれたので、

「ただいま」

とだけ答えて隅の壺の方へ行き、ウミガメくんにご飯をあげるのこ集中した。

でも、ザンが時々こちらに視線をやるものも気になつたし、ウミガメくんは海藻をくわえたらわざと行つてしまつたしで、間が持たない。

何か理由をつけて部屋に戻ろうとして振り返つたら、ザンが立ち上がつてこちらに近寄つて来るところだつた。

「リク……どうかした？ 今朝からなんだか……」

私がザンを避けているのに、さすがに気づかれたらしい。いつものように、長身を少しかがめて私の顔を覗き込んだ。

「ねえ……ザン」

私は下を向いて口元もつながら、さつきナキさんに向つたのと同じことを言つた。

「私は女神さまにここに連れてこられたけど……いつか、今度はお迎えが来るかもしれない。もしそうなつたら……」

私が元の世界に帰つてしまつたら、勝手だけザンには別の幸せを見つけてほしいと思つ。だから、その可能性はザンにも知つておいてほしい。

「うん……それは、僕も、考えた事があるよ」
はつ、と顔を上げると、ザンが私を見つめていた。

「初めて会つた時から、どこか他の場所に君の気持ちがあるのは、気づいてた」

お見通し、だつたのか……鋭いな。倉本主任みたい。

「それでも、結婚するの？」

私が尋ねると、ザンははつきりとうなずいた。

「将来そういうことがあるとしても、その日までは、君は僕のものだ」

強く抱き込まれた。ザンの胸に、私の吐息がこぼれる。私はそつと、彼の背中に手を回して抱きしめ返した。

私の知らない一年の間に、私の婚約者になつた人。きっと彼から、

「 私にプロポーズしたんだろう。」

「 その時、彼は何と言つてくれたんだろう。……もちろん、そんなことは聞かない。もう一度言わせるなんて、そんなこと絶対したくない。」

「 日を閉じて、私は言つた。

「 ……早く、結婚式の日が来るといいな」

「 こんな風に、何日も過ごすよつは。早くその日が来るといい。」

もし私が元の世界に帰れなかつたら……。

その時はきっと、私はずっと、この人のそばで暮らすだろつ。そう思つた。

2 瞳（前書き）

豆知識
？

「璃玖」

声がして、ハッと顔を上げる。

そう、私は今、真夜中のフィッシュボウルにいたんだった。
奥のカーテンの陰から、ザンが 倉本主任が、こちらに速足で近づいて来るところだった。

「悪い、遅くなつた」

「いえ。大丈夫ですか？ 今、いつの何時ですか？」

倉本主任、ちゃんと休めたんだろうか。

「日曜の昼だ。俺は大丈夫だから」

何か、しゃべり方が急いでるみたい。

「あのー、弟さんのこと……」

「うん、読んだ。死んだわけじゃなかつたんだな」

「す、すみません、私の早とちりで！」

ひー、また怒られるつ。私が肩をすくめると、彼は柔らかな口調で言った。

「いや、まああの言い方じゃ、そういうよ僕も」

今、倉本主任、自分のこと『僕』って言った。

私は唇を噛んだ。

そんな私に、彼はまたいつもの口調に戻つて続けた。

「それより俺、もしかしたらその人のこと、わかるかも」

「えつ！？ 弟さん！？」

私は仰天した。

あつ、そうか、倉本主任は少なくとも私より、愛海先生との関わりが深い。何かヒントになるよつたことに思い当たつたのかも！

「そ、そしたら愛海先生の心残りがなくなるかもしれないですよね！」

「それで璃玖が、解放される可能性もあると思うんだ。先生は、璃玖をこの世界に引き込んだり解放したりつていうのは自分ではコントロールできないみたいだけど、閉じ込めっぱなしってことは望んでないと思う。お前のこと気に入ってるんだし……弟の嫁に望む程度にはな？」

「うひ。昼間の先生との会話、読んだんですね。

「ちょっと俺、調べてみるわ。少し会社を離れたりするかもしねない。原稿は持つて行くけど、移動中は読めないかも」

「コピー用紙の束を持つてくの？」

「なっ、なくさないで下さいよ」

「小説がバラバラにでもなつたら、私どうなるんだろうとか考えるよね。私もバラバラ？ みたいなスプラッタなことを考えてしまつわけだ。

「大丈夫。今、ツカに文字が移つてるから。コピー用紙の代わりに置いてみたら、そつちに文字が現れてるんだ」

「ああ、ツカ……それならバラバラにはならないかな。

「ツカというのは、^{つか}束見本のこと。これから出す予定の本とまったく同じ紙・サイズで作る、でも中身や表紙は真っ白な本のことだ。セットものや全集ものを出す時に事前に作つて、化粧箱を作る時にサイズの参考にするとか、カバーだけ巻いて宣伝に使うとか、そういう用途の見本。

もちろん、本が実際に完成してしまえば束見本は不要になるので、私なんかはよくもらつて帰つて甥っ子のラクガキ帳に進呈してくるんだけど、愛海先生のこの物語は今、その真っ白な本に浮かび上がっているらしい。

突然、倉本主任が両手で私の頬を挟んだ。

「しつかりしるよ。何度も言つけど、お前は戻るんだからな、こ
っちに」

一瞬、呼吸が止まつたけど、私はいつものように笑つた。

「もちろんです」

この、倉本主任の黒い瞳を、また見られるかな。

すると、彼も私の瞳を見つめ、その姿勢のまま言つた。

「こんな、自分の身体じゃないような感覚じゃなくて、直接お前の
瞳を見たい。名前の通りの、璃玖の瞳を」
えつ。そ、それって……。

「くらッショウ、私の名前の意味、知つてるんですか？」

思わずあだ名の方を口走つてしまつた。

「気になる女が、変わつた名前してたら、意味くらい調べる」
何だかむすつとした顔をして言つと、彼は早口で続けた。

「明日の夜は会えるかわからないけど、何か分かつたらなるべく早く
知らせられるようにするから。勝手なことしないで、僕を待つて
て。じゃあ、行つて来る」

私の頬を親指でちよつと撫でてから手を離すと、倉本主任はまた
速足で去つていつてしまつた。長身がカーテンの陰に消える。

「い、今、なんて言つた？ 気になる女？ 私が？」

私の名前は、『璃』が宝石とか水晶、『玖』は美しい黒い石のことだ。母が、生まれたばかりの私の瞳を見て、この子どもの無垢な瞳が大人になつても澄んでいるように、とつけてくれた名前。

く、くらッショウつてば、私の瞳が名前の通りだつて……。

「ああ、こっちが恥ずかしくなります！」

巻きスカートの前の部分をぎゅーっとつかんで悶えつつ、私は複雑な気分でいた。

倉本主任、少しこの世界から離れるんだ。それなら、ザンとの融合も進まないかも。それはホツとする出来事だ。
でも……早く帰ってきて欲しい。矛盾した気持ち。

僕を待つてろ、か。また『僕』つて。

急がないと。もう時間がない。

私は首を横に振つて色んなものを振り切ると、自分も足早にフィッシュユボウルを後にした。

翌日は、朝からズーイさんにつかまつた。

「花嫁衣装ができあがつてきましたよ！ 少し直しますから、着てみて下さい！」

ぎやあああ。そうか、すっかり失念してたけど、この一年の間に結婚式の準備が進んでるのね。

ズーイさんとお針子さんらしき女性に着せつけられた花嫁衣装は、女神マーナの服装に似ているインドのサリー風のものだった。色も同じ白。光る糸で貝殻のような模様が織り込んであって、とてもとても、綺麗だつた。

ズーイさんは、衣装を着た私を褒めちぎつてくれたけど、私は申し訳ないような気持ちでいっぱいだつた。

「どうなさいたんですか、リク……どこか苦しいですか？」

ウエストのあたりをチェックしてくれる、優しいズーイさん。この世界の人は、みんな優しい。

私は笑顔を作つて、お礼を言った。

「ズーアさん、色々とありがとうございました」

彼女は、ちょっと不思議そうな顔をしていた。

3 真夜中の彼

ほとんど衣装合わせだけで午前中が過ぎ、午後になつてから私はザンに会いに行つた。彼は今日もフィッシュボウルにいた。

「こんにちは、ザン」

ザンはこちからを見て、優しい微笑みを浮かべた。

「リク」

そばに行くと、彼は黙つて私の腰に手を回した。軽く引き寄せて、そのままじっとしている。

ザン、ちょっと元気がない。

そんなの当たり前か……彼だって複雑な気持ちでいるんだ。私が女神の世界に帰つてしまつかもしれないと思いつつ、私と結婚しようとしている。

やがて、彼は私の身体を離すと言つた。

「さつき、ナキから連絡があつたんだ。今日で、ひとまず塔の工事が終わるって」

「え、完成？」

「いや、海の上に出る一歩手前だつて。その部分は、セレモニーの時にみんなの目の前で完成させて、みんなで海の上の世界を見ようつて」

「そう……」

ついに、あの塔もできあがるんだね。

「最終確認や資材の片付けに数日あれば、後は……」
ザンが口をつぐむ。

私は先を引き取つた。

「じゃ、五日後くらい? 一週間後くらいかな? 結婚式

「……ねえ、リク」

「何?」

「いや

何か言おうとしたザンは、黙つてもう一度私を抱き寄せると、私の髪に頬を寄せた。

ザンと別れた後、私はもう一度ウミガメくんを探して背中にに乗せてもらつと、海の上に行つた。

「愛海先生」

きらめく太陽の下、波に揺られながら呼ぶと、女神マーナの白い姿がまばゆく光りながら現れる。

「はーい、璃玖さん」

「ここにちは。あと数日で、塔の完成セレモニーだそうですよ」

「ホント! 楽しみだわー。あのう……結婚式もー?」

先生……両手の人差し指をつんづん突き合わせてもじもじポーズつて、美人だからって何でも許されるとでも……とでも……許されるよねーもちろん! くはあ、下を向いて上田遣いつてたまらん!

「今の所、やる方向ですよ」

悶えてる場合じやない。私は表面上は冷静に、先生に伝えた。

ある意味、その日が来れば何らかの決着がつくんだと思つと、早くその日が来てほしいんだ、私は。

「ねえ先生、弟さんのことなんですけど。もつ本当にずーっと、連絡が取れてないってことなんですか?」

私が聞いてみると、先生はしょんぼりした様子でうなずいた。

「そうなのー。私が高校生の時に母が亡くなつたから、その時に弟の引き取られた先を転々と探して行つて、連絡を取ろうとしたのよ。でもことごとく親戚に邪魔されてー。……きっと、弟の分の遺

「産が田当てだつたのねー」

「う、うわあ。先生、実はかなり波乱万丈の人生をくぐりぬけていらした?」

「あ、じゃあ、ラグーン城の中にあるお社つて……」

「そう、母のためのものよー」

「そうだったのか。一度は、死んだ私を祀つたものかと思つちゃつたのよね。」

その日の真夜中も、私はフィッシュボウルに行つてみた。

でも、倉本主任の言つた通り、彼は来ていなかつた。弟さんのことを調べるのに、時間がかかるんだね。」

がらんとしたその場所で、しばらく待つてみたけど、何も変化がない。私はため息をひとつついて、自分の部屋に戻ろうとした。

「リク」

後ろから、声がした。

振り向くと、青い空間に、ザンの姿があつた。こちらへ近づいて来る。

「あ、ど、どうでしたか……」

「言つかけて、私ははつと口をつぐんだ。この歩き方、表情……。」

倉本主任じゃない。ザンの方だ。

「どう、どうでしたかじやなかつた、どうしたの、ザン……こんな

夜中に」

「まかし方はこの際しょ「つがない。だいたい「こんな夜中にどうしたの」って、私の方がどうした、だよね、こんな場所で。

「リク」

青と緑の混じった瞳のザンは、もう一度私の名前を呼ぶと、ここにいる理由を聞くこともなく、私の右手を取った。

とても、静かな表情だった。

「……外に出ない？ 塔を、見に行こう」

テラスから降り、砂地にふわりと着地する。

ザンは、抱き上げていた私をそつと降ろして、また手をつないで歩きだした。私は黙つて、彼の後について行く。

人気のない街の中、ポツンポツンとわずかに点る灯籠が、ドーム状の家々を照らす。時々、小さな魚の群れがわきをすり抜けて行く。街を抜けると、後は海上からのわずかな光に頼つて進んだ。途中でちょっと振り向くと、黒々とした海藻の森の間に、街の明かりが星のように光っていた。

イ・ハイ山の山道は、工事の人人が何度も通ったのかとても歩きやすくて、山頂の塔まではあつという間だつた。

白いねじれキャンディのような塔の入口は、ドアもなくアーチが曲線を描いている。

中に入ると、そこは学校の教室二つ分くらいの広さの、円形のホールになつていた。ホールの中央に、私よりも大きな巻貝が一つ鎮座していて、貝殻を透かして明かりが点つている。

見上げると、塔の内側には螺旋階段がぐるぐると貼りついていて、最上階まで中央は吹き抜けになつている。天辺には、白い天井が見えていた。

ザンは私を見て、ちょっと微笑みかけると、手を引いて螺旋階段を上りだした。

長い螺旋階段もそれなりに大変だつたけど、ウミガメくんに乗つ

て呼吸を止めたまま海の上まで行くよりは楽で、多少息切れはしたもののが塔の最上階に着いた。

「ここには床があつて、仮に作られたのか天井はガラス張りになつてゐる。水面に近いため、水を透かして入ってきた陽光が、部屋を明るく照らしていた。

壁には縦長の窓がいくつもあつて、海をカラフルな魚が泳いでいるのが見える。

「まだ、この上に作るんだけどね……今のところは、ここが最上階」ザンがやつと口を開いた。

並んで天井を眺めていると、ザンの左手が私の右手を、ぎゅっと握つた。

彼を見ると、彼もこちらを向く。

「リク。今夜、二人だけで結婚式をしない？」

4 一入きりの結婚式

ドクン、と心臓が大きく一つ鳴って、頭の中と胸の中が熱くなつた。

「……どうして？ 結婚式、みんなの前で、するんじゃないの？」私はそう聞いた。早く決着がつくことを望んでいたけど、急な展開にひるんでしまう。

「うん、みんなの前でもするけど。一入きりでもやりたいんだ」ザンは静かな声で言つた。そして、また天井を見上げる。

「女神マーナの、見届けの元で」

はつとして顔を上げると、愛海先生の真っ白な姿が、塔の周りをゆっくりと回つていった。白い泡と、長い尾を引いた愛海先生は、窓から私たちを見て不思議そうな顔をしてくる。

「だめかな？」

そう尋ねてくるザンと、海の中の愛海先生は、じつやつて見比べると本当に似ていた。

性格も少し似ている気がするな……乙女などじぶがある点とか。一人きりで結婚式、だなんて。

「……いいよ」

私はうなずいた。

今、倉本主任がこけらの世界にいなら、じょひどい。物語を、終わらせよ。

水面の波模様が、部屋の壁や床に映つて揺れている。ザンや、私の身体にも映つて、揺れている。

まるで自分たちが水に溶けているような、不思議な浮遊感がある。

「私、こちらの結婚式がどんな風なのか知らないの。教えて？」

私が尋ねると、ザンは微笑んだ。

「特に決まった形式はないよ。女神の名の元に、自分が誓いたいことを述べるんだ」

そして、彼は私を見つめると、きつとすっと考えていたのであるう言葉を、口にした。

「僕は、たとえ別の世界に生まれたもの同士でも、いつどこにいても……リクを愛することを誓つます」

それを聞いたら、私は声が出なくなってしまった。
もしかしたら、私の知らないプロポーズの言葉は、これだつたのかもしれない。そう思つと、この世界に来て初めて、涙がこぼれた。ザンは、たぶん私の言葉を少し待つていたのだろうけれど、やがて私の額に自分の額を当てるせをやいた。

「それから、誓いのキス……」

涙に曇る瞳をまばたきでクリアにして、私はザンの海の色の瞳の中に、倉本主任の色を探した。

ザンが言った。

「彼なら、今はいないよ。僕だけを見て、リク」

私はハッとしたけれど、思わずちょっと微笑んでしまった。
さすがだね。気づいてたんだ、もう一人の自分に。
いつから？　どのくらい知ってるの？

でも、聞く必要はなかった。もう一重人格もおしまいだから。
物語のヒーローとヒロインは、結婚式を挙げる。誓いのキスをして　エンドマーク。

「これで、『めでたしめでたし』だね……」

私はつぶやくと、ザンの顔を見上げて口を閉じた。ザンの両手が、私の頬を包むのがわかる。

吐息が、唇にふわりとかかって……。

ぐに。

「また説教されたいようだな？」

「い、いひやいいひやいいひやい！」

頬の肉を思い切り左右に引っ張られて、私はまた涙目になってしまった。まばたきをすると、ザンの瞳が黒く染まっているのが見える。

倉本主任！

「ひどいっ、結婚式の誓いのキスでこれって、軽くトラウマですよ。あつほり、愛海先生ボーグ

「うるさい。何が『めでたし』だ、それで物語を終わらせようとして考

えてたのか。また一人で勝手に突っ走りやがって」

頬を押さえる私の前で、ザン 倉本主任は仁王立ちで腕を組んでいる。

「だつて、早くしないと倉本主任まで元の世界に戻れなくなると思つて……それにこうやってお話を終わらせれば、私だつてもしかしたら帰れるかもしれないし？」

ぼそぼそと言い訳をすると、倉本主任は強い力で私の腕をつかんだ。

「俺のためを思ってくれるなら、ギリギリまで俺を信じて待ってくれ。もし失敗に終わってたら、お前を失うところだ。冗談じゃない」「でもつ

「とにかく！ 俺は戻つて來たんだから手短に話を進めるぞ

倉本主任は強引に話の主導権を奪い取ると、いついつついた。

「いいな、ザン」

そのとたん、彼の瞳にまた、海の色が満ちた。

「ごめん、リク」「

「ザン！？」

「タ力のいない間に、君と一人の時間を少しでも持ちたかったんだけど……まさか、君が結婚式で物語を終わらせようとしてるとは思つてなかつたんだ」

「ザンなの？ 主任、ザンとお互いに『話』をしてたんですか！？」

私が混乱していると、彼の瞳は再び黒く光つた。

「ややこしいから俺が説明する。昨日の『夜』に、俺は全部ザンにぶちまけたんだ」

倉本主任が衝撃の事実を述べる。

そ、それで昨日の『夜』は、なかなかフイッシュ・ボウルに現れなかつたの？

「だからザンは知つてる。ここが物語の世界であること、俺と璃玖は物語の外から来た存在であること。そして……」

彼は一度言葉を切ると、あたりをぐるりと見まわした。窓の外で、愛海先生が首をかしげながら浮かんでいるのを見る。

「……巫女が女神と話をするのが目的なんだから、この塔つてどこかが外とつながるはずだよな？ え、伝声管もあるのか？ どこ？」「ぶつぶつ言つてるのは、ザンと会話してるんだろうか。変な感じ。」

螺旋階段の近くの窓に、貝殻の模様のステンドグラスみたいになつた部分があつた。倉本主任はそこに近寄ると、愛海先生に向かつて手招きをした。

先生が顔に疑問符をいっぱい浮かべながら、すいと近寄つて来る。彼はステンドグラスに向かつて語りかけた。

「先生、聞こえますか」

先生はうなずいている。あの模様の部分を通すと、声が聞こえるの……？

「俺です、倉本です」

窓の向こうで、先生が頬に両手を当てて口を開けるのが見えた。「えーっ！？」って叫ぶのが聞こえそう。うん、そりや、驚きますよね。

「先生、弟さんのことを『ヨウちゃん』って呼んでたのに、弟さんをモデルにした神官に『サン』と名前をつけたのはなぜか、覚えてますか？」

先生は首をかしげている。な、なんとなくつけたんじゃないのか？「覚えてないか。親戚がよつてたかって、情報を隠蔽してたみたいだからな……」

彼はつぶやくと、もひ一度声を大きくして、いつ言った。

「弟さんの名前。『ヨウサン』って言つんじゃないですか」
女神が、ハツと田を見開くのが見えた。

急に、天井の向こうの水面が暗くなつた。

波が大きくうねり、塔がゆらゆらと揺れる。彼がこちらへ手を伸ばし、私は彼の胸に飛び込むよつにしてつかまつた。
やがて揺れがおさまってきて、あたりを見回した私は息を呑んだ。ガラス越しに、澄んだ満月が見える。

海の上に、本物の、夜が来ていた。

5 女神の覚醒

塔の天井のガラス張り部分は、およそ直径一メートルといつところだろうか。この上にさらに建て増しする時のために、取り外しができるようになっていた。

私とザン、そしてザンの中の倉本主任は、協力してガラスを外した。そして、脇に立てかけてあつた梯子を使って、ぽつかり空いた天井から頭を出した。

塔は今、緩やかな波の上に最上階の部分を表して、月光に照らされて白く光っている。本当の夜が来て月が現れ、潮が引いたらしい。明るい満月から視線をめぐらせれば、空には満天の星。天の川が空を流れる。

そして、海の向こうには黒い影が、光の粒をたくさんちりばめて横たわっていた。

陸地だ。人の住む灯りが点っている。

物語の世界と、現実が、つながっている……？

愛海先生は、塔の上に腰かけていた。
『女神マーナ』の白い姿ではなくて、綺麗な長い黒髪の、『愛海先生』の姿だ。

あの日　会社に訪ねて来て、私に原稿の入った封筒を託した時と同じ、シフォンのチュニックを着ている。

「璃玖さん。それに……ザンと、倉本さん」

二口りと微笑んだ愛海先生は、しゃべり方がしつかりしている。ついに酔いがさめたらしい。

先生の隣にザン（倉本主任）が座り、その隣に私が座った。天井から塔の中に足を降ろしているので、足だけがあの空気と水の中間みたいなものに浸かっていて、変な感じだ。

「思い出したんですか」

倉本主任が尋ねると、先生はうなずく。

「ええ。そのう……私の身に起きた事も、ね。ごめんなさい、璃玖さん、ずっと隠してくれたのね」

私は首を横に振った。

「私はただ、どうすればいいのかわからなかつただけです。本当に、女神さまの言葉をラグーン城に伝えるだけしかできない巫女で……」

「ううん、そうじゃない」

愛海先生は微笑んだ。

「璃玖さんは、女神とラグーン城の人々の橋渡しをする巫女なのと同時に、現実と物語の橋渡しをする巫女だつたんだわ。あなたが来なかつたら、私はずっとここで、現実感のない物語の中を揺れているだけの女神だつた」

現実感のない物語……。

先生は、ザンに向き直る。

「……そう、弟の名前、どうして倉本さんが知つてゐるの？」

黒い瞳の倉本主任が答える。

「変だとは思つてたんです。俺、この塔ができる前からどんな塔になるのか知つてたし、それに『ヨウちゃん』って呼び方に聞き覚えがあつて」

彼は肩をすくめて苦笑した。

そう、塔ができる前から倉本主任は『白い塔』つて、色を知つていた。それはつまり、ザンと人格が混ざつたためだと思つていた

けど、違うの？ それに、呼び方にも聞き覚えが？

「俺の名前の『鷹』は、本当は『タカ』って読むんじゃない。よく間違われるんで、面倒だからそういうことにしてただけで、本当は『ミウ』と読みます」

彼は一度言葉を切ると、一いつ瞬つた。

「先生の弟は、俺です」

私と先生は、ポカンと口を開けた。

「はあ？」

「はあ？ ジゃないよ。えーと、先生の覚えている弟『ミウちゃん』は、本当は『鷹山』と書いて『ミウザン』っていう名前だったんだ。歴史上の人物から取つたんだな」

倉本主任は、手のひらの上に指で漢字で書いて見せた。

「俺は、離婚した両親には引き取られず、親戚の間を点々として『ちやじや』してる間に改名させられ、一文字だけ残して『ミウ』になつた。俺も小さかつたから、元々そういう名前だったと思い込んでいた。でも、先生はたぶん本来の名前を何となく覚えていたんだな。消えた『ザン』の部分を、弟をモデルにしたキャラクターに名付けた」

「本当で、ミウちゃんなの？ 倉本さんが？」

「すみません、未だにほんやりとしか思い出せないんですけどね……」

倉本主任は肩をすくめて言った。

「でも、夜の海のことば、なんとなく。誰かと手をつけないで行った覚えがあつま」

「だから、倉本主任はこれから、ザンとだけ接触できなんですか？ ザンの台詞を操作したり、ザンの瞳でこの世界を見たり……」

私が目を見開いたまま言うと、倉本主任はうなずいた。

「そう。元々、俺とザンは同一人物だからだったんだ。……心配かけたな」

やつと腑に落ちて、私は大きくため息をついた。緊張がほぐれる。「私、弟さんを探し出すの、絶対間に合わないとthoughtました」と、彼はニヤッと笑った。

「先生の過去をたどって行つて弟を探しだすのは大変だろ?けど、俺が自分の過去を調べるならまあ何とかな」

そして、少し表情を陰らせる。

「……先生が生きている間に、気づけたらよかつたんだけだな」

愛海先生はくしゃりと顔をゆがめ、それでも口元に微笑みを浮かべた。

「ううん、嬉しい。私が話したこの物語のことを、覚えていてくれたんだものね。塔のことも……」

先生はちょっと口元に手をやると、顔を上げて、今度はさつきより大きな笑顔になった。

「ふふ、私のイメージと全然違つた風に大人になつたのね! まさかあんな『ワモテ』になつてるなんて。あの可愛かつたヨウちゃんが」

私はちらりと彼の顔を見た。ここにいる彼は『ザン』の姿だから、とっても綺麗な顔をしてるんだけど、倉本主任の顔は……ね。ふふ。

「子どもの顔なんて、どんどん変わりますよ」

「そりやあそうよね。私の顔は? 覚えてなかつたの?」

「女人の顔なんて、もつと変わるじゃないですか」

「それもそつか。……でも良かつた、立派に編集者をやつてるつてわかつて」

「複雑な少年時代を過ごしましたけど、一応、人の道を逸れずに大

人になりました」

真面目くさつて倉本主任が言つと、先生は声を上げて笑つた。

そして、陸地を指した。

「見て、現実とラグーンの世界がつながつたわ。やつと璃玖さんを返してあげられる」

「……先生は……？」

私が思わず尋ねると、先生は私を優しい瞳で見つめた。

そして、ゆっくりと立ち上がりて空を見上げる。

「そうね。もう私はこの世のものでは……」

その時、座っていた私はいきなり誰かに、足をつかまれた。

「わ……」

「璃玖！？」

身体が滑り、私は再びあの空気もどきの中に没して、床に落ちた。

5 女神の覚醒（後書き）

残り一話の予定です。

6 物語の結末

ナキさんだつた。

塔の中に落ちた私を立たせて、羽交い絞めにしたナキさんは、天井の上にいる先生たちを見上げながら、少し後ろに下がつた。

「あなたが、女神……マーナ」

ナキさんは、行動とはつらはらに落ち着いた声で言つた。

「話は聞かせていただきました。巫女は、元の世界に戻るのですね。でも、マーナには残つていただかないと。あなたの力が必要です」

そして、さらに一步下がつた。

「こちらに、降りて来ていただけますか。そうしたら、巫女を解放します」

「ナキ、さん」

私は、ただ驚いて呆然としていた。恐怖感が全くないのが、自分でも不思議だつた。

どうして、と聞こうとした私の視界で、愛海先生がすいつと立ち上がつた。

そのまま、すいつと梯子を下りてくる。今は人間の姿だから、こちらの世界にも普通に入つて来れるんだ……とどうでもいいことを考える。

ザンは梯子を使わず、一気に飛び降りた。

愛海先生は私たちと向かい合つて立ち止まり、いつものよひに

ツコリと笑つた。

「私はもうこの世のものではないから、成仏しなきやーと思つてたけど、やめた。私、残るわよ。この世界で暮らすわ」

「は？」

ナキさんがひるんで、腕の拘束が緩む。何か武器のようなものを持つてゐるのかと思ったけど、全然そんなことはなかつた。

単に、どこかに行つてしまいそうだった女神をどうせに引きとめる方法が、他になかつただけみたい。

私がおそるおそるナキさんから離れると、ザンが近づいてき私を引き寄せる。

見上げたら、その瞳は一瞬海の色になつて、また黒に戻つた。二人とも、様子を見ているみたい。

その“彼”的瞳が、一人分の心配を浮かべて「大丈夫か」と問いかけていたので、私はうなずいてみせた。

愛海先生は、はきはきとナキさんに告げた。

「でも、あなたがもし女神の力を当てにしてるなら、それは無理。あなたはひょっとして、女神の力を利用して、海の上の世界から何か自分の利益になるようなものを得ようとしたのかしら?」

「う、とナキさんが絶句する。

え、そつだつたの!？ それであんなに、塔の建設に熱心だつたのか……。

先生は続けた。

「海の上の、私の世界は、素敵なものだけで満ち溢れているわけじゃないの。期待させたなら『めんなさいね』でも、女神の力なんて必要ないのよ」

先生は、“彼”を振り返つた。

「ラグーンの世界で弟を幸せにしようとしたけど、ザンはどこか寂しい気持ちを抱えて大人になつたみたい……でも、現実の弟は、厳しい世界でもちゃんと立派に大人になつたのね」

“彼”的手を、きゅっと握る。

「私、ちゃんと覚えておくわ。物語の後ろには現実があるってこと

を。そうしたら、物語はもつと面白くなるわね、きっと

私は何だか、さつきまでの白い姿の女神よりも、今の先生の方が
神々しく見えるよくな気がした。

先生は、本当の意味で、この物語の女神になつたのかもしれない。

“彼” 倉本主任は、先生の手を握り返して言った。

「俺も、忘れません。俺をずっと心配し続けてくれていた、あなた
のことを。……姉さん」

先生は、今までで一番、綺麗な笑顔を見せた。

次に先生は、私の手を取つて言った。

「璃玖さんは、ずっと私を見守つてくれたわね。質問された覚えは
あるけど、一度も私を否定しなかつた。女神にとつては、最高の巫
女さんね」

私は首を横に振つた。

「編集者としては、力を発揮できなかつた気がします……」

「この世界を編集します、なんて。はは、おこがましいつたら。

「ふふ、でもきっと将来は素晴らしい編集者になつてね！」

先生が笑うので、私も……笑つた。

ああ、お別れなんだ。

先生は、手を離してナキさんの方へ下がつた。そして、呆然とし
ているナキさんの肩を、元気よくぽーんと叩いた。

「私もこの世界を良くするように頑張るから、よろしくね！」

私は思わず笑いそうになつた。女神様に肩を叩かれて、ビックリ
だろうなあナキさん。

「リク」

その口調に、ハツとして振り返る。

ザンが、私に話しかけていた。

「半人前な僕と、結婚しようとしてくれてありがとう。振り回して、ごめん。……でも、君を迎えて来たのが『ヨウ』で嬉しいよ。僕は彼の中にも存在するから」

「そう、なの？」

「マーナが……姉が弟を心配する気持ちそのものが、僕だ。その気持ちが『ヨウ』に届いたんだから、『ヨウ』がそれを忘れない限り、僕は存在する」

ザンの親指が、私の頬をそっとぬぐって、私は自分が涙をこぼしていることに気づいた。

「じゃあ、また、会えるんだよね？」

私が尋ねると、ザンは微笑んでうなずいた。

「会えるよ。いつでも」

私は、自分が以前考えた事を思い出した。

世界は、循環している。空も陸も海も、つながっている。そしてきっと、物語と現実も切り離せない。現実から生まれた気持ちを物語の中に見つけて、物語から感じたことを現実の自分に響かせて。

ラグーンの世界で弟を守りうとしてきた愛海先生自身、辛い夜から田を背けていたけれど、ふと夜空を見上げればそこには月が輝いていて。

これからは、マーナもザンも物語の住民たちも、ラグーンだけではなく、この循環する世界の中で生きて行くんだ。

月光が強くなつたような気がして、ハツと見まわしたら、塔の中が光で満ち溢れつゝあるところだった。

倉本主任　それともザン？　の手が、私を抱き寄せる。
光の向こうから、先生の声が響いた。

「ありがとう、ヨウちゃん、璃玖さん……私と一緒にこの世界を作ってくれて。『めでたしめでたし』で世界は完成して、あなたたちがここを覚えてしてくれる限り続いて行くの」

彼の手が、私の頬に触れた。

私は瞳を閉じた。

唇が、重なつた。

HΠローグ

「……。璃玖！」

「はいっ！」

ガバッと起きあがると、おでこが何かにガツンとぶつかった。
「ぐほっ！」

「あだつ！……つえ！？ 倉本主任！？」

目の前にいるのは、顎を押されて涙目になっている倉本主任。う
わ、無精ヒゲぼーぼー。

会社だった。

ちつとも砂だらけになんかなつていない、いつもの書籍部の部屋。
ブラインドの隙間から明るい朝の光が差し込み、床に縞模様を作
つていて。私はその床の上に座りこんでいた。

「戻った……！」

私は自分の身体を眺めまわした。服装も、あのピタ一と巻きスカ
ートの格好から、シャツとスカートに戻っている。そばには社内用
のミコールが転がっている。

ハツとして、私は倉本主任の胸倉をつかんで引っ張り寄せた。

「うおっ、何だっ！」

あわてる彼の瞳をのぞきこむ。

黒い瞳……。

「ザン、は？」

「いるよ。もう、俺の一部だ」

主任は静かに呟つ。そうだけど……。

「あつ、お話は！？」

急いで見まわすと、床の上に真っ白な表紙の本が落ちていた。手を伸ばして、そつと本を手に取る。そのとたん、本はさらりと崩れて、砂になつてこぼれ落ちた。

「あ……」

がつくづして肩を落としていると、倉本主任の手がそつと髪を撫でた。

「先生、言つてたじやないか。俺とお前が覚えていれば、世界は続くなつて」

「ん……」

顔を上げる。一瞬、彼の瞳が他の色に反射したような気がした。髪を撫でる手に、懐かしいような切ないような、不思議な感覚がした。

至近距離で見つめ合つ。

「倉本主任……」

「璃玖」

「歴史上の人物のヨウザンつて、誰ですか」

がくつ、と倉本主任の頭が落ちる。

「おま、山形の誇り、うえいきよつせん上杉鷹山公を知らんのか」

「ご、ごめんなさい知りません世界史選択だつたし

「あ、そ、今度ゆつくり説明してやる……」

倉本主任の声がだんだんスローになつて、頭が傾いた。そのまま前のめりになつて……。

頭が、私の膝の上に落ちた。

「わ、ちょ、くらっしゅーーー！」

「もつダメ……寝かせて……結局この二日、ほとんど寝てない……」

「今つていつーーー？」

「…………月曜の…………あた…………？」

次に聞こえたのは、深い寝息だつた。

「寝ちゃつた…………」

私の膝枕で眠る、倉本主任のコワモテの顔。

今までマジマジと見たことなんてなかつたけど、確かに口元にちよつとだけ、愛海先生の ザンの面影があつた。

「…………ありがとう」

私はそつと、倉本主任のあいのあたりの無精ヒゲを、指先でなでた。

私がラグーン城で、ザンを表面しか見ないようにしていたように、今までは上司としてしか見た事のなかつた、倉本主任。

私を助けに飛び込んできてくれた彼を、もっと知りたいな、と思つた。

床の上の小さな砂の山を眺め、私はラグーン城に思いをはせた。何か、名前をつけてあげたいな、と思う。もう私と倉本主任の心の中にしか残つていらない、この物語に。

弟思いの少女のイメージネーションの海に生まれた、珊瑚のお城の物語に……。

あれ？ さつき、今日は月曜だつて言つた？
ぐるっと壁掛け時計を振り向くと、時刻は八時過ぎ。

やばこよ、もつむなつとしたら、ほかの社員さんが出勤してくれる
んじゅー！？ その時こんな姿を見られたらい！

今これらながら、キスした人を膝枕してこむといつの状況に動搖
した私は、熱くなる頬に気づかないふりをしながら倉本主任を揺さ
ぶった。

「倉本主任！ リリージャまきこですって、応接室のソファで寝てく
ださいよ。ねえ、くらつシロー タカさん！ ジャなかつた、ミウ
ちやんつじょー！」

【イマジネーション・ラグーン 壱】

H&Rローグ（後書き）

読んでいただきいて、ありがとうございました！

あとがき

7月1日から2ヶ月半ちょっとで渡つてお付き合いでいただきました、『イメージネーション・ラグーン』、完結いたしました。読んでいただけで、本当にありがとうございました。

よ、良かつたよ、9月中に終わって……！　暑いうちに終わらせたかつたんです。

前作が「トリップ 森の中」、だったので、今回は「トリップ 海」にしてみよう、夏だし！　という（それと、前作は元の世界に戻れない話だったので今度は戻れる話にしようという）単純な発想から始まつたこの物語。今回は完璧に王道から外れていたと思うのですが、いかがでしたでしょうか。

振り返つてみれば反省点もいっぱいの物語で、本当にまあ、出版関係の豆知識は必要だったのか、とか。

リュウつて何のために出て来たの、役割つて田撃者としてだけ？　とか。

見切り発車でスタートして、第一章が終わるあたりまでラストが見えてなかつたんですね。というか、エピローグはだいたいこうと決めてたけど、そこにたどり着く道筋は全く見えてなかつた。その割に、伏線も回収して物語が収束したのでヨシとしましょう！　…して下さいお願いします（m—m）　見切りのくせに伏線を張るから首を絞めるんですね……最終章はハラハラしながら書きました。

こんなことを考えながら書いていました、といつのを、箇条書きにしてみます。

璃玖の名前について。「りく」とこの名前、今までこそ男の子の名前に多いようですが、昔は女性名としてよく使われたようですね。大石内蔵助の奥さんが「理玖」さんだそう。少しレトロな名前が好きな遊森でした。『乳母さま』も『金フュス』もレトロだもんな。

璃玖と愛海の服装について。璃玖が本文中で言っている通り、インドっぽい雰囲気です。愛海はサリーを身につけていますが、璃玖はサリーのインナーとして着るものだけを着ています。昔のインドのお姫さまが着ていたという「チャーリー（チャリ）」をイメージ。

ホタテベッジについて。ボッティチエリの名画『ヴィーナスの誕生』参照。

愛海が白い蛇になつてることについて。色々調べていたら、心理学において蛇や竜は母性を象徴する、って記述を見かけたので、この世界の母（創造主）である愛海には白いかな～と思つて白蛇にしてみました。簡単な説明終わり（＾＾；）

キャラクターの年齢について。ちゃんと書いてなくて申し訳なかつたのですが、璃玖26才・倉本30歳・愛海33歳です。

「くらシショ」という呼び名について。私がかつて勤めてた会社ではこんな風に呼んでたんですけど、他の会社はどうなんだろう？
「クシュ、クシュ、お元気ですか（＾＾）

ラグーン世界のドーム状の建物について。海流の影響を少なくできるよう、円形になりました。

ちょっと心配なことについて。「写真を裏焼きにする」という

スが、今でも起じつひるハスなのかどうか……。

上杉鷹山公について。江戸時代の名君。米沢藩を財政危機から救い、発展の基礎を築いた人物。「鷹」の字が「ヨウ」って読むことに途中で気付いた人、手え上げてー！

ご意見ご感想、誤字脱字など、ぜひお寄せください。
この物語を見つけて読んで下さって、本当にありがとうございます。
た。

いつたん完結設定にさせていただきますが、番外編も、書きたいな
だって、璃玖と鷹をもうちょっと……ねえ(^ m ^)

遊森 謠子

本編あらすじ（完全ネタばれ版）（前書き）

「その後のふたり」の章から読む人のための、本編あらすじです。
現代恋愛ものだけ読みたい人向け？

本編あらすじ（完全ネタばれ版）

とある小さな出版社で働く宮代璃玖（26）は、懇意にしてもらつているエッセイストの愛海（33）がファンタジー小説の世界に進出するのを楽しみにしていた。

しかし、愛海は小説のプロローグ部分の原稿と設定資料を遺して、事故死してしまう。璃玖は、愛海の担当編集者である上司の倉本鷹（30）から、遺族に返すようにとその原稿を預かつた。

ある夜、会社に一人で残っていた璃玖はその原稿を読み始めるが、突然小説の世界に引っ張り込まれてしまう。

物語の舞台はふたつ。空と海と砂浜しか存在しない海上の世界と、海の底にある珊瑚礁の城『ラグーン城』だった。

璃玖は海上で“女神（創造主）マーナ”に姿を変えた愛海と再会するが、海上と海底を行き来できるのが璃玖だけだったため、ラグーン城では『女神と会話のできる巫女』だとみなされ丁重にもてなされる。

戸惑う璃玖だったが、この世界に閉じ込められたままになるのを防ぐため、愛海が死者であることを愛海自身から隠し、またこの世界が未完の小説の世界であることを住人には隠すことにする。

ラグーン城には神官ザンがあり、愛海は彼について「弟が成長していくならこうだろ」という想像で作ったキャラクター」だと璃玖に説明する。

巫女としてザンと毎日のように会いつになつた璃玖だが、複雑な生い立ちながらも普段は穏やかで優しいザンが、時々荒っぽい言葉づかいをするのを見ていぶかしむ。また、愛海が死者であり愛海の弟もすでに死んでいるなら、この世界は『死者の世界』なのではないか、という考えが浮かび、自分もすでに死んでいるのではない

かという疑いを持つ。

酩酊しているような状態の愛海、夜の来ない世界、話していないはずのことを探っているキャラクター……数々の出来事が、璃玖の不安に拍車をかけるのだった。

ある夜、ザンから手紙で呼び出された璃玖が指定の場所に行くと、あの荒っぽい人格の彼が「自分は倉本だ」と名乗る。倉本は璃玖と異なり、元の世界にいたままでザンの視点からこの世界を見ていたのだ。

彼女を救い出せうと考え行動する彼に、璃玖もようやく落ち着きを取り戻す。

しかし一方で、毎夜ザンの人格が眠っている真夜中に倉本と会うために、『神官と巫女は恋仲である』という設定が自然発生。何も知らないザンへの態度に悩む一方で、倉本との関係を意識し始める璃玖。

そんな中、城下街の街長ナキによつて、海上と海底の行き來を自由にするための塔を建設する話が持ち上がつた。

それを知つた愛海は、塔の完成を早く見たいと言つ理由から、物語世界の時間を強制的に一年先へと進めてしまつた。

一年後の世界では塔はほぼ完成に近付いており、さらに璃玖はザンと婚約関係にあつた。仰天する璃玖は、早く元の世界に戻りたいという気持ちを強める。

また、愛海の弟は死んでおらず、幼いころに両親の離婚で生き別れ状態になつてゐることも判明。

さらに璃玖は、ザンや倉本とそれぞれ会話するうちに、同居する二つの人格が融合しつつあるのではないかという疑惑を持つ。そし

て彼女は、自分が早く元の世界に戻るか、もしくはそれを諦めてでも元の世界と物語世界の接点を断たねば、倉本まで戻れなくなるのではないかという可能性に思い当たる。

璃玖は倉本のため、「ヒロインとしての役割を終えたら戻れるかも」という愛海の言葉をヒントに、密かにある決意を固める。

結婚式の日が近づく。倉本は、愛海の心残りである「弟との再会」をどうにかすれば璃玖が元の世界に戻れるのではないかと考え、弟を探し始めた。そのため、頻繁には璃玖に会いに来れなくなる。

ある真夜中、倉本ではなくザンが璃玖に会いに現れ、完成直前の塔へと彼女を誘う。璃玖がどこか別の場所へ帰ろうとしていることに気づいたザンが、一人きりで結婚式をしようとしたのだ。

一方璃玖も、物語に閉じ込められる危険を承知の上で、ヒロインとしてザンと結ばれることによつて倉本のいない間に物語を完結に導こうとしていた。

2人が誓いのキスを交わそうとした瞬間、倉本がザンの中に出現する。倉本は、実はザンに全てを打ち明けていたことを明かし、塔の上から海上の愛海へも呼びかけて、調べた事実を告げる。それは、愛海がザンのモデルにした生き別れの弟が倉本自身であること、倉本とザンはそういう意味で同一人物なのだとことだった。

事実を知り、自分が死んでいることを知った愛海は酩酊状態から覚め、海上に本物の夜が訪れる。辛い経験の象徴だった夜の海で、現実の弟が道を逸れずに大人になつたことを知り、安心する愛海。物語には現実の裏打ちがあることを実感し、世界は何もかもつながつて循環しているのだと気づく璃玖。

女神の力を利用しようとしていたナキが乱入するハプニングはあ

つたものの、愛海は女神ではなくこの世界の住人として力を貰へすことをナキに宣言する。

そして璃玖は、ザンを内包する倉本と、ハッピーハンドの象徴であるキスを交わし、現実に戻つていいくのだった。

1 splices & sweets 前編（前書き）

実在の場所が出てきますが、ちょっと記憶が古くて（＾＾；） おかしい所があつたらいつそり教えて下さい！

「いたのか」

「わつ」

振り向いたら、給湯室の入り口に、家に帰ったはずの倉本主任が立っていた。

髪も服も、こざっぱりとしている。腕まくりしたワイシャツにズボンだけ、ネクタイもなしという軽装だ。

「璃……富代も帰ったかと思った」

「倉本主任こそ、どうしてまた会社にすでに、ラグーンから帰った月曜日の夕方になっている。もう宵の口といつていい時間。

今朝二七の世界に戻った後、疲れて眠りこんでしまった倉本主任を無理矢理たき起こした私は、彼を会社から追い出した。こんな状態で仕事なんて、絶対無理でしうこの人。病欠病欠。

私もいつたん会社を出てから、会社に『通院による遅刻』つてことにして電話を入れ、大急ぎで帰宅してシャワー浴びて着替え、昼にもう一度出社した。さすがに週始めから休むのは、下っ端としては抵抗があるしさ。

それに、倉本主任と同時に休んで色々勘ぐられたくないしね！

「休めましたか？」

聞いてみると、倉本主任は片手を首にやつて、こきっと鳴らした。

「気がついたら、山手線一周してた」

ああ。家まで保たなかつたのね。

「まあでも、家に帰つて寝なおしたけどな。そつちは？」

「私は……」

言いかけた時、足音がして、帰り支度をした先輩社員が通りかかった。

「あれ、倉本主任。具合どうですか」

「寝て食つたら回復した」

まあ、病気じゃないものね。

流し台に向き直つた私は、背中で一人の話を聞きながら、洗いかけだつたカッップを洗う。

「ちょっとやること思い出してな」

「そうですか、でも大事に」

「あ、お疲れさまでーす」

私も首をひねつて、声をかける。うーす、とか何とか言いながら、廊下を去つていく足音が聞こえた。

「璃玖」

呼ばれて反対側を振り向くと、目の前にワイシャツの胸元。顔を上げたらもうそこに、倉本主任の瞳があつた。

近いよーうわー近いよー。何なのこの、オフィスラブっぽい雰囲気。

お、オフィスラブ?

自分の思いついた単語に内心動搖して、視線をそらす。彼の手が伸びて……。

ぐに。

「…………いひやいれす」

「いや、お前がちゃんとここにいるか、ちょっと確認」

倉本主任は私の頬から手を離すと、つねつたところを親指で軽くなでた。

もしかして、それを確認するために、わざわざ?

あの世界から戻つたばかりで、精神が高揚した状態だった私は、

疲れも感じずに今日の仕事をこなし終えていた。校正用紙に赤を入れ、写真を貸し出す会社に問い合わせをし、書店からの発注をまとめて倉庫会社に指示を出す。

ほかの社員たちももちろんいつも通りで、誰も私と倉本主任があんなことになっていたなんて知らない。

まるで、ここ数日の出来事が、夢の中の出来事のようだった。でも……。

「今ので、夢じゃなかつたんだ、って実感しましたよ」
類をおさえて恨みがましく言つと、彼はふつと表情をゆるめて言った。

「夕飯、食いに行こ」

新宿駅西口の地下道を、駅方面へ並んで歩く。動く歩道もあるけど、私は自分のペースで歩く方が好きだつた。

「そういえば、やつとお腹が空いてきました」

私はお腹を押された。

「あの世界に酔つたつていうか、なんだか食欲なかつたんですね」

「昼、何も食つてないのか?」

「ゼリー飲料みたいなものしか」

私は肩をすくめた。

「ラグーン世界の食事、見事に魚介類と海草ばっかりで、最後の方はちょっとときつかつたんですよねえ」

「今頃は先生が……姉が、たぶんぶち切れて改革してるんじゃないのか? あの人、グルメだから」

「『設定が甘かつたわ!』とか言つて? 砂地で何か栽培始めてるかもしけませんね。ラツキヨウとか」

適当なことを言つたら、倉本主任は軽く声を上げて笑つた。
主任が笑つてると、久しぶりに見た気がする。

「何?」

視線が合つて、私はさりげなく前を向いた。もうバスロータリーが近い。

「いえ。そうだ、カレー！ カレー食べたいです！ 米と肉！」

というわけで東口側まで抜け、アルタ近くにある中村屋本店に入つて、インドカリーを注文した。

食器の音や人のざわめき、食べ物の香りが、やっぱり海の底とは違つた雰囲氣で私を包む。

「おいひー」

運ばれてきた熱々を、口に運ぶ。スパイスの香りが鼻に抜ける。これこれ、これよ、米と肉。これが食べたかったの。ああ幸せ！ 戻ってきたーって感じ！

「倉本主任は？ 今日はちゃんと食べましたか？」

グレイビーボートからカレーをすくいつつ、倉本主任に聞く。夕飯食いに行こうって言つたくせに、コーヒーしか頼んでない。

「さつき地元駅で立ち食いそば食つてきた」「ふーん。

「いつもそんな食生活なんですか？」

「うん……いや……」

「ご飯作ってくれるような人、いないんですか」

すぱつと聞いてみると、にらまれた。元々顔が怖いので、にらむとぞりに怖い。

倉本主任はぐつと身体を乗り出して、私に顔を近づけると、地を這つのような低い声で言った。

「いなくて悪かつたな。だいたい、お前とあんな濃密な体験をした男に、そういうこと聞くか？」

「ちょ、言い方がエロいですよ倉本主任」

私は自分の目が、どこの魚のように泳ぐのを意識しながら、続

けた。

「ご飯、作る人いなら、今回助けていただいたお礼に……」

「作りに来てくれるのか?」

「お弁当作つてきましょうか

「なんだ……」

「あ、いらないですか

「いる」

了解です。思わず笑ってしまう口元にて、スプーンを運ぶ。

「……お前にやどりなんだ」

「んん?」

「書籍部に異動してきたときは、確か彼氏いたよな」
何でそれ知ってるの。まあいいけど。

「情報古いですねえ。もう一年以上フリーですよ私

「いち……ー?」

倉本主任はカップを口に運ぶ手をとめて、私を見た。私はまた、すいっと視線をそらす。

「何だ、それならさつさと……ちつ」

何をぶつぶつ言つて舌打ちしてゐんですか、ヨウちゃん。
私はまた、笑いそうになつた。

どつちが払うかでひとしきりもめ、上司権限を振りかざされてお
びつてもううことになつた。ごちそうさまです。

一階にあつたレストランを出て階段を降り、ビルの外に出る。

新宿駅の東口側に来たら、いつもは紀伊国屋書店にまつしぐらな
私だけど、今日は家に帰つて少しばかり休まなきゃね。でも…

…。

隣のフルーツ専門店『高野』は、もう店仕舞いしていた。ショーウィンドーにディスプレイされたカラフルなフルーツを、見るともなしに眺めていると、倉本主任が言つた。

「もう一軒つき合え」

え。

「主任、私ちょっと今日は、飲めるほどの元気は残ってないです」

「いや、別腹の方」

「へ?」

1 splices & sweets 前編（後書き）

グレイビーポート…カレーを入れる、魔法のランプみたいな形をした入れ物。

ちなみに中村屋は「カレー」じゃなくて「カリーア」です。ボルシチも美味しいです。あーお腹がすいてきた。

うわあ、倉本主任、似合わない！

私は、黙々とフルーツタルトを平らげている強面の彼の顔と、女子率の高いスタイリッシュな店内を見比べた。

コムサストア内の、『カフェ・コムサ』。初めてきました。こんな時間なのに結構混んでる……意外と夜のスイーツって需要あるのね。

まるで時計店か宝石店のような形のガラスケースは、周りをぐるりと見て回れるようになつていて、大きなケーキやフルーツてんこ盛りのタルトがずらり。

ここ、普通のカフェよりもケーキ一切れが格段に大きいんだ。

「……意外なお店を存じですね」

聞いてみると、

「前に、先生……姉に聞いたことがあつて。でかいケーキが食えるつて」

そ、なんだ。

「そういえば、くらシショット甘いもの好きだつた……」

今さらながら思い返してみると、会社の誰かが旅行とか行ってお土産にお菓子を買ってくると、手を伸ばすのが早かつたような。姉弟そろつて、お酒も甘いものいける両刃なのね。

「ここに来るなら、お前と一緒にかな、と思ってな」

重々しく言う彼に、私は淡々と突っ込む。

「ていうか、女子と一緒にやないと来にくいですよね」「うう」と

「……」

私はガトーショコラを一口食べてから、店内をゆっくりと見回した。

そして、空いている席に愛海先生が座つて、フルーツタルトをおばつて「一七一二七」ところを思い描いた。

「一緒に来たかったです」

倉本主任も同じことを考えていたのか、すぐに答えた。

「そうだな」

しばらく黙つて、向かい合わせでケーキをつっこた。

食べ終わった頃、倉本主任が言った。

「送る。石神井公園だつけ」

「え、でも主任確か」

「どこに住んでるんだっけ。」

「成増」

「はい、そうでした。」

本当に私、今まで倉本主任のこと意識しないでいたんだな。今日だけで、というかこの数時間だけで、ぐらしあシュトリビアが増えた気がする。

「石神井まで来ちゃうと帰るの大変でしょう？」

「そんなに遠くない。バスあるしな」

そう言つと、彼はニヤリとした。

「家に上げりとか言わないから」

私も、さりに反論を重ねることはしなかった。今日くらいにはもう少し一緒に、戻ってきたこちらの世界を歩きたかったから。たぶん、倉本主任も同じ気持ちでいるのだろうと想つと、嬉しかった。

混み合ひ西武線の車内で、ドアの横あたりに並んで立つ。時々ぽつぽつと言葉を交わす。

でも、電車が揺れて身体が触れ合つても、夜の窓ガラスに私たち

の姿が反射するのが目に入つても、私は倉本主任と視線を合わせないようになっていた。

彼の視線を感じながら。

私の家は、駅からそれほど遠くない住宅街の中だ。すぐにアパートの下までたどり着いた。四階立てのわりと新しい建物で、一応オートロックはついてるし、落ち着いた焦茶色の外壁が気に入っている。

「いじです。……ありがとうございました」

軽く頭を下げた。

街灯が、足下に一人分の影を作つてゐる。遠くから、電車の走る音がかすかに響いて来る。

倉本主任は少し黙つていたけれど、軽く身を屈めて私の顔をのぞき込み、淡々と言つた。

「あの世界で、俺と『めでたしめでたし』って、迷惑だつたか?」

「いいえつ」

私は即座に、首をぶんぶんと横に振つた。

それは違う。絶対に違う。

「じゃ、何で今日ずっと、いじらを見ないんだ」

「ううう、それは」

ああ、やつぱばれてた。彼の瞳を見られないでいたこと。

主任の両手が私の頬をはさんで、強制的に見上げさせられる。まともに視線がぶつかって、私はうろたえた。

まづい。まづいまづいまづい。心臓爆発しそう。

「お前の瞳を見たいって、あつちでも言つただろ」

「ちょ、ちょつとタンマ」

「タンマつて古いわ！」

彼はいつたんは手を離してくれたけど、その両手をゆっくりと私の腰に回して引き寄せた。

「『巫女は処女が基本』とかいうセリフを平氣で言い放つてたくせに……何でこんなに、身体固くしてるんだ？」

大きな手が、背中を優しくなでる。

私は倉本主任の肩に額を押し当てる、下を向いてじっとしていた。これが、彼の匂い。

「タンマ終わり。こっち見ろ、璃玖」
低い声が、身体に直接響いてくる。

「ええと、白状しますとですね。み、見つめられると
「ん？」

「二人分の視線を感じる気がして、緊張するんです！」

ああ言つちやつた。バカみたい。恥ずかしい。

一瞬の間の後で、倉本主任は喉の奥でくつくつと笑い出した。「意外な弊害だな。それで今日、視線そらしまくってたのか」「……そーです。話してるうちに慣れると思つたのに」だつてまだ、記憶が生々しすぎて。ザンの優しい笑顔が浮かぶんだもの。

つて同一人物なんすけどね！ わかつてんんだけど！

倉本主任の手が、今度は髪に触れる。

「急に切り替えるのは無理だよな。ごめん。……それなら、俺が嫌なんじやないんだな？」

嫌、どころか。

私は、そつと彼の背中に手を回すと、ぼそつと言つた。
「助けてもらつて、惚れました」

急に、彼の右手が頭を抱き込むように回され、大きな手のひらが私の両手を一度に塞いだ。視界が遮られる。

「…」

ぐつ、と上を向かされ、唇を奪われた。

あの世界の、光の中のキスとは違つてリアルな感触に、身体が震える。

でも、強引なのはそこまで、繰り返されるそれは優しかった。田を塞いでいた手が外され、唇に舌をやきが降る。

「俺はずっと惚れてたよ」

自分のことを、『熱しにくく冷めやすい』って評価していたけど……今確かに、心のずっと奥で何かが揺さぶり起こされるのを感じた。

それは、あの世界からこじ切って持ち帰ってきた、大事なもの。

まともに視線が合つてしまい、私はあわてて腕を突つ張つて、彼から離れた。
田隠しキスとか！ 殺す気ですか！

「と、とりあえずこの程度から。お弁当とか。ゆつくりとその辺からのおつきあいでお願ひしますっ」

上司と社内恋愛なんて、私の手に負えるんだろうか。ホント、徐々に慣らせていただかないといと。

「不満を感じないでもないが、まあいいか」

倉本主任は、もう何もしないという意思表示のよつて、両手を組んだ。

「じゃあ、別の話。今度、姉の納骨が済んだら、一緒に墓参りに行かないか」

「あ……」

私はやつと気を取り直し、うなずいた。

「私も行きたいと思つてました。行きます」

墓前で、お礼を言いたいな。今までのことも、あの世界でのこと
も。先生、あちらで楽しく過ごしてゐるかしら。

成仏しないのに、墓前行つて意味があるのか、ヒツアレは
ナシの方向で。

「せつかくだから、宿も取るか」

「……え？ 宿？」

「わざわざ静岡まで行くんだし」

そーだつたー！ お墓、静岡！

「日帰りだつて行けますつ。それ全然『別の話』じゃないし！」

動搖する私に、倉本主任はまた軽く声を上げて笑つた。
そして、もう一度身を屈めて軽いキスを落とし、言つた。

「弁当も嬉しいけど、俺、ヒツアレ甘いもの好きだから
ぐはつ。そのセリフが甘いです！」

彼は片手を上げ、一歩下がつた。私が中に入るのを、見届けてく
れるみたい。

「……おやすみなさい」

私は彼の視線を背中に感じながら、ほてる顔を隠すようにアパー
トの中に逃げ込んだ。

くつ、何だか向こいつのペースで悔しい！

そうだ、業務連絡用に倉本主任の携帯のメールアドレスは知つてゐるんだ
よね。なんか色々と負けたくない気がするので、あとでメールして
やろうつと。

「おやすみなさい、鷹さん」

つ
て
ね。

【spices & sweets おわり】

2 千の想いをかたねて（前書き）

倉本視点です。最初だけシリアス、後はゆつくり会話をしましょう。

2 千の想いをかさねて

会社を出ると、高層ビルの合間の狭い空はすでに真っ暗だつた。明るい地下道に潜り、彼女との待ち合わせ場所へ向かう。少し遅くなつてしまつた。

ちょうど帰宅時間の地下道には、仕事帰りの人々があふれていた。朝は駅からこちらへ人々を運んでいた動く歩道も、今は駅方面へゆつたりと動いている。

この、人の流れに乗る時間が、俺は嫌いではなかつた。働く場所も内容も違う人々の間に漂う、奇妙な連帯感が。

そして、ただ流れに乗つていればいいこの時間は、自分の内面に思いをはせる時間でもあつた。

割合、自分は淡々とした性格だと思つ。いや、そういう性格を自ら形成してきた。

両親が離婚したことは、あまり覚えていない。両親の顔さえも、記憶の彼方だ。それが幼かつたためなのか、心理的な自己防衛のためなのかも、今となつてはよくわからない。

物心ついた頃には、父方の親戚の間を転々とする日々を送つていた。そんな環境では、感情の振れ幅が大きいところがない。お荷物に思われて、また別の場所へ行かされるだけだ。そのことに早めに気づく程度には、俺は老成していた。

犯罪に走る若者のニュースを見るたび、あれも一種の情熱なのかな、と冷めた頭で考えた。

周りに干渉されずにさっさと一人立ちするため、勉強に没頭した。写真家をやっている（らしい）父親から、俺の口座に気まぐれに送金されてくる金と、奨学金とアルバイト料があれば、国公立の大学の授業料はこと足りるからだ。

いざ一人立ちしてみれば、生きるのがずっと楽になつた。学生の頃のように、家庭環境と社会的な評価がイコールではない生活。誰も、俺の過去や親戚のことなど、深く詮索するものなどいない。

逆に俺も、他人には深く干渉しないのが普通になつていた。仲のいい友人もできたが、お互いの家の行き来などはしない。女性も似たようなものだ。来る者は拒まず、去るものは追わず。

子どもの頃とは違い、少しば（常識の範囲で）思うままに行動してもかまわない状況になつたけれど、常に一步引く癖がついていた。欲しいと思うものに遠慮をする必要もなかつたが、いざそうできるようになつてみれば、どうしても欲しいと思えるようなものもなかつた。

そういうところが、他人には『さばさばした性格』と取られていくようだ。プラスの感情もマイナスの感情も長続きさせない、執着心のない性格なだけなのだが。

そんな俺が初めて、表面だけでなくもっと深く知りたい、手に入れたいと思ったのが、彼女だった。

新宿駅の東口側に出ると、スタジオアルタ前は人でごつた返していた。やはりここを待ち合わせ場所にしなくてよかつた、こんな場所に彼女一人を待たせたらすぐに変な輩が寄つてくる。

指定した銀行の方へ歩く。その前に彼女はいるはずだ。

別世界から取り戻して、やっと振り向かせた彼女。早足になる。

璃玖は銀行の壁にもたれ、誰か知らない男と隣合わせで話をしていた。

「ごく普通のスーツ姿……誰かに似ているな、と思つてすぐに、その誰かが浮かんだ。あの海底の城の、リュウだ。

璃玖はすぐにこちらに気づき、にこりと微笑んだ。その笑みに何も陰りがなかつたので、俺は密かに安心する。きっと、あの男はただの知り合いなのだろう。

彼女はその男に向き直り、一人は一言一言交わした。そして彼女がこちらに小走りにやつてくる後ろで、男はこちらに軽く会釈をしてからその場を離れていった。俺も会釈を返した。

俺の腕の届くところに来た璃玖は、はにかんだ笑みを浮かべた。会社にいる時はアップにしている胸までの髪を、今は下ろしている。天然のウェーブヘアが、なめらかな頬を縁取つて揺れる。

「知り合い？」

軽く尋ねると、璃玖はさらりと答えた。

「あ、元カレです」

おい。

「あつちもこの辺で、誰かと待ち合わせですって」

「……彼女と？」

「さあ、聞きました。行きましょう」

いつもと全く変わらないドライな彼女につられ、並んで歩き出す。

黙つていると大人しそうなのに、たまにこう、サクッと切りこま

れるんだよな。

彼女をちらちらと見ていると、やがて目が合つた。最近やつと、

『俺の』目を見てくれるようになった。

名前の通りの黒く澄んだ瞳が、俺の表情を読んだ。そして、隠さず話してくれる。

「あつちが転勤する時に、別れたんです。結婚してついて行くって選択肢もあつたんでしょうけど、向こうも言いださなかつたし、こつちもそのつもりが全然なかつたし」

「……」

「さつき彼に会つても、誰と待ち合わせなのかとか全然興味がわかなかつたな。私、執着心がないみたいで」

俺と同じ自分評。どきりとする。

しかし、彼女は前を向いて歩きながら、すぐにこう続けた。

「……今までは、ですけど

また視線が合つたが、今度はすぐにそらされた。照れているらし
い。

もしも、自分が璃玖の前の恋人だつたとして。

さつきのように璃玖と話している時に、今の恋人が来たら……と想像してみた。

あんな風に会釈できるか？

無理だな絶対。視線で殺して奪い返す。

「……俺もだな

「え？」

「いや。璃玖との付き合いは、今までとは違つ、つてこと。だいたいさつきのあいつもあんな風にこっちに会釈とかできる程度の気持ちで璃玖を彼女にしてたとか一体どうこう」「

「鷹さんみたいな顔の人に睨まれたら、会釈ぐらしありますよ」

……悪かつたな悪人面で。

俺の名前を呼んだ彼女は、表情こそ変えなかつたものの、ふんわりと頬を染めていた。肌が白いので そういうえば泳げないと言つていたから、焼くこともあまりないのだらう 赤くなるとすぐわかる。

「そんな顔してると、誰かに偶然会つても言ひ逃れでき niede」

頬に触りたい気持ちを抑えて、言つた。

「『倉本主任と偶然会つて、仕事の話を聞いてもらつてたんですねー』つて？」

彼女はちょっと笑つた後で、上田遣いになつて何かを思い出すような表情をした。

「あー……吉沢さんと上田さんには、バレても大丈夫じゃないかな」同じ書籍部の、璃玖の先輩社員の一人だ。

「何で？」

聞き返した俺は、すぐに自分でその理由に思い当たつた。

「……え？ あの二人？」

「たぶん」

璃玖がうなずく。

「だつて、吉沢さんがメール打つと、その後に上田さんが携帯見てるから。そうじやないかなつて思つてたら、まあ色々と 小悪魔な笑み。俺のみぞおちのあたりで、何かがざわめく。

俺はヤレヤレという表情を作つた。

「お前さ。そういうことには気づいてるくせに、何で俺がお前のこと好きなのには気づかなかつたわけ？」

「んがつぐ

昔のサエさんみたいな声を上げた璃玖は、すぐに反撃に転じた。「倉本主任だつて。私がフリーなの、ずっとと気づかなかつたくせに」

「「」

「「」

双方、相討ち。

「ま、でもね、本当に氣をつけなきゃいけないのは静岡に行く時だと思つんです」

彼女が話を戻す。

「小彩が……あ、えーと、社内恋愛の経験がある友達なんですけど。会社の近くより、離れた場所で一人でいるのを見つかった時の方が、言い逃れができないって」

「ま、そりだらうな。先生の墓参りって言つのも、一人きりの理由としては弱いし……変装でもするか？」

俺の返事にまた笑つた璃玖は、少し沈黙してから、いつの間にか

「あのプラン、イキにしてもいいですか？」

『イキ』といつのは、いったん行つた訂正を取り消して元の状態を生かす、といつ意味の校正用語だ。うちの部署では普段の会話でも使う。

「あのプラン?」

俺が聞き返すと、彼女はまっすぐ見つめ返してきた。

「静岡でお泊まり」

「……おう」

わけのわからない返事をすると、彼女は真面目な表情で言った。「長い時間一緒にいればいるほど、お互いのことが良く見えるつてもんですよね。私、鷹さんのこともっと知りたいし、鷹さんにも私

のことを知りて欲しいと思つて。いいですか？』

『決まつてゐる。すぐに宿を取るよ。……別に、今日俺たちに泊まりに来てもいいんだけど？』

低くささやくと、璃玖は瞳をきらりと転がせて、

『あ、明日予定があるからダメ』

だそうだ。相変わらずドライな奴。彼女は続ける。

『スポーツジムに通うことにしてたんです。泳げるようになつたくて！』

まあ、あの世界で泳げなくて苦労したもんな。

『そうか。頑張れ』

……そして俺と会う時間はさらに減つていくわけだな。などと子どもじみたわがままは言わないが。

気がついたら、過去や、日々の仕事で凝つっていた俺の中の部分がほぐれ、気持ちがくつろいでいた。

こうして日々、会話を交わすたび、俺と彼女の空氣が少しづつ溶けあつていいく。千の言葉、千の触れ合ひが、居心地のいい空間を作つていく。

俺は軽く彼女の肩を叩いた。

『とにかく、軽く夕食済ませよう。その後、お前のお勧めのケーキ屋に連れてってくれるんだろ？』

彼女は手首を上げ、細いシルバーのブレスレット風の腕時計に目をやつた。

『あつそつそう。夜十時までだから急がなきや』

そうして俺たちは夕食後、ルミネエストの『HARBS』で、デイナーフォークがケーキ用フォークに見えるほどでかいフルーツミルクレーべを堪能した。

食べながら俺が、

「そう言えばさつきの彼、リュウに似てたな」と言つたら、璃玖がフォークを取り落としていたが、今俺は気分が良いので、そこは突っ込まないでいてやろう。

【千の想いをかさねて 終】

2 千の想いをかさねて（後書き）

Mille crêpes【ミルクレープ】：「千枚のクレープ」
二人が重ねて行く千の想いの間には、どんな甘々なものがはさま
つてるんでしょうねえ。

『イキ』の他に『トルツメ』なども、普段の生活で使える校正用語
それと、ちょっとぴり別の物語とリンクしてみました(^ m ^)

3 小説集【お弁当はやねむる】（前書き）

内容は拍手お礼小話的なのですが、拍手画面に載せると他作品に拍手さった方にネタバレしてしまうので、これからはやめました。倉本がやや可愛め。

3 小話集 【お弁当はやめよう】

【お弁当はやめよう その1】

彼女が、弁当を作つてくれるようになった。

もちろん毎食を外で食べる日もあるし、彼女の都合もあるので、その辺は前日の夜に連絡を取りつつ週に一回程度。朝、会社に行くと机の下に紙袋に入れて置いてあるのだが、買つてきた弁当に見えるように使い捨て容器に入つてゐる所が、芸が細かい。

俺は微妙な幼年期を過ごしたので、弁当らしい弁当を誰かに作つてもらつた記憶がない。妙にこそばゆいが、嬉しかつた。

ちなみに俺が気に入つたのは、オムライス弁当。ケチャップ多めのチキンライスを、薄焼き卵で包んである奴。

「ああ、あれ簡単だからまた作りますよ」と璃玖はあつさりしたものが、実は俺が心の中で、弁当じゃなくて田の前でなら半熟トロトロのオムライスも作つてもらえるのかな、などと夢想していることを彼女は知らない。

そんな日々が始まって一週間が経つた、ある夜のこと。新宿西口、思い出横丁某店にて。

「お弁当作るの、やめましょ！」

「もう！？ 何で！？」

「だって、私と同じ内容のお弁当持つてたら、おかしいじゃないですか。バレちゃうでしょ。まあこれからやめましょ！」

「……えーとだな。誰に？」

「？」

「俺とお前が一緒に食べないのに、誰が一つの弁当の内容を見比べ

るんだ?」

「おお「おお

おおつて。

といつわけで、とりあえず弁当は続行となつた。ふう。

【お弁当はやめよう その2】

「スーパーとかでや。フリーズドライの食い物、売ってるだり
「ありますねえ。インスタントのお味噌汁とか、お菓子に入つてゐ
イチゴとか」

「あの『フリーズドライ』ってこいつ文字を見ると、璃玖を思い出す
んだよな」

「はい?」

「まあ、ドライなのは璃玖で、フリーズするのは俺なんだけどな。
ははは」

「.....」

「.....」

「（二回つ）お弁当こらなになら、やつ言つてくれればここ
「すみませんでした（滝汗）」

【お弁当はやめよう その3】

静岡行きも迫つた、ある夜のこと。新宿歌舞伎町、元コマ劇近く
の洋食屋にて。

ドライな彼女の無情な一言、再び。

「お弁当作るの、やめましょつ

「また！？ 今度は何で！？」

「だつて最近忙しくて、なかなか会社でお昼食べられないじゃないですか。作つても、夕方まで食べられなかつたりすると傷むし。出先に持つて行くには、お弁当大きすぎて邪魔だし。ひとまずやめましょう」

「う……」

「でも……ね。代わりに、はい、これ」
小さな紙袋を渡された。軽くて硬い感触。

「ビスコッティです。お菓子ってあまり作つたことないんだけど、割とうまくできたので持つてきちゃつた。日持ちするし、そこそこの腹持ちもあるから、お腹が空いた時につまんで下さい」

連絡事項は終わつたとばかりに、アイスティーのストローをくわえる彼女の、頬が少し赤い。

「……甘いな」

「え？ あ、健康のこと、気にし始めるお年頃ですか？ あの、それ一応、てんさい糖で作ったから、身体にはいいと……」

お年頃つて。

俺は手の甲で、彼女の頬を撫でる。

「お前の存在が、俺には甘くて幸せだつてこと

「じほつ」

口元を隠してむせる彼女。

……これ、早く食いたいな。

4 シュガーグレイズド 前編（前書き）

行間に色々なものをたっぷり含ませて書いた、つもり……。璃玖と鷹の交互視点です。

4 シュガーグレイズド 前編

車窓の景色は、飛ぶよつに過ぎて行く。新幹線に乗ったのは久しぶりで、スピードで身体が軽く座席に押し付けられる感覚さえ、心地よい高揚感を誘つた。

十月最初の土曜日、「ひかり」の車内。これから、静岡県にある愛海先生のお墓に向かうところ。昼には浜松駅に着くかな。

窓際の席でしばらく外を眺めていた私は、軽く腰を浮かせて座り直すと、隣の席に田をやつた。

発車するなり、倉本主任 鷹さんは、すぐに寝入つてしまつた。担当していた本が昨日校了で、さすがに疲れているらしい。月末も重なつたしね。

私が彼の寝顔を見るのは一回田だけど、一回田も小説の世界から帰つてきた時だから、疲れた寝顔しか見てないことになるな。

そんなことを思いながら、眠つている時はやや『悪人度』が下がるその顔立ちを眺め そのまま視線を下にずらした。

私の手は、しっかりと彼の手とつながっていた。

ついわつきこの人は、

「いつもはこんなことしないけど、今日はいいよな」とつぶやきながら私の右手の指と自分の左手の指をゆっくりとからめ、こちらを見てちょっと笑つてから田を閉じて、

「今のうちに寝とく

などと言つてそのまま寝つてしまつたのだった。

うう……なんか照れる。私、あんまり外で恋人といぢゅいぢゅし

たことないタイプでして！

それに何よ「今のうち」って？

そんなことを考えだしたら手が汗ばみそうで、私はペいつと彼の手を離した。鷹さんは軽く眉間にしわを寄せたけど、起きる気配はない。

あーもー、利き手を取られると何もできやしない。ねえ。

あ、車内販売のワゴン來た。

「すいませーん、「一ヒー下さい」

「一ヒーゲットして、持つてきた文庫本を開いて、オーケイ平常心カモン。

でも結局、視線は本の上をつるつる滑って、ページがちつとも先へ進まないのだった。

姉の墓は、浜名湖の近くの市営墓地にあつた。彼岸も過ぎた墓地は人気がなく、開放感のあるその場所は深閑としている。午後の陽射しに、彼岸花の赤だけが華やかだった。

姉は俺たち姉弟の母親と同じ墓に入つたため、墓石にはもちろん母方の名字が刻まれている。俺自身はその名字を名乗ったことがないでの、それを見ても血のつながりを感じるようなことはまるでない。

「……姉が、ペンネームを名前だけにした理由が、わかるような気がするな」

俺がひとり言のように呟ぶやくと、手を合わせていた璃玖が立ち上がり、俺の隣に身を寄せた。

「鷹さんを探すのには、かえつて……」

それだけ言って、彼女は口を閉じる。姉以外の故人も眠っている場所だからか。

「いいんですか、お母さまの親戚に、弟だつて名乗り出なくて見上げて尋ねてくる璃玖は、軽くごぶしを握つてみせた。

「乗り込むならお付き合いでしますよ」

俺は思わず、軽く吹き出した。

「今さらいいよ。姉の遺産を狙つてるとでも思われるのが落ちだ。それに、形見の品はもらつたからな」

俺は、手にした大判の封筒を軽く上げて見せた。姉の小説のプロローグ部分と設定資料、それに俺が子どものころに描いた地図が入っている、あの封筒だ。これを形見として俺のものにする許可を、墓前で得ようと思つて持つて来ていたのだ。

璃玖は顔をほこりばせた。

「そうですね、賢明です。その顔で乗り込んだら警察呼ばれちゃう」「一言多い。……それにしても、ずいぶん長いこと手を合わせてたな

言つと、彼女は真面田へむつた顔でこいつ言った。

「先生を呼んでもした。化けて出てくれないかと思つて」

「あ?」「

「だつて」

璃玖はちょっとあたりを見回して、人気のないのを確認してから言つた。

「先生はあの世界で幸せに暮らしてゐはずで、成仏したわけじゃな

言つた。

いんだから、ひちりの世界に化けて出でくれるかもしれないじゃないですか」

墓場の真つただ中で、何とこう会話か。

「ちなみに璃玖、怪談とかは」

「大好きです」

即答の彼女に、俺は軽くため息をついた。

小説の世界でも堂々としたものだつたし、俺の恋人には怖いものはないのだろうか。まあいい、ゆっくりと探し出してやる。

「さて……今から移動すれば、ちょうど宿にチェックインできる時間かな。行こうか」

促すと、璃玖は足元に置いたトートバッグを手にして肩にかけながら、含み笑いをした。

「ウェルカムスイーツとか出るといいですねえ？」

こいつがこんな風に軽口をたたくのはたいてい照れ隠しだ、と、さすがに最近はわかつてきた。俺は横目で彼女を見る。

「そうだな。今ちょっと俺、甘いものに飢えてるから」

ふーん、という感じで、彼女はさりげなく視線をあそつての方へ投げた。今度は俺が、含み笑いをする番だった。

鷹さんが取つてくれた宿は、落ち着いた雰囲気の湖岸の温泉宿だつた。変に気取つたところじゃなくてホッとした……たぶん私と鷹さんは、こういうところの好みが似ていると思う。

チェックインを済ませてから夕方まで、二人で浜名湖沿いを散歩した。シーズンオフなのでお客さんも少なくて、普段人波にもまれ

ている身にはすがすがしく感じられる。湖面を渡つて来る風は、ほのかに金木犀の香りがした。

「すぐそこが、あの海なんですね」
見上げると、鷹さんの横顔がうなずく。そつ、幼いころの愛海先生と鷹さん姉弟が、ご両親の離婚で離ればなれになる前に一人で見に行つたという夜の海。その海岸が、この近くなのだそうだ。
「でも、行くのはやめておこう。何だか、ウミガメが迎えに来そうな気がする」

「うわ、ありやう」

私は思わず彼の言葉に同意してしまった。

というのも、あの世界から帰つてから何度か、ウミガメくんの背に乗る夢を見たことがあったからだ。それだけ強烈な体験だったといふことかな。

今もある世界があるのなら、うつと、あると信じているから、何かの拍子にあの世界に行つてしまいそうな気がすることがある。心配をかけそだから、鷹さんにそんな話をしたことはなかつたけれど、きっと同じような感覚なのだろう。

彼は少し力を込めて、私の肩をぎゅっと抱いた。捕まえておこうとでもいうよつこ。

夕食の前に温泉を楽しんでから、浴衣をまとう。女性には宿が浴衣を選ばせてくれて、落ち着いた柄が好きな私は、紺地に白の桔梗を選んでいた。

鷹さんは私を見て何て言つかな、と思つたとたん、温泉から出た後にもかかわらずのぼせそくなつたけど。

で、ね。

夕食が部屋食で、仲居さんが給仕してくれるわけですがね。私たちをカップルとして扱ってくれるのですよ。そりやそうなんだけど。いつもは関係をオープンにしていない身なので、なんかもうそれが恥しくて恥しくてしょうがない。

だいたい、今まで一人で何度も夜に外食したけど間接照明のお店が多くて、こんなぴつかりと明るい和室で差し向かいつて言つのも落ち着かない。

そこへさらに、

「浴衣、すごく似合つよ」

などと彼が褒めてくれるので、反射的にまぜつかえした。

「そういう鷹さんもす」「ぐく似合つてて、丁半賭博を始めそつです」

「褒めてんのかそれ

すいません。顔が顔なので和服姿になると迫力がありすぎて。あ、辛子色が秋らしいな……って浴衣しか褒めてないか。

彼は、そういうえば、と続けた。

「あれも似合つてたけど。あの世界での格好」「げ」

あの、巫女の装束！？ 肩と胸しか隠れてないような短いピタTですか！？ かなり恥ずかしかったんだよねあれ……愛海先生の趣味だろうけど。

「あの時は、結構やばかったんだよな」

「何が？」

「別人の身体の中にいるんだから、と思つて自分を抑えてた訳だよ、

俺は「

それだけ言つて、彼はお猪口をあおつた。

……「ひは、お酒なしでも酔いそうです。

食事の後、せっかくなのでもつ一回温泉に行つてから部屋に戻つてみたら、明かりが消されていた。行灯だけがほのかに室内を照らしている。

何ですかこれ演出ですかこれ、と突つ込む間もなく並べて敷かれた布団の上に座つていた鷹さんに、

「おいで」と呼ばれた。

あの世界に助けに来てもらつた時、彼が私を大切に思つてくれているのを、その言葉や行動から感じていた。

でも今夜は、言葉がなくとも、それを全身で強く感じて。ものの数分で『照れゲージ』が振り切れてしまつた私が、「お、お味はいかがですか？」

などと茶化すと、彼はちょっと顔を上げて、

「この間一緒に食つた、何だつけて白くてふわふわした。フロマージュ何とか？ アレみたいだ」

聞くんじゃなかつた……よけい恥ずかしくなつたよ。

「無理にスイーツに例えなくともいいです

「甘いんだからじょうがないだろ」

こんな私が、今、甘いんだとしたら。それはきっと、この人に甘くされたんだと思う。

溶かしたお砂糖で、真つ白にくるまるるみたいに。

キスの雨が降つてくる。雨の一粒一粒が集まつて、流れになる。

そのうねりに、私は幸せな気持ちで身をゆだねた。

気がついたら、私は透き通った青に包まれていた。

ラグーン城の世界だと、すぐに気がついた。

でも、以前訪れたときと違うのは、私が水の中にいて呼吸ができるているということ。身体が自然と動いて、前に向かって泳いでいる。後ろを振り向こうとした時、何か白いものが目に入つた。なんと、今度は愛海先生ではなくて、私の足が白い蛇のような尾になつているのだった。

眼下に、ラグーン城とその城下町が広がっている。そこは以前よりもはつきりと、色彩豊かになつていた。何か稻の穂のようなものが波打っているのも見えるし、魚の群れも以前より多い。街も人が増えて賑やかだ。私がいたときよりも、ずいぶん豊かになつたみたい。

すいすいと飛ぶように泳いでいくと、すぐ目の前にイ・ハイ山がそびえ、頂上に白いねじりキャンディのような塔が現れた。塔の外壁に沿つて高みへと加速する。自分の身体が発光しているので気づかなかつたけど、陽光らしい光は見えず、海上は暗いようだ。

加速した勢いで、イルカのように海の上に跳ねた。

海上は夜だつた。明るい満月が、水面を銀色に照らしている。

そして、塔のてっぺんには、愛海先生が腰かけていた。目が合つと、にっこりと笑いかけてくれる。

幸せそうで良かつた、と思いながら、私は再び頭から海に飛び込んで行つた。白く細かな泡が、視界いっぱいに広がつた。

はつ、と田を見開いた璃玖が、びっくりしたような顔をして瞬きをした。

その表情で、俺はすぐに気がついた。彼女が今、どこか別の場所から帰つて来たことに。

真夜中だった。俺と璃玖の泊まつている、宿の部屋。枕元の行灯が、和紙を透かして穏やかな光を投げかけている。

何となく眠れずにいた俺は璃玖のすぐ隣で片肘をついて、もう片方の手は彼女と指をからませたまま、彼女の穏やかな寝顔を眺めていたのだ。

大丈夫なのかと内心緊張しながら、目を開いた彼女の様子を確かめる。彼女は少しあたりを見回して現状把握してから、俺を見て微笑んだ。

「わたし、いつしました？」

「馬鹿」

俺はため息をつくと、転がりながら彼女の腕を引いて、身体を胸に乗せた。彼女の右手がぎこちなく動く。力が入っていたため、指がこわばっているらしい。

「大丈夫なのか？」

「はい。先生に会つちゃつた」

やつぱりか。俺は彼女が落ち着いた様子なのを見て、やつと安心して言つた。

「びっくりした。またあっちの世界から戻れなくなるかと思つた」

「それは大丈夫、いつも……」

「『いつも』？」

ちょっと「しまった」という顔をする璃玖。いつもこんなことが起きてるのか？

彼女は何でもないように答える。

「あれから時々、ラグーン世界の夢を見るんです。でも鷹さんのことを考へると、すぐに夢から醒めるの。今回はずいぶんリアルな夢だつたけど、同じでしたよ」

俺はしばらく考へてから、彼女がやつと外して握ったり開いたりしていた手をもう一度とつて、俺の首に回させた。抱きしめて、耳のそばでささやく。

「璃玖。一緒に暮らそうか」

「へ？」

彼女が焦った様子で顔を上げた。俺の言葉が本気なのか冗談なんか、量つていてる視線。

「俺の存在が璃玖をこちらへ呼び戻すなら、夜も一緒にいた方がいいだろ。もうどこかへ行かないようにな」

俺は、真面目に言った。

すると彼女も、真面目な聲音で答えた。

「ばれる確率が格段に上がりますよ。そしたら、一緒に部署にはいられないと思つ」

それは、俺も考えたことがあった。

他の部署で、部内恋愛の末に結婚したカップルがいたが、女性の方が異動になつた。うちの会社はそういう慣例がある。

「私、少なくとも今は、書籍部にいたい。好きな仕事なんです」「うん」

確かに彼女には合つてゐる仕事であり、社風だと思つ。

俺は璃玖に両腕を回して、すっぽりと抱きしめた。

「そのことなんだけど……ちょっと考へてみ」ことがある。璃玖にしわ寄せが行かないようにするから

「え？」

「もうちょっと、色々固まつたらいいよ。……じゃあ、そういうマニアス条件がなくなつたら、一緒に暮らそうな

「決定ですか！？」

「決定。相性いいし」

何のですか何の、と言いかける璃玖の唇を、俺は柔らかく塞いだ。

そんな甘い夜が明けた翌朝。チエックアウトを済ませ、そのまま帰るのもなんだからどこかに寄ろつかと言つ話になつたのだが。

「この辺だと遊園地とか……」

と何気なくつぶやいたら、彼女の瞳がきらりと光つた。

「遊園地でもいいんですか！？」

「え、何、好きなのが遊園地」

「大好き。絶叫系が」

来たよコレ。

「…………却下」

「え！？ 何で！？」

「だつてお前、昨夜より明らかに幸せそうな顔してる。気にくわな
いから却下」

「そんな、比べられませんよ鷹さんと遊園地は！ 鷹さんがスイー
ツなら絶叫系はカレー？ ほらどうちも美味しい。選べない」

「何だそれムカつくぞ。じゃあ昨夜みたいに『鷹さん、おねがい、
おねがい』って言つたら付き合つてやる」

「鷹さんお願ひお願ひ！」

「軽つー。」

へん、やつぱつこいつこには勝てる気がしない。

【ショガーグレイズード オウツ】

4 シュガーグレイズド 後編（後書き）

遊園地……浜名湖パルパルのこと

新宿高層ビル街の中でも、その特殊な形から「三角ビル」の愛称で知られる住友ビル。

年も押し迫ったある金曜日、上階の某和食系居酒屋にて、わが書籍部のメンバーによる忘年会、兼、送別会が行われていた。宴もたけなわ、部長を始めとする十人ちょっとが、個室の和室でわあわあと盛り上がりしている。

私はウーロンハイのグラスを傾けながら同期の友達と世間話をしていたけど、頭の片隅では別のことを探えていて、半分上の空。その上の空の原因は、今日送別される当の本人なのだけれどね。

「さて、それじゃあ最後に、今日の主役に一言いただきましょうか！」

なぜか仕切り役を買って出ている先輩社員の上田さんが拍手を始め、ぱらぱらと他のメンバーがその拍手に続く中、主役が立ち上がる。

倉本主任 鷹さんだった。

鷹さんは今月で、うちの出版社を退社するのだ。

「じゃ、『手短に行くぞ』！」

彼の最初の言葉に、何人が笑う。私も思わず口元を緩めた。

「新卒で入社してから八年、書籍部に異動してからは五年お世話になりました。版元の「は」の字も知らなかつた自分ですが、多くのことを学ばせてもらつて感謝しています」

上座を向いて軽く頭を下げる鷹さんに、俺に足向けて寝るなよ、と部長が応えて場が和む。

そんなだけた別れの言葉を聞きながら、私は数週間前のことについてをはせていた。愛海先生のお墓参りに静岡に行つた、その少し後のことだ。

「会社、辞める？」

私は紙カップの「アービーを倒しそうになつて、あわてて両手で支えた。

「うん。前から考えてはいたんだけど、知り合いから仕事の話をちらつてな。ライターの仕事でやつていけそうなんだ」

鷹さんは早くも、ドーナツを一つ食べ終えている。え、本当に早っ。

退社後、例によつて私たちは会社の外で合流し、夕食を軽めに済ませてから甘いものを食べに来ていた。今日は新宿南口、クリスピーカリーム・ドーナツ。平日なので思つたよりは混んでいない。

「この、ガツンと甘いのがいいんだよな」

という鷹さんは、「ケーキ食つて『甘さ控えめで美味しい』とか言つ奴は、ケーキなんか食つくな」という極論をお持ちの甘党。そうは言つても、さすがに毎日は食べたりしてないみたいだけね。

「元々、自分で何か書く仕事はやりたいと思つてたんだ。姉と似てるかもな」

そう言つて紙カップを傾ける彼は、何だか活力にあふれている。

私が今の会社を志望した動機は、この会社が出している本が好きだからだけど、鷹さんは会社自体に思い入れがあるわけではないのだそうだ。まず出版業界に関わり、そこから先をどうするかを常に考えていたらしい。

それなら、私は応援するだけだ。

「一つ目のドーナツに手を伸ばす彼を見ながら、私は頬づえをついて言った。

「そうですか……この会社、何年ですか？」

「八年かな」

「十年だったら退職金の額が違ったのに、残念ですね
現実的な話をする私に、鷹さんは苦笑する。

「お前ね。俺はあと一年も待つ気はないよ」

言葉の裏にあるものを視線に乗せつつ、彼は言った。

「どこに住みたいか、考えといて」

そう、もしも社内恋愛が公になると、片方が異動になる慣例がうちの会社にはあったため、私たちは一人の関係を秘密にしていました。割を食うのは経験の浅い方、そして女性であるということもまだ根強く影響するであろうことを、鷹さんは考えてくれたのだ。

「そういうマイナス条件がなくなつたら、一緒に暮らそう」と言われたのは、ついこの間。い、一緒に暮らすって！？

そもそも、私は未だに鷹さんを自分の家に上げたことすらない。男性に限らず、誰かに家中を見られることは、私にとってとても恥ずかしいことだった。

だって、物の配置のひとつひとつ、皿やカップのひとつひとつで、自分の精神面をさらけ出してしまつ気がするんだもん。あと、本棚のラインナップとかね！

そんな話をしたら鷹さんは、

「璃玖って本当に、見かけによらず恥ずかしがり屋だよな」と面白そうにしていた。見かけによらず、は余計です。

それなのに、私たちが一緒に暮らしてゐる所を想像すると、ああああ。

彼はさりげなく

「あ、一緒に暮らす前に、璃玖の『ご両親にも会っておきたいな』なんて言つので、私はもうお腹いっぱいになってしまって、顔が赤くなるのを」まかすように自分のドーナツを両手で彼の前に押しやつた。

「どうぞ」

「……いや、さすがに俺も夜にドーナツ三つは……」

「私もう、しばらくなのはいらないかも」

「え、ちょ、どうこうの意味?」

言葉を深読みしそぎてあわてる鷹さんを微笑ましく思いながら、私はブラックコーヒーを飲み干すのだった。

上に話を通した鷹さんがついに辞めることが決まり、その日が近づくと、ドライな私にもさすがに寂しい気持ちがじわりと湧いて来た。

鷹さんが仕事を他の人に引き継いだり、自分のデスクを整理したりしているのを見つめてしまつて、あわてて仕事に戻ることもあつた。

そんな私の様子に気づくと、私が仕事で外出した時などに、鷹さんは携帯に電話をくれた。

『どこか遠くに行くわけじゃないんだから』

『いえ、何だか変な気分なだけです。もう『倉本主任』とか『くらシシ』って呼べなくなるんだな、と思つたら』

『そのひお前が『みやッショ』って呼ばれるのかな』

うげげ。昇進しても、鷹さんにそんな風に呼ばれるのはなんか嫌だ。

「や、やめて下さこよ。璃玖って呼んで

思わずそう言つたら、電話の向こうが一瞬沈黙。そして、渋い低音の声が優しく響く。

『……なんか今、来た。『璃玖って呼んで』つていいな』

あわわわわ。

「も、もう切りますよ?」

『璃玖。今夜会える?』

「仕事次第です! わかりません!」

『俺の家、来いよ』

「話聞いてます!?」

そ、そ、う…………それで初めて、成増にある鷹さんのアパートに行つたんだつた。

いかにも寝に帰るだけという感じで、家具の少ない部屋だつたけど、本棚だけは立派で本がぎっしりだつた。

一緒に暮したら、一人分の本で大変なことになりそん…………と思つたら、少し未来を想像することができた。

「…………といつわけでライター業頑張るので、仕事回して下さい。優先的にやらせていただきます。ギャラはびた一文まかりませんけど」和やかな笑いに包まれて、鷹さんの短いあいさつが終わろうとしている。

同期の女の子が「ねえ」一次会出る? とひれひそ話しかけてきて、そちらを向いていた私は、次の鷹さんの言葉で注意を引き戻された。

「あー、最後に、私事だけど言つておきたいことが

皆が注目する中、彼がまっすぐに私を見た。

……嫌な予感がした。

「富代璃玖さん。俺と付き合つて下さー」

一瞬のうち、その場は一気に騒然となつた。

「怒るなよ」

「……怒つてません」

「じゃあ、照れるなよ」

「無茶言わないで下せこみつ」

都庁近くの陸橋から車の流れを見下ろして、私は顔のほてりを冷まさうとしていた。ため息をつくと、白い息がふわりと風に流れて行く。

こんな顔じや、恥ずかしくて電車にも乗れやしない。それなのにこのひとは…

「一石二鳥だと思つたんだけど?」

鷹さんは私の頭をくしゃりと撫でた。

「これでいっぺんに周知徹底できたから、俺が辞めた後、璃玖に手を出そうって奴はなかなかなくなるだらうじ。ついでに今日の一次会に出ないで済んだし

そう、会社の皆さん、「後は若い一人で…」と笑顔で送り出されてしまひました。あああああ…

そりや、一番いい形だとは思いますよ、はい。

会社在籍中に二人の関係がばれて、どっちかが異動する話になつ

てから鷹さんが辞める辞めないって言いだしたら、すぐく感じ悪いし私もいたまれなくなっちゃうけど。辞めるのが決まってから私に……」、告白しました、っていう形なら。

恥ずかしいけどね。ええ、恥ずかしいですけどね！

「はあ……来週どんな顔して出社すればいいんですか。いつも、告白されたけどお断りしましたってことにした方が気が楽」

「おいおいおいおい」

突っ込む鷹さんに背を向けて、夜空を仰ぐ。高層ビル群の衝突防止灯の赤い光が闇に浮かび上がり、そのゆっくりした点滅のリズムが、私の心を落ち着けてくれた。

ようやく彼を振り返ると、私は右手を出した。

「嘘です。よろしくお願ひします」

鷹さんは口の端を上げて、私の手を取った。そして、その手を引いて私を胸に抱き寄せた。

もう、見られても構わないんだもんね。私は鼻先を、彼のコートの胸にすり寄せた。

「明日、さつそく物件探しに行く？」

「告白の翌日に？」

顔を見合わせ、思わず噴き出す。

「実際には夏から付き合つてゐるのに、変なタイムラグができたな

「それはおいおい埋まつていきますよ」

私は身体を傾げて彼を軽く押し、駅の方へ促した。

そうだ、両親に会わせる話もあつたけれど……と考えながら、私はふと鷹さんに尋ねてみた。

「あの……鷹さんのお父さまって、今は

「さあ。俺は知らないよ」

「そうですか」

鷹さんが何の感情も含めずに答えたので、私もそれ以上は聞かなかつた。今は、この話をする時ではないような気がして。代わりに、別のことを見つた。

「……明日物件見に行くなら、今日せっつこ泊まります？」

鷹さんが驚いた顔になるのを眺めながら、明日の朝のコーヒーはとつておきのモカマタリを開けちゃおう、と決める。

昨日されたその日に上司をテイクアウトなんて、私もなかなかやるじゃない？

【C o f f e e & Dougnuts おわい】

5 Coffee & Doughnuts (後書き)

タイトルは、2人で食べる朝ご飯のイメージです(^ m ^)
ラグーンと乳母さまのバナーを作つてみました。アルファポリスさまのPR画像として載せてきたので、良かつたら下のボタンをぽち
つと押して見に行つてみて下さい

新居に『倉本・富代』という表札を掲げると、私は鷹さんと顔を見合わせた。ちょっと照れ笑いをすると、鷹さんも田元をほころばせた。

去年の会社の忘年会でいきなり恋人宣言（？）されてから、実はもう一ヶ月が経っている。一緒に暮らそうという話になつたものの、結局その後二人とも繁忙期に突入して、なかなか物件を絞り込む所まで至らないまま時間が過ぎちゃったんだよね。

年明け、松の内も過ぎて世間が落ち着いたころに私の両親には紹介したけど、実際に引っ越すことができた今日は、もう一月の下旬だ。

小雪が舞う中をやつてきた新居は、荻窪の「ロクの賃貸マンション」。私の弟に車を借りて、それぞれ一人暮らしで使つていた家具を運び込んだら、ひとまずの体裁は整つた。

私の方が一人暮らし歴が短くて家具や家電も新しいので、私が持ち込んだものの方が多い。特にキッチン用品ね！ 鷹さんって本当に料理は壊滅的らしくて、「切るだけ」とか「焼くだけ」しかしないで来たらしい。

段ボール箱からお皿やコップを取り出しつつ、

「イマドキの男子は料理ができないとモテませんよ」

つて言つたら、電子レンジのコードをつないでいた鷹さんに

「モテて欲しいのか？」

つて切り返された。

ウッ、と詰まつたら鷹さんが笑う気配がして、背後から腕が腰にまわり……つてこらこら、引越しが終わらないでしょ？が、作業作業！

初めて行く慣れないスーパーで、目指す商品の売り場を一人でいちいち探し回りながらこまゝこました物を買つて、本格的に雪が降り始めて大急ぎで帰宅した。東京はちょっと積もつただけでも交通機関が大混亂になるから、会社が休みの日で良かつたよ。早々にお風呂に入つて疲れを流し、鷹さんが残りの片付けをしている間に夕飯の支度をする。恋人の気配を感じながら作る食事は、変な話、ちょっと緊張感があつて失敗しそうだ。

夕食の卓を挟んで向かい合つと、鷹さんが一缶のビールを二つのグラスに分けて注いでくれた。半分こ……これだけで照れてしまつ。あーだめ、今日はもう何もかもに照れる！

「よろしくお願ひします」

「いらっしゃいぞ」

しゃちほこばつて乾杯した。

引越しそばの代わりに作つたうどんすきを、ふうふうやりながら食べる。視線を上げると、何度も鷹さんの優しい視線とぶつかる。何か大事なことを話しかけられるな、この雰囲気は……と思つていると、果たして鷹さんが口を開いた。

「あのわ……何で『結婚』じゃなくて『同棲』かつて、思った？」

口の中の春菊を飲み込むわずかな時間で答えを考え、私は返事をした。

「少し。でも、同棲で良かつたです」

「何で」

自分から言いだしたくせに、鷹さんはちょっとムッとした顔。

「そりやあ、色々ですよ。会社の人から見たら、私たちまだ付き合い出して一ヶ月ですし、今は鷹さんは仕事をある程度安定させたいでしょ？ それに、お互いを知るための同棲つてしてみたいと思ってました、私」

鷹さんは、私特製の鶏団子を口に放り込んでもぐもぐやつてから、

「お前のお母さんに聞いたよ。お母さんが璃玖に『何で結婚じゃなくて同棲なの?』って聞いたら、『同じ釜の飯を食つてみないと、相性なんてわからない』って答えたんだって? 色気がなくて済みません、って謝られたぞ」

ちよ。おかーさん、私が席を外した時に何をしゃべってんの。

「つ、でもホントにそう思つてますから」

「同じ釜の飯つて……せめて『一つ屋根の下』とか何とか、もづちよつと表現がさ」

言ひながらも、鷹さんは強面の顔をほほえませた。

「でも、俺みたいな生い立ちの男と暮らすことについて、先に璃玖が説明しておいてくれたから話しやすかつたよ。これで少しずつ、社会復帰できるかな」

「社会復帰?」

聞き返すと、鷹さんはうなずく。

「ああ。俺はとにかく早く一人立ちしようとして就職して、自分の生活のためだけに働いて来たから、仕事がらみの人間関係しか作つて来なかつた。でも璃玖に出会つてから、璃玖の周りを取り巻く社会にも溶け込みたいと思つたんだ。……そうでないと、お前を俺のものにできても、いつかお前を『こっちへ引きずりこんでしまつと思つたから」

私は思わず手を止めた。

しばらく付き合つてみて気づいたのは、鷹さんはプライドの高い人だということだ。

愛海先生と鷹さん姉弟の両親は、離婚した時にどちらも鷹さんを引き取らなかつたため、彼は親戚中を転々として育つてゐる。現在は、親戚とはほとんど連絡を取つていないようだ。

そんな過去を背負つているのに、彼は自分の弱さをあまりじりけり出すことがない。弱みを見せると強者に食われると思つてゐる、野生物のように。

今のはそんな彼が漏らした、心の声の一部、だろ？

「結婚つて、家と家の結びつきでもあるだろ？俺みたいなのがいきなりそういう世界に飛び込むのもさ。まともな親戚づきあいなんでしたことないからな。だから、璃玖の家族とまず知り合えて、よしここからだ、と思つたわけだ」

鷹さんはビールを飲み干すと、微笑んだ。

「だから、まずは同棲」

『まずは』？『ここから』？その先があるつて宣言されたような『コレって、プロポーズみたいなものじゃないの！？

私はどうしていいかわからなくなつて、

「あつ、あつ」

とか言いながらうぶんをする方に専念する」とした。顔が赤いのはうぶんが熱いからですよ、つと。

それから、一人で食卓を片づけて、一人で流しに並んで食器を洗つて。

ただの家事なのに、一人が一人になるところなにも違うんだ……つて内心感動しながら横を見たら、鷹さんが口元を引き結んで明らかにニヤニヤ笑いを押さえこんでいるのがわかり、思わず吹き出した。

それから、「新居での初めての夜だし、もう少しあと飲もうか」つて鷹さんが誘ってくれて。

灯りを落とした部屋、カーテンを開けて外を眺めながら、雪見酒に……酔つた。

そんな風にして二人の生活が始まったんだけど、鷹さんを見てびっくりよ。フリー・ライターって本当に何でもやるんだね！

例えば、自然農法についての本を作るのを手伝うことになつて、実際に農地で畑作業をしたり。

お酒関係の雑誌の、創刊号の記事を知り合いに頼まれて、「コンセプトがはつきりしないので口出したしたら企画段階から参加することになっちゃつたり。

某大手企業の会長さんの自伝を作るにあたり、本人から書き書きするので、会長さんの自宅のある長野に長期出張しちゃつたり。かと思えば家にこもって、溜めこんでしまった請求書をひーひー言いながら作つてたり。

お酒や食べ物がらみの仕事が多いなあと思ったら、愛海先生を通じてできた人脈が生きてるんだって。

「俺、すごく価値のある遺産をもらつた気がする」と、鷹さんは毎朝、チエストの上で微笑む愛海先生の写真（著者近影）に勢いよく手を合わせてから出かけて行く。

写真の後ろには、あの原稿の入つた封筒が立てかけてある。

家族以外の人との初めての生活は、洗濯物の干し方一つに違いを感じて戸惑つたりもしたけど、桜が咲くころにはすっかり馴染んだ。そのころ、私も初めて作家さんに担当としてつくことになつて、お互い忙しくて休みが合わないことも多くなつた。

でも、夜にお互いの体温を感じながら眠る時、鷹さんは満足そうに「忙しくても、お前のいる場所に帰れるつて、いいな」と安らいだ顔をしている。

あまり家では仕事の愚痴はもらさないけど、それも彼の性格だし、私があまりマイナスなことは言わない方だから似ているのかな。ここで安らげているなら良かつた……と、私も幸せになる。人の幸せで自分も幸せになれるのって、素敵なことだ。

五月になつた。実は鷹さんの誕生日だ。こゝそり彼の運転免許証を見て誕生日がいつなのか調べてあつたので、サプライズで大きなケーキを作つて用意した。

私つてこんなこともやつちやうんだ！？ と、自分の『テレ加減』に途中で我に返つて悶えまくり、製作をやめよつたと思つたけど。耐えろ私！

夕食の後でテーブルにどーんとケーキを置いて、照れ隠しに早口で「誕生日おめでとう」

と言つたら、鷹さんは少し呆然として私とケーキを見比べた。

そして、表情を変えないまま、ぼそつとこう言つた。

「俺、ホールケーキ食うの、初給料で自分で買つた時以来だ。……甘いものを食べたい時に食べられるのつていいなあと思つて、買つたんだつけか……」

そして、くしゃつとした笑顔を見せた。

「……ありがとう」

美味しい美味しいと言いつつ、切り分けもしないで直接フォークでホールケーキを食べている鷹さんを見ながら、私は自分のしでかしたことの大ささに驚いていた。

鷹さんが甘いもの好きなのは、子どものころに食べられなかつた反動？ 誕生日をケーキで祝つてもらつたり、大人にお菓子をねだつて買つてもらつたりつていうことをしてないからなの？

私は言葉に迷つた挙句、こう言つた。

「全部あげるから、好きなだけ召し上がれ」

鷹さんの瞳が獣のそのように光り、フォークが音を立ててテーブルに置かれた。

いやー、思いつきり引き金引いましたね私。彼が『全部』

『好きなだけ召し上がる』つたのは、ケーキだけじゃなかつたですよ。

長い夜を過ごし、半分意識を失うようにして眠りに落ちていく私

を抱きしめて、鷹さんが耳元でさわやかのが聞こえた。

「来年の誕生日も、楽しみにしてる。あ、その前に璃玖の誕生日か」指をからめながら夢うつづに聞く未来の話は、まるで大事な約束のよう。

「ふふ……でも……そいつてくれるのに、あれから一度も結婚の話はしていない、ね……？」

結婚の話を思い出した時、心に引っかかったのは、鷹さんのお父さんのことだった。

再び、夏が巡って来た。関東地方もいよいよ梅雨明けだと、今朝の一ニュースが伝えていた。

会社の昼休み、私は携帯電話を耳に当てながら廊下の窓際に立ち、街路を眺めた。エネルギーッシュな陽光に木々が濃い影を落とすのを見ていると、あの不思議な夏を思い出す。

『予定通り、今日帰るからな』

電話の向こうから、鷹さんの声が届く。今回はなんとワイン関係の雑誌のつながりで、取材がてら山梨にブドウの収穫のお手伝いに行っているのだ。今日でもう五日目になるけど、彼は律義に毎日電話をくれていた。

『土産、何がいい？　ワインは山梨もうたんて、昨日さつちに送つといたけど』

『山梨と言えば、桔梗信玄餅！』

『ああ、了解。あれ美味しいよな、きなこに黒蜜……』

『ふふ、鷹さん今、頭の中スイートになつてる？』

『璃玖、少しば寂しいとか思つてる?』

と、鷹さん。

当たり前だよ。一緒に暮らし始めてから、一晩に長い間離れて

いるのは初めてだし。夜に電話で話した時なんか、切つた後どれだけ寂しいかわかつてゐる？

「思つてますよー」

それなのに、つい何でもないよひながりつと言つてしまつ……私も可愛くないな。

『怪しいもんだな……帰つたら確かめてやる』

ど、どうやって確かめるつもりですか。怖つ。

「何時頃、到着の予定ですか？」

『うーん、夜九時にはなるべく早く帰るよ』

私は電話を切ると、軽くため息をついてから顔を上げた。

九時、ね。

全力で仕事を片付けたら、金曜日なのにもかかわらずどうにか定期ちょっとと過ぎに会社を出ることができた。買い物をしてからマンションに帰りつき、部屋の空気を入れ替えながら買って来たものを冷蔵庫に入れる。窓を閉めてエアコンをON、それからシャワーを浴びて部屋着に着替える。

夕食の下ごしらえを済ませると、私は時計を見た。あと一時間しないうちに、鷹さんが帰つて来るはずだ。

部屋の隅のチェストの前へ行つて、愛海先生の写真の前に立つた。

鷹さんがするみたいに、ポン、と両手を合わせる。

「先生、これから、そちらへお邪魔したいんですね。よろしくお願ひします」

写真立ての後ろに立てかけてあつた封筒を手に取り、中から鷹さんが子どものころに描いた地図を取り出す。封筒は元の位置に戻した。

足のない一人掛けのソファの片方の隅に地図を置き、その上にクツションを置いてこりこりと横になつた。鷹さんが帰つてきた時に、ちょっとうたたねしてしまつた、という風に見えるよひながりつ。瞳を閉じるとすぐに、頭の芯が痺れたようにぼうつとなつて、私

は眠りの海に引き込まれていった。

次に目を開いた時、視界は青く染まっていた。コポコポという小さな音とともに、気泡が上へと上がつて行く。ぼんやりした明るさの中を、魚の群れが横切つた。

身体を起こしてみると、青い光に満ちた円形の部屋。そこは、懐かしいラグーン城。私がフィッシュボウルと呼んでいた、あの天井のないホールだった。

「璃玖さん」

声がかかつて振り向くと、愛海先生が奥の段差に腰かけて笑っていた。白いサリーのような服が青く染まり、裾がゆらゆらと揺れて、まるで人魚姫のしつぽみたい。ん？ しつぽじやなくてヒレか。

「先生、お久しぶりです！」

私は嬉しくなつて駆け寄つた。うわ、気がついたら私も、あの露出の多いピタットと巻きスカートの格好になつてるう。もう巫女じやないつてば。

「会えて嬉しいわ。でも、こんなところに来て大丈夫？」

愛海先生はくつきりとした美貌を少し曇らせて、隣に座つた私を中心配そうに見た。何だか、この世界の住人になつたせいか『女神度』が上がりつてるような気がする。

「鷹さんにバレたら怒られるから、出張中の時を狙つて内緒で来ちゃいました。きっと、彼が帰つて来たら連れ戻してくれると思います」

言つと、あらあら、と愛海先生は苦笑した。

「ここまで来ちゃうなんて、よほど強く願つたのね。何か私に、聞きたいことがあるんでしょ？」

私はうなずいて、話し始めた。

「聞いて頂けますか？ 私、今、鷹さんと暮らしていく……」

「鷹さんは子供のころの辛かったことをほとんど忘わせないし、時々過去の話をしてくれるけどそれだって淡々としていて。私の親や弟家族ともっと知り合いたいって言つて、時々一緒にご飯食べてくれたりもして、積極的に関わってくれます」

私は鷹さんとの生活を感じたことを、先生に話した。

「それで、じゃあ私にできることって何だろう……って考えてしまつて。もっと鷹さんに過去をさらけ出して頼つて欲しい気もするし、でもいざやうなった時に私なんかに受け止められるのかと思つたら、そんな自信もなくて。……本当は、鷹さんのお父さんにも会つてみたい」

「父に？」

愛海先生が、軽く首を傾げる。

「はい。……一緒に暮らすことになつた時、鷹さんはきちんとどうちの親にあこがれてくれたんです。『フリーの仕事をしてはいますが、璃玖に迷惑をかけるつもりはありません、見ていて下さい』つて。でも私の方は、鷹さんのお父さんにあいさつどころか、会つてすらいない。探すには、鷹さんの親戚をあたつたりして、彼の過去に触れることになる……それは鷹さんが望まない気がして」

私が見ると、鷹さんはもう過去を振り切つているよう見えるのだ。

「私は、親と子が断絶状態にあるのを見ると、これじゃいけないんじゃないかっていう気がしてしまうんです。でも、そんな考え方は何の不自由もなく大人になつた者の傲慢なのかな？ 私、どんな風にうえたらしいんでしょ？」

先生は優しくうなずいた。

「親子が仲良しなら、それはとてもいいことよね。でも……父は、

母と離婚した時に、『幼い子どもは足手まとい』という子どもにはどうしようもない理由で、鷹を捨てた人。そんな存在にすがりつくよりも幸せになる道を、鷹はもつ見つけている。そうでしょう？

私を指さして、一つウインク。ああ、先生のウインク久しぶりだな。

「だから璃玖さんにも、前だけを見て欲しいと私は思うわ。時々、弟の過去が顔を覗かせても、それを笑って蹴っ飛ばして欲しい。璃玖さんはそういう強さがあると思う……そこに弟は惹かれて、安心してそばにいられるんじゃないかな」

鷹さんは、自分が私を「引きずり込む」んじゃないかと心配していた。それなら私にできることは、引きずり込まれないこと。うつん、もつと積極的に、私の方に引きずり込んじゃえればいいんだ。心が決まった。私は先生に笑いかけた。

「ありがとうございました！ よし、やつちやうど」

「あり、何を？」

先生が言った時、ファイッシュュボウルに射しこむ光が少し強くなつた。

「ほら、弟が呼んでるわ」

見上げた愛海先生の視線を追つて顔を上げると、青い光がだんだん白く明るくなってきた。あの、頭の芯が痺れるような感じが再び沸き起こる。

「先生っ、あと少しだけ！」

私はとつたに、先生の手を握った。先生の姿が、まるで涙に滲むよみにぼやける。

「お父さんの代わりに、お姉さんに聞いて欲しいんです！」

「はいはい、なあに？」

「弟さんを、私に下さい……っ」

朦朧としながら言うと、先生の笑い声が遠くから聞こえてきた。

「父の代わりに、一発ぶん殴つたらいいのかしら？」

「…………ふひ」

思わず噴き出したとたん、低い声が降つて來た。

「ほら」

はつ、と田を開くと、鷹さんの顔が真上にあつた。

びっくりして起き上ると、いつものマンションの部屋だつた。カーテンが開いたままの窓はもつまつ暗で、部屋には煌々と明かりがついている。鷹さんはソファの背もたれ越しに、私の顔を覗き込んでいた。

やつぱり鷹さんの存在が、こちらへ引き戻してくれた。嬉しくなつて、えへへ、と鷹さんに笑いかける。

「何を楽しい夢見て笑つてるんだ。やつぱりお前、全然寂しくなかつたんだろう」

少しへスッとした顔をしてるのは、演技？ 私は立ち上がつた。「お帰りなさい！ 会社から急いで帰つて、ずっと待つてたんですよ。ちよつとウトウトしちやつたけど」

すると鷹さんは、真面目な顔になつて言つた。

「……何か隠してないか？」

す、鋭い。でも、心配をかけたくない私は受け流す。

「何でそんな」と言つんですか、隠し事なんかないのに。すぐ夕飯にしますから、シャワー浴びて来て、ね？」

いぶかしげな顔をしながら鷹さんがお風呂場に消えると、私は急いでクッショングラウンドから地図を取り出して、チエストの上の封筒の中に戻した。証拠、隠滅。

冷蔵庫に仕込んであつた鶏肉と野菜の南蛮漬けを出して切り、後は春雨のスープで簡単に夕食にする。私が山梨の様子を尋ね、鷹さんが答えてくれるんだけど、私はこの後で鷹さんに話そうと思つていることを頭の片隅でずつと考えていて、少し上の空だったかもしれない。

鷹さんがお箸を置いたタイミングで、切り出した。

「あの……お話があるんですけど」

彼は唇を引き結んで私を見つめ返してから、言った。

「……何」

あれ？ 何だか圧迫感を感じる。

「な、何でそんなに構えてるんですか」

「久しぶりに会った恋人が隠し事してて、話があるって言われて、ビビらない男がいるか？」

まさか別れ話だと思つてる！？

彼にまた孤独を味あわせるなんて、一瞬でもしたくない。私は大急ぎで口にした。

「『富代 鷹』になつてくれませんかっ」

鷹さん、固まつた。

「…………何だつて？」

「一緒に暮らし始めた時」

私は一気に言つた。

「私を『こっち』に引きずり込みたくない、って言いましたよね。だから、私の方に引きずり込みたいと思つて。富代ワールドに。け、結婚して下さい」

そして私はハツとした。

「あつ……プロポーズなのに指輪忘れた……」

いや、ないものは仕方がない。それより鷹さんは何て答えるだろう。

う。

鷹さんが吹き出した。

「ぶつ……くくつ……は、はつ」

「鷹さん。私は真面目です」

テーブルに両手を置いて言つと、彼は「悪い」と不意に立ち上がり

つてチエストの方へ行つた。そして、愛海先生の写真の後ろからあの封筒を手に取つた。

「あつ……『ごめんなさい、黙つて』

ラグーンの世界に一人で入つたことがバレたのだ。あせつて先に謝ると、鷹さんは封筒の後ろから何かを手に取り、封筒はまた元の位置に戻してから振り返つた。

「『黙つて』？……あ。さてはお前の隠し事つて……それでこれがポストに入つてたのか」

テーブルに戻つて来た鷹さんがトンと指を置いたのは、宅配便の不在票。

「今日の十九時半に荷物が来た時に不在。それなのに『ずっと待つてた』って言うから何を秘密にしてるのかと思つたら、また先生の所に行つてたんだな」

「あー！ しまつた、そういうえばワインを送つたつて電話で言つてたつけ！」抜かつた。

「えつと、ちょっと先生に相談があつて……」

服の裾をもじもじやりながら鷹さんをうかがつと、彼はホツとため息をついた。

「相談した結果、俺にプロポーズしてくれたんなら、まあ……今回は見逃す」

そして、静かに言つた。

「ずっと、迷つてたんだ」

迷つて……そつか……結婚しようつて気にはなつてなかつたんだ。

私は下を向くと、無理矢理笑つた。

「そ、ですか。『ごめんなさい、プロポーズは忘れて下さい』

「いや違うつて。お前とのことを迷つてたんじゃない」

あわてたように彼が言つるので顔を上げると、彼はチエストの上から持つてきたものを机の上に置いた。

小さな箱だつた。中身を予想することができ大きさ。私の身長

だと、あんないじりにそんなものが置いてあったなんて気づかなかつた。

鷹さんの手が伸びて、私の手を取つた。

「倉本、つていう名字は、父方の祖母の名字だ。俺のことを『仕方なく』引き取つた人の名字。俺が『仕方なく』名乗つていた名字」

鷹さんが、箱を開ける。

「そんな名前、お前に名乗らせたくなかつた。でもそいつすると、プロポーズつて難しいんだよな。『結婚してくれ』つて言うのはともかくとして、『俺を富代 鷹にしてくれ』つて言うのもなんだか決まらないし。いい言い回しはないものかと迷つてるうちに、先を越された」

今度は私が笑う番だつた。そんなことで悩んでたの？

「でも、指輪は俺の担当」

私の左手の薬指に、シンプルなデザインの細いリングがすべり込んだ。リングの中央で、澄んだ輝きが光を弾いた。

宅配便の荷物は受け取れなかつたけど、鷹さんが今日買つたというワインを一本持ち帰つていた。彼がコルクを抜くのを待ちながら、ソファに座つて指輪のはまつた自分の手を眺めていると、

「ほれ

と入れ物を手渡された。

「え、何ですか？ これ」

手の中には、持ち手のついた燭台のような形の銀色の杯が光つていた。足はなく、深さは三センチもない。

「タートヴァン、つていうそうだ。ワインのきき酒に使うもの。これを使って試飲できる場所が、山梨の勝沼にあるんだ」

鷹さんがワインをそこに注ぐと、杯の底に作られたいくつもの凹凸が光を反射して、ワインの赤が鮮やかに映えた。

「きれい！」

色を楽しんでから、そつと口をつける。今まで飲んだどんなワイ

ンよりも、美味しい気がした。

「物のお土産も嬉しいけど、ソフソフ……雰囲気を持ち帰ってくれて、嬉しい」

華やかな香りに包まれてうつとりしながら鷹さんを見ると、ソフトアの隣に座った彼はタートヴァンを持った私の手に自分の手を添え、一口呑んだ。

「うん、美味しい。そういえば……」

彼は宙に視線を浮かべる。

「ワインと食事の組み合わせのことを、マリアージュって言うだろ。あれはフランス語で『結婚』っていう意味だけど、元々は理想的な結婚生活みたいに『お互に』を一層高め合つ』っていう意味だつて、聞いたな」

私はもう一口飲んでから、鷹さんの肩に頭をのせて言った。

「それをプロポーズにすれば良かつたのに」

うつ、と彼が黙る。私は思わず笑った。

「もー、鷹さんはツメが甘いんだから。あ、甘いと言えばワインと甘いものって意外と合うんですね。信玄餅は？」

「もちろん買つてきたけど……明日にしないか」

スイーツを後回しにするなんて珍しい……と思つたら、あごを持ち上げられて、唇が柔らかく重なつた。

私はそれに応えながら、そつと手を伸ばしてタートヴァンをロートーブルに置くと、彼の身体に腕をまわした。

そう、確かめてもらわなきや……私がここ数日、どんなに寂しかつたか。それに、これからも一緒にいられると知つて、どんなに嬉しいか。

その夜は、お菓子なしでも、十分に甘い夜だった。

それから、一年の月日が流れた。

「うつそ、あれ在庫かなりあるでしょ？ わかつた、どうせヒマだからこれから手伝いに行くわ。うん、うん。大丈夫。じゃあ後でね電話を切ると、私は鷹さんの部屋に行つた。開け放してあるドアから中をのぞくと、彼は机でノートパソコンとにらめっこしている。

最近私と鷹さんは、仕事の関係ですてきな児童文学作家さんと知り合つた。そこで、二人で相談して、あのラグーンの物語を児童文学として出版できないかと申し出てみたのだ。元々あの物語は、愛海先生の作った大元の設定だと小学校高学年の女の子の冒険ファンタジーだから、その形で世に出せたら素晴らしいと思つたから。

その結果、なんと鷹さんが原作者として名を連ねることになった。彼は予想外だつたみたいで、四苦八苦しながら取り組んでいる。でも、あれは彼の物語もあるから、私は自然なことだと思う。

まあ、『富代 鷹』　富代の名前が載ると思うと、照れちやうけどね！

「鷹さん、ちょっと朝霞の倉庫まで出かけてきます」

「倉庫！？ 何で！」

ノートパソコンの前で、鷹さんがパッと振り向いた。

「ほら、法律の改正に合わせて、うちの本も内容を修正しなきゃいけないやつがあるって話したでしょ。修正シールの貼り付け作業、人手がいるから手伝つてきます」

「何で璃玖まで。やつと産休に入ったと思ったら、まだ仕事するつもりか？ そんなお腹で」

「シール貼るくらい、お腹大きくてもできるもん」

九ヶ月に入つたお腹をポンと叩くと、鷹さんは苦笑して立ち上がつた。

「仕事人間の『みやッショ』め。わかつた、俺も送りがてら手伝つ。

ちゅうじ煮詰まつたところだ

一緒にマンションの外に出ると、梅雨の晴れ間の日差しが降つて来る。昔は夏は苦手だったけど、あの夏からは大好きな季節になつた。

私たちの初めての子どもは、びっくり女の子らしい。海の似合ひ、眩しい季節に生まれてくる。

【for my sweet 完】

6 for my sweet 後編（後書き）

「その後のふたり」はこれにて完結です。読んで下さってありがとうございました！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4764u/>

イマジネーション・ラグーン

2011年12月15日23時12分発行